
墮典・女神転生

緋々色金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墮典・女神転生

【Nコード】

N1081B

【作者名】

緋々色金

【あらすじ】

過去に起こるべきだった、世界の崩壊。有りもしないはずの悪魔召還プログラムの謎。全ての謎を帰結させる為に生まれた伝奇ストーリー。

一節 残照風景 - D r e a m - (前書き)

11月18日(日曜日)

いろいろな所を修正しました

一節 残照風景 - D r e a m -

残照風景 0 0 - D a y D r e a m -

????年???月???日???時

私の周りは何処を見ても崩壊を連想させる瓦礫の山しかなかった。

死んだ世界。

血液を思い描かせる夕日が世界を覆い、昔存在したと言われる緑豊かな大地を思い描くことが出来ないほど、大地を荒廃色に染め上げていた。

風はどんよりと濁り、数歩先の景色でさえ私の目の情報を書き換え、ノイズの映像を見せる。風に吹き上げられた砂嵐はまるで子蟻のようにも見え、一定以上の時間ソレを見ていると吐気がしてくる。

荒れ果てた大地は死んでるようにしか、私の目には映らない。裂傷を負った地球の表面は夕日に染め上げられ、血を流しているようだった。

吹き荒れる砂風の中をゆっくりと前に向かって歩いていく。その度にジャリジャリと水分を無くした砂たちの悲鳴が聞こえる。

この世界には私一人なのかと思想に暮れる。長らく不毛な大地を踏みしめているが、人の声どころか人影すら確認できないでいる。

大地を見ても私以外の足跡は見当たらない。勿論降り積もる雪の

よう砂嵐が足跡を消去している可能性もある。この砂嵐さえなければ、もう少し辺りを明瞭に見渡せることが出来るだろうに……。

かなり遠方に見えるはずの夕日は、私を焦がすような暑さを放ってくる。私は自然と自分が羽織っている防塵マントを強く握り締める。

マントがなければ強い日差しですぐに、大地へと体を捧げる事になるだろう。そうなければ強い日差しは私の肉を焦がし、水分を奪い、私を天へと帰す。無論、私は行った事の無い天に帰りたいなどとは思った事も無い。

ふと、私は自分が何故このような場所に居るのか疑問に思ってしまう。一体何処を目指して、この重くなつた足を……この痛みを訴える足を向かわせていたのだろうか。

私は到達地点を探すべく、砂嵐の吹き荒れる中で目を凝らす。多くの巨木のようなビルが何本も大地に根付いている。今まで気にもしていなかった……と言うよりは気づいていなかったそれを見て、私はあまりの凄惨さに度肝を抜かれそうになる。何があったのだろうか大半以上のビルはその原型を留めていなかった。

ある巨木は木こりに切り倒されたのだろうか、真つ二つになり半身を大地へと落とし、また半身はひび割れた胴体を天に突き出している。あるコンクリートの巨大な箱は熱で溶けたように、ドロリと半身を溶かしていた。

隕石襲来？原子力爆発？はたまた酸性雨？多くの破壊と破滅が脳裏をよぎる。

ここは自分が住んでいた街なのだろうか。見覚えのあるビルもあり、私は記憶を探りこむ。しかし記憶に残っていないようなビルは朽ち果てた姿で己を提示し、私の記憶の中のビルに該当するようなビルは残っていないかった。残念なのかそれとも安堵したのか、複雑な気持ちで周囲に気を配る。

確かに私は何処かを目指していた。自分の足で、自分が自分の行為に気が付くまで、ある一点を目指していた。『私は何処に行けばいいのだろうか・・・』。乾いた口を開ける。言葉を発するはずだった、開いた口に砂嵐がここぞとばかりに砂利を運んでくる。たまたらず口を閉じるが既に遅く、ジャリジャリと歯が砂を噛み潰す音が体内から聞こえてきた。

口内の砂利を忌々しく思い、疎ましさ体が支配する。陽気を通り越し熱を与えてくる邪気溢れる夕日を、私はにら睨み付けるように天を仰ぐ。夕日が照っている中、霞がかった夕日が横一文字に黒い影に両断された。

なんだろうか？私は疑問に思いソレを凝視する。果たしてその一文字の影は大きくなっていきそのまま地上へと落下した。

砂埃が舞う中、影は私の数歩先に着陸していた。降り立った影は美しい・・・羽を背に持っていた。

羽を持つ影は・・・光の使者だった。体からは太陽の分身のように光を溢れさせ、私に存在を強く訴えかけてくる。

天使か・・・？私を救いに来てくれた天使なのだろうか・・・。
この荒れ果てた世界に降り立ち私を助けてくれるのか・・・。

私はそう思い・・・一直線に

後ろへと走った。

何故！？私は自分自身の行為を疑問に思った。それはそうだ、古来より天使は我ら人間を救ってくれる聖なる神の使い。それなのに私の目には彼の美しい天使が・・・恐ろしい悪魔にしか見えなかった。

恐怖がが身体を縛り上げ、心臓を緊張が打ち鳴らす。足は自身の思考と連動せず、まるで「ピノキオ」のような走り方になってしまふ。逃げ出さなくてはならないのに体は硬直し、先ほどまで私を目的地に運ぶ為に動いていた足は、既に私の相棒ではなくなっていた。

私はそのまま前のめりに倒れて、薄汚い死んだ大地へと無様に身体を捧げていた。

恐怖心は更に強まり、背後にある存在を感じ取る。私は不自由になりつつある体全体に力を込め、無様に転んだまま全身を羽を持つモノに對し向けた。

羽を持つモノは嘲笑いながら私の方へゆっくり歩いてきて・・・何かを喋っていた。

砂嵐のせいか羽を持つモノは何を言っているのか分からない。しかし分かっていた。

分かっているのに頭の中の情報量ではあのモノの言語、幻理げんりが理解できないのだ。

羽持つモノは私の態度に怒りを覚えたのか、先ほどまでの笑みを殺し、醜い憎悪に燃えた瞳で私に襲い掛かってきた。

いや、襲い掛かってきたと言うのは語弊なのかもしれない。何故ならば目の前の羽持つモノは手をスイと横へ凧いただけなのだ。まるで赤ん坊をあやす様な優しさで、風を切り、大気を撫で上げた。

でも・・・それだけで 私の『命』と呼ばれる『0』と『1』で構成された情報は、ゆっくりと消えようとしていた。

私は自分の首が跳ね飛ばされるのをゆっくりと他人のような目で見ている。

ボスツと言うクッションに物を落したような、乾いた音。羽持つモノの理解できない小さな呟き。

すべてがまるで映画のワンシーンのように、スローモーションで流れていく。あらん限りの声で悲鳴を上げるが、私の声は銀幕へは届かず蚊帳の外で響くのみ。夕焼けの荒野の中、首無し死体が生まれ、大地には悲しいほど似合わない『人間の頭』と言う『花』が咲いていた。

むせ返る様な『ざんしょうふうけい残照風景』の中、一人天使が愉快そうに羽を揺らしていた。

一節 残照風景 - D r e a m - (後書き)

KeyWord

> 真・女神転生^{ゲーム}<

1992年10月30日に発売されたRPGゲーム。

堕典はこれを元に書かれています。

宗教めいた世界観とLAW（法律）とCHAOS（混沌）のぶつかり合いを描いた

センサーシヨナルな作品。無論作者もこの作品に強い思いを持っている。

尚、作中に出てくる神の批判めいた感想はあくまで『物語中の人々のそれぞれの思い』であり、

実際に存在する団体等とは一切『本気』で関係ありません。

> 夢<

睡眠時に生じる、ある程度の一貫性をもった幻覚体験。

多くの場合、視覚像で現れ、聴覚・触覚を伴うこともある。

非現実的な内容である場合が多いが、夢を見ている当人には切迫した現実性を帯びている。

尚女神転生好きなら分るかもしれませんが、真は1〜3まで全てが夢から始まっていると言う

意味深な内容を持っている。

一節 残照風景 - The・Hero - (前書き)

死と再生の夢から覚めた『居神心』は・・・。

一節 残照風景 - The・Hero -

1999年10月30日（金曜日）

そろそろ秋から冬へと変わる季節の中、東京都目黒区の住宅街。人々が住まう家屋の一つでとある少年が夢から目覚めようとしていた。

部屋の中の暗闇を切り裂くように、朝日が差し込んでいる。部屋の中はヒーターも空調機も設置されておらず、寒い空気が広がっている。

少し冷えた部屋の中、ベッドの上の少年が自分の上にかかった布団を押し上げながら、緩慢な動作で起き上がる。

少年が愛用している白いスーツのベッドはじつとりと湿って、もとの暖かで柔らかな布団を連想することが出来ない。その原因は少年が異状にまで少年の肌を伝う汗だった。秋中頃だと言つのに、汗を全身にかき白いパジャマを肌に張り付かせていた。

額にうつすらと光る汗をぬぐい、先ほどまで垣間見た『死』の瞬間を明確に思い出す。

全身にかいた汗のせいか、それともあの『夢』のせいか少年にはわからないが、ひとつ身震いを起こす。

少年が見た夢は荒廃した世界を延々歩き続ける夢。

そこには赤い太陽があり、崩れた廃墟、淀んだ空気、死に瀕した

大地。そして・・・彼の目の前に降り立った『翼有る者』。その直後拭いきれない少年の突然の『死』。

少年はこの夢をもう数年も見続けている。とは言え毎日のように見るわけではない。時折忘れかけた時に、何者の仕業か『思い出せ』と言わんばかりに強制的に見せられる。

夢の中で少年は『死』を迎える。そして、夢から覚めると言う『生』を受ける。夢を見るたびに『人の一生』を体験してしまう不条理な体感ゲーム。

死が訪れ闇へと誘い、生が少年を目覚めさせる。夢と現実を行き来する事で、もはやトレーニングのように生と死を体験させられる。そのトレーニングに名前をつけるとするならば『輪廻転生訓練』と言っても言えば良いのだろうか。

少年が体をゆっくりと休めていると、寒気により体の汗が乾いていく。風邪を引きそうなくらい体温を奪われていく。

そんな眠そうな動作を繰り返している少年の耳に、耳障りな機械音が聞こえてくる。寝ぼけ眼まなこだった目が、驚きの感情とともにパツチリと開かれる。完全に開ききった視界で周囲を探し、電子音の正体を見つける。少年は撫でる様に電子音を響かせる『目覚まし時計』に手を置き、もういいよ。と言わんばかりに音を止める。

そんな朝の儀式的な動作を済ませ、少し冷えた体でベッドから這い出る。ベッドに入っていた下半身が、肌寒い空気に身を引き締められる。

少年はまだ少し汗で湿るうなじをかき上げながら部屋を見渡す。

フローリングの簡素な部屋。少年の体躯にあつたような少し小さめの勉強机と、その反対に少年より大きいベッドが一つずつあるだけ。彼が読む本や教科書の類は本棚などは使わず、勉強机にすべて収納されている。テレビやコンポも無く同年代の男子が見れば驚きを隠さないだろう。

少年はそんな部屋を見ていつも言われている事を思い出す。

少年はいつも兄に心配されている。この部屋もその一部に入る。幾度と無くもう少し洒落つ気をだしたらどうだ、とかもう少し衣服にも気を配れ、など心配・・・と言うよりは注意に近い小言をよく言われている。

少年も「大きなお世話だ」などとは決して言わない。思ったことも無い。自分の稼いだお金じゃないのに、お洒落をしたり部屋の不必要になるかもしれない備品を買ってくるなんて、そんな自己満足の為に他者のお金を使ったりはできないと言う信念があつた。故に兄の進言は実行できずにいた。

学校の友達に黒い学生服を改造したり、ピアスの穴を開けたり髪の毛を染めたりと自分磨きに余念が無い。しかし少年の外見は自分改造をまったくやっていない自然素体である。

柔和な雰囲気を出す顔。ともすれば少々育ちきっていない童顔が、男子の顔を女子と見間違わんばかりに助長してしまっている。髪は黒くいつも商店街にある理容室で適当に整えてもらう、ナチュラルカット。

そんな中性的な少年の名前は『居神心』^{いがみしん}と言った。

（学校・・・）

少年ココロがそう言おうとしたのだが、まるで口の中に砂利を含んでしまったような感覚に襲われ、言葉が出ずにいた。一抹の不安がよぎる中、まるで現実逃避するように学校の事を脳裏に描く。

（ああ・・・そうだ、学校。行かなきゃ。うん）

まだ多少眠気の残る顔を振り、ドアフックに掛けられた学生服にゆっくりと手を伸ばしていった。

ココロはゆっくりと自分の部屋がある二階から、一階にあるリビングへと降りていく。

少年の住まう家は小さくなく、そして大きくもない。目黒の住宅街に建つ並よりは少し上位になる一軒家。その家の食卓があるリビングに、ココロの兄『居神光太郎^{いがみ こうたろう}』が規律正しい姿勢で椅子に座り朝御飯を食していた。

兄が食すは美しい銀色に輝く白米と、塩辛さが最高の調味料の塩鮭である。そんな日本人の最高級の食事はムツリと懨然顔の男に食されていた。光太郎は降りてきたココロを見やり、朝一番の挨拶を贈る。

「おはよう、ココロ。今日はまた一段と起きるのが遅かったな」

開口一番。非難と挨拶をいり交えた言葉をぶつけてくる。そんな言葉にココロは内心しょぼくれながら兄の顔を見る。

居神光太郎。職業目黒署に勤める若き刑事。中性的なココロとは正反対に男らしい、キリツとした表情が女性に人気の男性で、切れ長の目に掛けられた小さな眼鏡が妙な知的さを溢れさせる。ココロにとって自慢の兄であり、また頭の痛くなる兄だった。

「兄さんだつていつもは、もう少し早めに朝食を食べてるじゃない。もう8時前だよ?」

少年も言われてばかりではられない。挨拶とほんの少しの非難をブレンドし、兄に贈る事にした。ココロの言い分は尤もで、リビングでテレビを見ながら朝食を済ませている光太郎は非常に暢気そうに見える。

「兄さん、仕事遅刻するんじゃないの?最近忙しいんでしょ・・・遅刻したら起こられるんじゃないの?」

忙しかろうと忙しくなろうと、遅刻をすれば社会的に問題ありとして怒られるのが当然である。そんな意味の含まないココロの質問めいた非難は、朝食を黙々ととり続け実の弟の言葉が届いていない兄に向けられる。

一度もこちらへ返事を返してこない、実の兄に少し腹を立てた少年は今一度話しかけようとし、

「朝の挨拶をしない男に、返す言葉なんて無いと思わないか?ココロ」

そんな兄の子供染みた言葉に反撃されてしまった。

「・・・おはよう、兄さん」

「ああ、おはよう」

朝の挨拶をしぶしぶとするココロに、光太郎は満足いったムツツリ顔で頷いていた。

そんな朝の挨拶の後、しばらくしてまた朝食を粗食し始める光太郎をココロは尻目に、リビングの隣にあるキッチンの冷蔵庫へと向かう。朝の栄養素である牛乳を取り出し、食器棚からカップを持ってきて光太郎と向かい合わせになるように食卓に座る。

兄の光太郎は日本の朝食を。弟のココロは外国の朝食を向かい合わせでいただく。なんと珍妙シユールな光景だが、これは居神家ではあまり珍しい事ではない。

二人が朝食を採っている間、ずっとテレビからニュースが流れている。朝の情報源であるニュースが流れていて、昨日の最新情報がダイジェスト方式で送られる。

その中には核問題の話や、他国で起きている内紛は他人事ではありません！などの血生臭い朝のホットニュースが放送される。

ココロは顔をしかめながら、パンを粗食する。あまり良い内容のニュースが流れていない事に少し落胆してしまう。世の中がどんどんと悪いほうに流れている事を実感してしまう。

『昨日未明、平崎市臨海公園区にある『喫茶アフロ』に刃物を持った男が押し入りました。ですが、店長がカポエラの達人であった事から撃退され、只今平崎町を逃亡中です。警察は最近メシア教徒の起こした事件と関与しているのでは無いか調査を続けおり・・・』

・・・ニュースはいまだに続いている。

ココロは少し笑いそうになる内容のニュースをもう一度吟味してみる。昨日未明と言われていたが、喫茶店が経営している時間帯である。おそらくはお昼から夕方あたりの時間帯である。そんな時間帯に刃物を持った男が押し入る事に、世も末だと落胆から肩を下げ

る。

「メシア教団はおそらく関係ないな」

いつのまにか朝食を摂り終わり呟きをもらす光太郎を見る。最近メシア教団と言う宗教団体が起こす怪事件の調査に追われ、ストレスを少なからず溜めていた青年刑事はムツツリ顔を更に面白くなさそうな顔に変えていた。

「ど、どうして？」

そんな兄の様子に少しオドオドと話しかけるココロ。

「平崎は存外メシア教団やガイア教団の信者が少ないからだ。品川辺りに総本山とやらを持つメシア教団は、恐らく関与してしまい。ガイア教団にしてもだ、奴等は金品強盗・・・つまり金目当ての犯罪を一度も起こしていない。喫茶店に押し入ったと言う事は金品強奪が目的だろう。奴等は金品には興味が無い。これが集団殺人を前提とした押し入りならば話は別なのだが・・・。まあ、こんな平刑

事の見解なんぞ上には通らんがな」

ふん、と不満そうな声で締めくくる。光太郎は警察署の中であまり上部との連携が上手くいかず、光太郎のオカルトめいた推理を基本的に聞いてくれない上司にイラついていた。

「メシア教団とガイア教団はトップがどちらも不明瞭な組織だ。警察内部にはトップの人物が同一人物なのは、と言う見解が有力になりつつある。しかしだ・・・それは恐らく・・・と言うより絶対無い。何故なら、奴等の思想にはあまりにも違いがありすぎる。いつだったか、街でメシアとガイアが鉢合わせになり、そこから論争、いつのまにか小規模クラスの戦争に発展しかけていた事があった」

メシア教団は人々に救いを説く集団、ガイア教団は人々に破滅を説く集団である。故に思想の違いからの激突は度々あるのだが、

「それって初耳だよ？ニュースで取り上げられてないし・・・」

と、ココロのような一般人には知れ渡る事のない事実となっている。

「ニュースで流すには少々危険すぎる。言っただろ。小規模の『戦争』なんだ。つまり奴等はな・・・街中で『殺し』あっていたんだよ」

光太郎は先ほどまで使っていた箸を両手に持ち、交差させるとそれをカンカン打ち鳴らす。

このような小規模の宗教戦争が起きてしまうこと自体もはや末期

的なのだが、それでも尚警察はこの事件に規制を引く。なぜならこの情報が多くの人間に知れ渡ってしまうと、それに便乗する人間も必ずと言っていいほど現れるからだ。だが、そんな事よりも今のコロコロにとって目下心配事は一つ。

（マナー悪いよ・・・兄さん・・・）

実の兄の下品な行動に頭を悩ませていた。

「一般人にしてみれば殆どあいつらは犯罪者のグループだ。無駄に宗教を銘打っているから警察も中々に手が出せない。取調べしようとしてもだ、一部の教徒たちの暴走で終わらせて、教団本部は警察に情報を渡さない。何よりもそんな教団に着いていく信者達・・・。厄介なんだよ、この手の団体は」

宗教団体を捕まえて犯罪グループと、公僕の台詞とは到底思えない彼の言葉には多少疲れが見て取れた。

光太郎の言うとおり、一般人にしてみれば脅威以外の何者でもないのが現状になっている。メシア教団がいかにもボランティア活動をしたり、寄付金を集め、貧しい人の為に使用していても、敵対勢力を作り街で争いごとを起こして一般人の迷惑となる。

ガイア教団にいたっては、親善活動をまったくしない為、人々の為になる宗教団体と言って良いのかどうかも悩む所だった。

「まあ近いうちに大検挙があるだろう。小規模な戦争の後、また戦争を起こすつもりなのか、ただの便乗犯なのかは分らないが銃刀法違反で捕まるメシア教徒やガイア教徒がちらほらと居る。品川のメシア教大聖堂に警察も目を向け、メシア教団の動きを封じる動き

に出ている」

「でもメシア教団なら普通に銃撃戦になりそうだね」

メシア教徒は青と白を基調としたローブを身に纏う。そんな彼らが大聖堂から出てきて銃撃戦を仕掛けてくるのは、何故かココロには簡単に想像できた。

「・・・・・・・・」

しかしココロが冗談交じりで言った言葉は、光太郎の不機嫌そうな顔を更に不機嫌にしてしまう。何故なら光太郎にもそのシーンが容易にイメージできた為である。

「あまり下らない冗談は止めてくれココロ。正直、最近頻繁に起きるメシア教団の惨殺事件が多くてな・・・事情聴取やら情報整理やらで口々に休めてないんだ。簡単に言うとな疲労が溜まっているんだよ・・・。大体、なんで毎回毎回路地裏で死んでるんだ・・・」

頭に手をやりブツブツと不満を漏らす光太郎。事件が起これば起こるほど忙しくなる、刑事特有の疲労に悩まされていた。

（だからこんなにゆっくりなのかな？）

そんな場違いな感想を抱いてしまうココロだが、それよりも気になったのが『惨殺事件』の一言である。最近という事は昨日ではない。そして今に至る今日まで、そんな話は見た事も聞いた事もなかった。

混乱の世の中、情報こそが命だと考える現代人は多い。惨たらし

い事件に非難を浴びせ、悲惨な目にあつた家族に対して、明日には忘れる同情心を抱く。そんな中『惨殺事件』と言う文字はマスコミを吊り上げる最良の餌となるだろう。先ほどの『街中の戦争』もそうである。情報に飢えている現代人はこのような情報を多く仕入れたがる。最終的な目標も無く情報を集め一体何をしようというのか。

特に情報に飢えてもないココロは、兄が先ほどから漏らしている情報に対し、一応の質問を投げかける事にした。

「兄さん・・・もしかしてさつきから漏らしてる情報って・・・極秘ってやつなんじゃ？機密漏洩ってやつなんじゃないの？まだ何処にも報道されていないでしょ？」

そう、刑事光太郎は先ほどからまだ一般公開されていない情報を、身内であるココロに流していた。

「だが、どう隠していても洩れるものは洩れる。それならば、と思つてな。それに兄の気持ちを察してくれ。俺は実の弟に隠し事なぞしたくないのだ」

ニヤリと意地に悪い表情を浮かべる。居神光太郎は実の弟をからかい、悪戯するのが趣味と言う悪癖を持っている。今回は嫌な情報を与えると言う嫌がらせを実行していたのだ。もちろんそれはココロに甚大な被害を与えている。

（夜帰るの怖くなるじゃないか・・・）

不安になる情報を与えられ、ココロは身震いする。そんな不安を吹き飛ばすように兄に突っ込みを入れる。

「あのね・・・そんなのバレたら懲戒免職になるんじゃないの」

だが実の兄は気分よさそうにその言葉を受け入れる。と、言うよりもココロのおっかなびくりの突込みを聞くのが目的だった訳で・・・、

「瑣末な事だ」

の一言で重大な情報漏洩の話を終わらせた。

朝の賑やか・・・いや慎ましかかな朝食は終わり、リビングにはニュースキャスターの世間話が木霊している。

学校へ行こうとするココロだが、リビングの時計を見てまだ時間的に余裕があると知ると兄に対しちよつとした世間話をする事にする。

「でも最近確かに血生臭い事件が多いね。学校の通学路にもメシア教団のポスターが一杯貼られているよ」

「うむ、剥がしておいていいぞ」

「いや・・・兄さんのじゃないでしょ・・・」

ココロの通学路だけではなく、様々な所にメシア教団の教徒獲得のポスターが貼られている。それは電話ボックスの中、公道、果て

は駅の線路上にまで。

「どうせ『神の裁きが』とか『救済を求める』とかの謳い文句だ。そんなもの公道に一枚程度貼って置けばいい物をだな、バシバシと狂ったようにガードレールや電話ボックスやら、フェンスやら・・・拳銃警察署の窓に何十枚、何百枚と貼ってある。あのな・・・一枚あれば十分だと思わないか？なんであんなに頭のネジがはずれたように貼ってあるんだ。理解できん。あのポスターを夜な夜な隠れて剥がす奴等の身になってみる！」

「いや、まあ・・・分らない事もないんだけど・・・なんで夜な夜な隠れて剥がすの？」

「・・・以前な、ポスターで警察署の窓の外が見えなくなつて激怒した同僚が居てな。真昼間に警察署のポスター・・・そして公道に貼ってあるポスターを、目に見える範囲の殆どを剥がしていったんだ。・・・そして次の日からその同僚、今の今まで見ていない」

「っ！」

光太郎は吐き捨てるように言葉を紡ぐ。だが、しかしメシア教団はそれくらいをしでかす集団である。自分たちの信条を書かれたポスターを剥がされて黙っている集団ではない。ココロはその兄の同僚の安否を心配する。だが、それと同時に、

「・・・兄さん。さつき剥がしておいていいぞって・・・僕どうなっちゃうんだよ・・・」

「ああ、さつきのは嘘だ。止めておいたほうがいいぞ、ココロ。何事も危険に近寄らないのが最良の選択肢だ。・・・そう、最良の

選択肢なのだが・・・それ故に我々警察も思い切った行動が取れないんだ。・・・大体な、あいつらが崇めている『全知全能』の神とやらを俺は信じる事ができないし、崇め奉るやつらの気が知れない」

光太郎はあまり『宗教批判』はしない男で、大抵はトラブルの原因となる為、心の中に仕舞っておくタイプである。しかし弟に聞かせておきたい話であると同時に、そろそろ日頃の鬱憤が爆発する事もありこの場を借りての大演説となってしまった。

光太郎はステッキの様に箸を振り回し、ココロへと差し向ける。まるで教師が教え子を指名するような気分なのだろうか、眼鏡は光り瞳を窺うことができない。なにより

（兄さん・・・マナーがわるいんですが・・・）

教え子になるうかと言う少年ににとって、そういうマナー違反はどうなのかと思えた。

「いいか、ココロ。神とやらは全知全能らしい。いかにも『神』らしい。全てを知り、全てを能^もつ。しかしながら存在そのモノが矛盾した存在だ。全てを知る。なんて事は有り得ないからだ。知ってしまうと失うものがある。例えばそう、子供が信じるサンタクロースの正体だ。子供はサンタクロースを信じている。煙突から入り、そして子供たちにプレゼントを与えていく存在だ。正に素敵な赤おじさんだな。しかしながら我々は知っている。その正体は我々の父親、または母親だったりもする。サンタクロースを信じている子供達は『純粹』だ。その純粹な知識は子供たちに希望、または喜びを与える。しかしサンタクロースが父親だと分かってしまった子供たちはどうだ？がっかりするだろうか？希望をくれる赤おじさんが実は血を分けた父親なのだと知れば。ここで子供達は失う。『純粹な時

の知識」という物を。そして与えられるのは「現実的な時の知識」だ。両者を同時に持つ・・・なんてことは矛盾しているんだ」

人は常に何かを捨て、何かを得る、と言うプロセスを基盤として生きている。光太郎が述べたのは、神が全知全能と呼ばれる事に対しての批判である。

「つまり・・・兄さんは神を信じるな、と？」

ココロの受け止め方は少し曲解してしまっているが。

「誰がそんな事を言っている」

不本意だ、とばかりに仏頂面をココロの目前へ持つていく。

「神を信じるな等とは言わない。信じる信じないは自由だ。問題は依存するものだ。神様がこうすれば自分は救われる。神様がこうすれば自分を褒めてくれる。こうなってくると少々問題が発生してくる。その者の行動理念に自分の意思は無く、神が望む事を自分がしていく事になる。例えば犯罪者を許しておけない人間が犯罪者を殴り殺したり、子供を堕胎させる事を悪と決めた者がその堕胎をする女性に危害を加える。そして自分は悪くない！全て神の御心に従ったまで！神は彼らを許さない！・・・それは構わないさ。しかし犯罪を起こしておいて神の御心に従ったまで。等とは片腹痛い。それは歪曲するとすべて神のせいだ！と言っているのとなんら違いあるまい」

光太郎の議論は白熱し、とどまる所を知らない。だが、ココロとしてはあまり置いてけぼりにされても困るので、朝食の残りの牛乳をカップに注ぎ兄へと差し出す。光太郎は毒気を抜かれた様な表情

となり「悪いな」とだけ言い、牛乳を一飲みにした。

「つまり神に依存すると言うのはそれすなわち、全て神のせい、にしていると言う局面が存在するんだ。故に自身の行動に関して責任感を強く持てない。そうして軽い気持ちで重度の犯罪を犯してしまっケースがメシア教団やガイア教団にあたるんだ。

あと俺の先ほど言いたかったことはだ。『神』とやらが本当に居ても所詮矛盾した存在。信じるのは自由だが、矛盾した存在を信じていてもあまり救われないと思うぞ。もし本当に全知全能です等と仰られる神が居たらそれは既に『精神破綻神』とでも言うしかあるまい。後、我々の神は全知全能では無い。救いを与え、我らを守ってくれるてくれる神様だ。などと言う奴が居たら言っておいてやれ」

言い放ち、空となったカップをずい、とココロへと差し出す。激情しているのか、冷静なのか判別がつかない兄の持つカップへと牛乳を注いでいく。

「なんて言ってやればいいの？兄さん」

ココロとしては捨て置けない最後の一言。故に聞いておきたかったので、光太郎へ疑問を投げかける。そんな身勝手な兄は牛乳を飲もうとしたのを邪魔され、不機嫌な感情を眉根で表現しながら、

「瑣末なことだ。そんな矛盾で不出来、破綻した神なんぞに頼る前に近隣住所の同じ血を持つ人間を頼れとな」

そう言ってから光太郎は凄く満足げに、牛乳を一飲みした。だが、そんな光太郎を見てうんうんと頭をひねらせる少年。

（言うか言うまいか……。言ったら絶対反論されるよね……？）

そんな葛藤を抱いていたが、思い切りのよさは兄に似たのか、気づけば疑問のような否定を口に出していた。

「兄さんの考えは普通の人とは違うと思うな」

言うてからよかったかな。などと思い、ココロは食卓から少し身を引く。少年が案じた通りに眉毛を八の字にして、不満を弟に示すように表してた。

牛乳を飲み干した光太郎は空になったカップを、机の上へと静かに返す。カタリ、と言う音と共に光太郎の口が開く。

「ココロ。どうしてそう思う？」

実の弟から反論が飛び出すとは思っていなかった光太郎は、口調そのものは穏やかなものではあるが、内心は興味と不満が渦巻いていた。

（弟よ……。どんな意見を言うつもりだ？）

そんな内心を知ってか知らずか、ココロは己の意見を述べていく。

「兄さんは神よりも人間を信じろって言ったけどさ。世の中の人間って近隣住所の見知った顔の人の方が、信じれない人の方が大半じゃないかな。都市部とかでもマンションや団地で、和気藹々と話してたりするのってかなり稀だと思うよ。今の世の中、神様より隣人の方が信用おけない……。と思うんだけど」

反論と言うよりは疑問に近い、ココロの感想を光太郎は無然とした顔で受け止めていた。

ふむ、と考え込むように顔をうつむかせる。先ほど飲んでいた力ツプの口到人差し指を添え、クルクルと入り口に沿って回す。遠心力からカップの底が浮き上がり、右へ左へと車がドリフトするように、その場で不安定な回転をココロに見せる。

この上なく下品でマナーが悪いのだが、もう心の中で突っ込む気力も無くしたココロは、目の前の男は何故これほどにまで下品な行為を、己のモノにしてしまうのか疑問に思っていた。

「心。お前は顔も見ただけでも無い神より、顔を知っている隣人の方が信用置け無い、と言う。それは尤もだ」

そんな疑問を新たに抱いていたココロに対し、光太郎の肯定は弟に虚を突かせるには十分な威力を持っていた。ココロ自体自分の反論を肯定されるとは思っていなかった。

「顔や素性、姿形が分かっていないからこそ人の心によりよく浸透する。人の心をスポンジに例えると分かり易い。スポンジは形が定まらない水ならどんな吸い込むのに、カレーやシチューのような半固形状の液体は染み込んでいかない。」

ホラー映画等でもそうだろう？洋画のホラーは恐怖対象の正体が大抵精神異常者の人間だったり、接近戦で挑んでくる輩が多い。しかし邦画のホラーは恐怖対象の正体が判らない。基本的には人の恨みつらみ、怨念、悪霊などこの世にあるかないか、どのような形で襲い掛かるか判らないモノだ。そして全世界中が洋画ホラーと邦画

ホラー。どちらが怖いかというと邦画ホラーと言う事になっている」

ずらずらと言葉を並べる光太郎ではあるが、邦画ホラーの怖さは、その内容よりも音楽、または映像から来ているのではあるが、そんな事を今更突っ込んで仕方ないと、ココロは思っていた。論点がズレればそれだけ自分に理解できる事が少ないと知らされ、シヨックだからである。

「故にどのような存在かを明確に確認できない『神』は非常に信用しやすく心に浸透しやすいだろう。逆に隣人に関しては確かに信用しにくい部分もあるだろう。仲が昔から悪い。なんてことになれば殊更だ。だがしかし、現実問題ではどうだ。『神』を信じていれば心が救われるかもしれないが、生活を守ってくれはしない。と、言うのも当たり前なのだが己の生活を守るのは自分自身だ。そしてその生活を支えてくれるのは、同じ血を持った人間以外にはありえないだろ」

『神』は人間にとって信用しやすいが、現実での益になる事は少ない。しかし『人』は己の生活に密接した関係を持つてくる。故に人を救うのは人だけだと言う光太郎の持論。しかしそれは心に余裕、または心に強さを持った人にしか言えない言葉でもある。光太郎のように恵まれた生活を送っていれば言える、強者の言葉。

「でもさ兄さん、神様を信じていて、神様の説く言葉を信じて生活の糧にする人も居ると僕は思うんだけど……。そんな人たちも否定するの？」

今度は光太郎がキョトンとした顔でココロを見つめる番になった。顔の筋肉の動きによりずり落ちそうになった眼鏡を掛け直し、

「話の論点がズレてきているな、心。俺は幾度と無く『依存する者』が良くない。と言っている。

依存する者は『己』を持たずに『依存対象』に責任を擦り付ける事が多い。これは非常に良くない。

対する『信用する者』は『己』を持ち『信用対象』を信じている。これは非常に良い事だ。

『己』を持たない人間は自らの生活環境が崩れていく。『己』を持つものは自らの生活環境を守っていける。お前の言う生活の糧にする人間は『己』を持つ人間なんだよ。そういう人間は得てして馬鹿げた犯罪に身を染め、自らの人生を駄目にしたりはしない。だが、『己』を持たない奴はこんな宗教的な犯罪に身を染める。この『依存する人間』が少しでも減れば宗教的な犯罪も減っていくだろう」

依存とは『己』を無くし、只々『神』を盲目的に愛しその身を捧げる事。

信ずるとは確たる『己』を持ち、『神』を崇め奉る事。

「神様って言うのが本当に居るなら・・・どちらを望むんだろう」

そう心の中で呟いた声無き呟きは、いつのまにかココロの口から零れ出ていた。

「そうだな。もしも本当に『神』が居て、こよなく全知全能で、こよなく全てを愛して、こよなく全てを救う存在だと言うのであれば。やはり、隣人を知り、信用する者だろうな。『神』は人を何故生んだ。己を崇め奉らせる為か？俺はそうは思わない。俺ら人間

が生まれてきた理由は多々あるだろうが、居るか居ないか判らない『神』を信じるのではなく、そこに確かに居る『人間』を信じ、互いに協力して生きていき成長していく事だろうと、俺は思っている。『神』と呼ばれるものが本当に慈愛に満ちているのならば、隣人を信じない者を見るのは悲しいだろうからな。それに、心。お前も『親父』と『母さん』が協力して産まれてきたんだぞ？」

途中まで真面目な話だったはずなのに、最後は顔に似合わず馬鹿馬鹿しい締め文句で光太郎は終わらせた。ココロにとっては答えの無い世間話となってしまう、この話が始まるキツカケを作ったのを少し後悔してしまう。だが、ココロは思う。

人の心は万華鏡。様々な光と闇の色を持ち、キラキラ光っては人を惑わす。『神』を信じる人も『神』に依存する人も違いは大きいと光太郎は言うが、ココロは『神の存在を疑っていない』と言う共通点がある事に気付く。何故彼ら信者達は疑わずに『神』を心に抱けたのか。・・・もしかしたら神様はずっと彼らの心の中に居ていつかこの世に

現臨スル。

まさか、と首を振りその突飛な妄想を最後に食卓を立ち学校へ行くこうとする。時間的にそろそろ走っていかないと学校へ遅刻する可能性がある。・・・だがしかし光太郎にココロから言っておくべき事が一つだけ残っていた。

「兄さん、今の台詞。人によってはセクハラだよな」

光太郎は空になったカップの底に溜まって残っていた牛乳を、グイと無理矢理飲み干し

「瑣末な事だ」

と、言つて機嫌よさそうな顔で笑つていた。

一節 残照風景 - The・Hero - (後書き)

Key Word

>居神 心 (いがみ こころ) <

17歳 男性 身長165cm 体重51kg

柔和な顔つきと温和な人当たりが特徴的な少年。

しかしそれらが童顔と相まって、遠目から見ると『少女』の容貌に見えてしまう事を

コンプレックスに思っている。

本気で怒る前に恐怖心に捕らわれる、典型的な臆病で良い人の例。

口癖ではないが他人のマナー違反について突っ込みを入れる癖を持つ。

外見的なモデルとなったのは『九龍妖魔学園紀』より『響 五葉』。

>居神 光太郎 (いがみ こうたろう) <

25歳 男性 身長175cm 体重61kg

厳しい顔と強い意志を湛えた瞳を持つ東京都目黒警察署の平刑事。

知性の籠った(?) 口調とは裏腹に悪戯好きで、弟であるココロに
対し

いつも嫌がらせをする事を信条としている。

刑事としては能力は低く評価されているが、これは光太郎の考え方が
一般人とズレまくっている為である。

口癖は『瑣末な事』。

外見モデルは・・・特になし。

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 0 1 - (前書き)

所代わり、もう一人の主人公。

許斐友春の深く悲しい過去回想。

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 01 -

1999年10月30日・・・19XX年（過去回想）

夢からの開放。闇からの脱却。日常への帰還。彼は眠りから目を覚ました後、どれが正解なのかと寝惚けた頭でぼんやりと考えていた。

人類の英知、布団を使わずに硬い路地裏で眠りについていては為か、青年は体の節々が所々痛むように伸びをする。今はもう11月に入る寸前の10月30日。寒さも徐々に強くなってきたており、微かに吹きつく冷風が青年の体の痛みを冷やし、関節痛に拍車をかけてくる。

睡眠中に外れかかったのか、かぶっていたニット帽子をずりずりとかぶり直す。服装も少し乱れていたが、普通に生活していればすぐに直っていく程度なので、特に気にした様子も無かった。

小鳥の囀りすら聴こえない早朝の路地裏。夜の帳が未だ差し掛かる、夜と朝の境目の時間。青年には今現在が何時なのかは正確には判らない。以前までは愛用していた腕時計があったのだが、最近青年に降りかかった不幸が原因で、寿命を全うすることなく腕時計から未来へと続く時間を奪ってしまった。青年は申し訳なさを感じながら、先ほど時計をゴミ箱へと捨ててきた。

薄暗い路地の中、右腕を掲げる。腕時計がはめられていた場所。そこには彼が愛用していた腕時計は無く、代わりに薄気味悪い光を放つ小さな籠手のような金属が装着されていた。籠手には不釣り合いなキヤッシュカードサイズのモニターが設置されており、その周囲

にはどここの古代文字なのか単に子供の悪戯書きなのか、解読不明な絵のような文字が記入されたボタンがちらほらと付いていた。

まるでハンディコンピューター。しかし用途は全く違う。ソリティアやゲームで遊んだり、メモ帳にスケジュールを書き込んだりできる代物ではない。

青年が自身の筆手をじつと感慨深けに見つめる。そんな彼の顔がモニター部分に映る。

ニット帽を深めにかぶり、目付きの悪い三白眼の男。口元は不機嫌そうに「へ」を描いている。彼はいつの間にか自分自身『許斐友春』を見下して見ているのに気付いた。

19XX年産まれ。歳は18歳。身長は174cm程度の男子高校生。体重はここ最近計っておらず、友春自身も特に興味はなかった。趣味は前まで『御勉強』、最近はどうぷりとハマっていた『拳闘^{ボクシング}』。2年程前、友人に誘われて以来、友春の日常に取り入れられていた。お坊ちゃまだった彼に、人間誰しもが持つ凶器『拳』の痛みを、体に直接叩き込んでいった。漫画やアニメだけでは無く、人間の拳は簡単に人の皮膚を斬る事ができる事も友春は知った。

そんな友春には暗い過去がある。モニターに映った自分の顔を見下しながら、ふつつつと思いついていた。

彼が思っているほど家庭は普通ではなかった。家族の誰かに殺人

者が居る。とか、家族の誰かが超能力者だ。とかではない。ただ単にどんな近隣住所の家庭より『金』を持っていた。友春の祖父は何処かのグループの会長。実父は何処かの会社の社長。友春がそんな事を聞いたのはいつだったか、何の為だったか。

いつの頃からか自分は裕福な家庭に生まれたのだと知った友春は、子供ながらに無邪気に父親に対し物品を要求した。小学生の頃、始めて貰ったもう名前も思い出せない、その頃は好きだったアニメの稼動人形。本当に欲しかったのか・・・もう友春には分らない。

お菓子を貰っては喜んだ。玩具を貰っては遊びつくした。洋服を貰っては着飾った。いつのまにか居なくなっていたがペットも貰っていた。加速的に贈呈品を積み上げられていく毎日が続いた。終わる事の無い父親からの贈り物。父親は物を与える事を『愛』だと勘違いし、幼い友春は物を贈呈される事を『愛』だと思っていた。友春はその愚考に気づかず、母親の哀しい視線をその身に受けていた。

小学生の頃は物品を欲する事もあったが、中学生になれば学校の友人たちと遊ぶ事が多くなり、友春の欲求は少しずつ収まっていた。別段欲しい物がこの世に五万とある訳ではない。友春は普通の中学生として、学園生活を満喫していた。そんな友春を見る母親の目が、優しい瞳に変わっていたのを友春は始めて気づいた。

だが・・・そんな友春を父親は許さなかった。友春の実父は息子が物をねだらなくなった途端、自身への愛が無くなったと思い、友春が望みもしない物を勝手に息子の部屋に置いていくようになった。玩具、服、本。様々な物が学校から自宅に帰ると増えていく。

友春の母はこれを勘違いした。また物品を欲求する息子になってしまったのかと。息子を見る目が慈愛に満ちた目から、悲しい目に

変わっていた。子供ながらに友春はそれを悲しんだ。

とある日、許斐友春は始めて同級生達に自分が『金』を大量に持った父親の息子・・・と言う事をバラしてしまう。それだけの事で友人達は彼を集団暴力を受けた。この現代に比べれば生易しい、イジメとも言えないイジメ。骨を折ったり、ナイフで刺したり、眼球を潰されたり、お金をせしめ様とされたり・・・。そんな事をしなただけ可愛いものであった。

ごりごりと押し付けられる学友の拳、突き飛ばすために張り出される手のひら。友春は「やめてよー」と小さな声と、少し困ったような顔で友人たちの悪ふざけに翻弄されていた。明日になればまた普通に接してくれるようになる、その程度の子供たちの遊びのようなイジメ。だが、その大した事の無い事態を担任の教師が見ていた。担任もそこで割り込んできて、その生徒達を止めれば悲劇も起こらなかっただろうに。

担任も友春の家庭をよく知っており、金持ちの息子と言うだけの理由で、自分の父親に直接報告した。そうすれば自分が高い評価を受けると思い、教師がどれほど友春の事を親身に思っているかと、どうでもいい事をアピールしていた。父親はそんな教師の戯言など聞いておらず、激怒を顔に模していた。そして友春を小突き回していた生徒全員の名前を聞き出した。その時の友春には父親の表情が『鬼』のように見え、幼いながらに強い恐怖心を抱いてしまう。

そんな父の鬼の形相を見た次の日・・・学校で友春にちょっとしたをかけていた生徒達はその殆どが姿を消していた。友春にとって異変であった。日常の変化はこれだけに止まらず、クラス・・・いや許斐友春を見る学校全体の目が変わっていた。

遠巻きにヒソヒソと聞こえてくる話し声。友春にネットリと絡みつく羨望と畏怖の視線。妙に媚びた態度の教師達は、無意味に心配性になっており友春を不安にさせる。

友春は授業中も気が気ではなかった。かろうじて残っている友人達は友春に対して話しかけようともし、視線を交わらせようとしないう。そんな針の筵状態で迎えた放課後。学校から逃げる様に自宅へと戻ろうとした友春だが、友人達の欠席、学友達の態度があまりにも気になった。

そんな思惑の中、学校の帰り道いつもは通らない商店街。街の住宅街へと通じる道。昔何度か遊びに行った友人の家がある場所へと足を向ける。その友人は今日欠席していた友人で、不安と心配が友春を友人宅へと走らせた。

息を切らせながら走っていった友人宅。その家の前に大きなトラックがどん、とその大きな体を強調するように居座っていた。トラックには大小様々なダンボールが積み込まれており、強い誇りと古びた紙の匂いを漂わせていた。周囲の家からの見物人は誰も居なくて、それはこのトラックとは私達は無関係だ！と強調しているようだった。

何かなんだか分らなくて呆然とする友春。少なからず動揺している友春の耳に、ドアの開く音。見やれば友人宅からクラスメイトとその両親が、生気の無い顔でトラックへと歩いていく。

長年見ていないようにも感じられた友人の顔を見て、友春は無邪気にも駆け寄っていく。声を掛けようとして・・・友春は動きを止めた。

許斐友春を見つけた友人の目。それは幼い中学生の目とは思えない、憎悪の目。殺意、驚愕、絶望、嫉妬、羨望……人の悪意に満ちた視線だった。それは友人であるはずの友春に向けられていた。向けられたのは視線だけでは収まらなかった。

クラスメイトが指を中空へと浮かせ、許斐友春に突きつける。

『全部……！全部お前のせいだああ……！！』

幻聴のように友春へと向けられる悪意。……いや幻聴ではなくそれは、確かに大気を震わせた怒声。しかし友春自身それを幻聴で終わらせたかった。友人の憎悪の声。そしてそれに連動するような母親の泣き声、父親の叫び声。連鎖的に起こっていく少年への贖罪を求める怒気が、未だ『中学生』の少年に襲い掛かった。

そんな少年だった友春に出来る事は、ただそこから逃亡する事だった。まともに動かない足を死に物狂いで振り回し、岐路へと急ぐ。その最中^{さなか}何度も靴に友人がしがみ付いているのではないかと、学生靴を振り回しながら走った。差し掛かった見慣れない商店街はキョトンと挙動不審な友春を見つめる。その視線は友春には殺意の視線にしか感じられず、更に己の中の恐怖心を高めていった。

あまり運動が得意ではない友春は肩を上下させながら、自分が生まれ育った豪邸へと辿り着く。豪華な館。豪華な門、豪華な窓。自宅前に着くとそんな今まで見慣れていた物が、どうしても自分を威圧しているように見えてくる。ゼエゼエと息を切らしながら門をくぐり、自宅へと続く長い道をひた走る。友春は自分の家を見つめながら……初めて己の家の巨大さに恐怖していた。

大きな口に吸い込まれるように玄関の扉に入っていく。存外大き

な物音を立ててしまい、ドアの閉まる音を聞きつけた使用人が何事かと友春へ駆け寄ってくる。

友春は使用人が逃げるように母親の部屋へと駆け抜けた。扉の前までどのようにして辿り着いたかはもう覚えていない。母親の部屋の扉を強く、太鼓をたたくようにノックする。

母親は普段の友春からは想像できない異状を感じ取り、驚愕の表情を張り付け、何事かと出てくる。友春はいつの間にか頬を撫でる涙を拭う事もせずに母親へとしがみついていた。

自分の母に今日起きた学校での話、そして友人宅での事を余すことなくすべて話した。そうする事で今日の恐怖から逃げ出そうとしているように。

母親は始めは哀しい顔で全てを聞いていたが、穏やかな・・・傷ついた友春を愛しむような声で語りかける。

『等価交換』・・・であると。

何かを失えば、何かを得る。

何かを得れば、何かを失う。

それが人間の絶対消えない人生の過程図。

許斐友春は幼い時から父親の保護を得ていた。それは同時に自らを守る義務を失っていた。

許斐友春は幼い時に玩具を手に入れ、自らの欲求を満たす探究心

を失っていた。

許斐友春は先ほど、父親の歪んだ安全を手に入れ、自らの友人総てを失った。

その一言を聞き、一体友人達に何があつたのか、その事を友春は母親に問い詰めるように聞いた。母親は辛そうな顔で友春に総てを話す。

父親は息子の小さな集団暴力に関わつた、殆どの生徒達の両親が働く勤務先へと手回しをし、全員を解雇させた。生徒達の両親は「何故こんな理不尽な！」と聞けば理由は「とある大人物のお子さんをお前の子供が苛めた」と、なんとも救いの無い理由。友春は父親がそこまで影響力の強い人物だとは知らなかったし、また知りたくも無かつた。

許斐友春は慟哭する。何故こんな事に？その強い悲哀に満ちた疑問は、友春の体を駆け巡る。

『このまま望みもしない『安全』を受け入れ、俺はこのまま俺に関わつた為に不幸になつた家族達の『憎悪』を背負わなくてはいけないのか！？』

悲しみは恐怖へと変わり、友春は母親の腕の中ガタガタと震えた。

その日以来、少年は父親とともに会話する事が出来なくなつていた。父親の優しい目が怖かつたから。父親の穏やかな笑顔に震える夜を過ごしていた。

中学校も異変が日常へとすり替わるのに、そう多くの月日は必要

なかった。友春を取り巻く人間達も、彼自身に媚びる最低な人間達も彼にとっては苦痛でしかなかった。

友春はこの現状を変える為にとある決心をする。このまま己自身を腐らせては敗北者となってしまう。社会へと出る前に、父親に腐りきらされるのが堪らなかった。

友春は地元の高校へと上がる前に、母親へとある決意を打ち明けていた。そんな強い意志を未だに持っていた友春に、母親は涙を流しながら諸手を挙げて喜んだ。一人立ちしようとしている自慢の息子に母親はできうる限りの協力を約束する。友春もそれに素直に甘える事にした。

友春は母親の言葉を体に染みこませる。

人生は等価交換……。何かを失えば、何かを得る。そして何かを得れば、何かを失う。螺旋的な法則。決して人間はこの本質から逃げる事は出来ない……。と。

この論理を知ったとき友春の決意は強いモノに変わっていた。

『自分で望んでいない物を与えられ、代償を払わなくてはならないのであれば、俺は自らの手で望んだものを掴み取り、そして代償を支払う！俺は与えられる何かでは満足しない！俺は……。』『己』の思うように掴み取る！』

それこそが友春の信念、信条。

その己に対しての約束事を実現する為に、友春は両親の下から離れ、遠く離れた地で新しい生活を送る事にした。

等価交換の意味を知る事も無く・・・。

母親に切に願い、父親の管理下を離れ自らの力だけで暮らしていく事を決意した友春。高校も父親が選んだ進学校ではなく、普通の人が普通の学業を学び、普通に卒業するような平凡な学校を選ぶことにした。生活する土地も父親の元から離れた。以前のような悲劇を繰り返したくなかったからだ。

何処にしようかと友春は悩んだが、東京都にある目黒区に居住を構える事にした。父親の元を離れるのだ。その思いが自らの思っていた距離よりも遥かに遠い見果てぬ地へと足を運ばせていた。

と、言っても友春の暮らしは楽ではなかった。息子の決心を知っていた母親は父親に仕送りなどをさせないように説得を続けていた。両親の力を頼らず友春は自分自身の力で、この生きるだけでツライ日常を暮らしていかななくてはならなかった。

生活するにはお金が必要である。故に友春はバイトをした。先生に勧められたアルバイトの『朝刊の新聞配達』をしていた。かなり実入りが良く、なにより「お坊ちゃま」生活を営んできた友春には、とても良い薬となった。昼は学業に励む為、学校をサボらず毎日のように学校へと通っていた。

その態度からか、昔は作ることなんて到底不可能だと思っていた『友人』も作る事ができた。友春の新しい友人は『ボクシング部』

に入っていた。

以前、苛められたのは自らの貧弱さが原因だと友春は思っていた、それ故に自らの心身を鍛える格闘技は彼の心を魅了して止まなかった。友人に頼み込み厳しいボクシング部へと入部した。

部活動は夜6時程度までランニングや基本練習等を繰り返しながら行われていった。部活動が終われば次はお金を稼ぐために、ガソリンスタンドで深夜まで働いていた。フラフラになりながらも友春は最高に充実した毎日を送っていた。

こうして己にスパルタ的な日常を強いて、友春は過去の自分を捨て己を改革させていった。

高校3年生になりもう後1年で卒業を控えていた。厳しい2年間を送っていた友春の顔はボクシングで鍛えられた為、昔のような甘えた面構えでは無く、懽然とした顔つきになっていた。2年間のアルバイト生活は自分自身の金銭感覚を鍛え上げ、金銭と言うものの大事さを知りえる最高の機会となった。学園生活で出来た友人は多くはなかったが、と友春自信が親友だと思える人間ばかりだった。

彼は自分の『己』を磨き、尊び、鍛え上げていった。そんな時、夏真っ盛りの暑い季節、ガソリンスタンドのアルバイトが終わり、疲れきっていた友春の部屋のポストに『父親』からの手紙が来たのは。

忘れていた。いや、忘れていたかった。『父親の笑顔』『父親の視線』。全てを忘却の彼方へと追いやった、友春自身が捨てたかった記憶。・・・彼は震える手で父親からの手紙を開けた。

涙が出た。友春は手が震え、急激な頭痛に襲われる。

父親から送られてきた手紙には簡潔にこう書かれていた。

邪魔な女は殺したよ。さあ次は何が欲しいんだい？

涙・・・鳴咽・・・吐瀉感・・・クラクラグラグラ・・・。友春の小さな部屋が万華鏡のようにクルクルと回転していく。彼は力無く倒れこむように、畳の上に尻餅をついた。こんな馬鹿な話は信じられないとばかりに。

友春は狂いたくなる頭を必死で抑えつつ、頭痛から逃げられないまま震える手で、自宅の・・・母親の個人電話へと繋がるように・・・信じながら電話番号を入力をしていく。

出たのは……父親だった。

「さあ・・・友春・・・何が欲しいんだい？パパが何でも買ってあげるよ」

この時初めて『発狂』と言つ言葉を友春は知つた。

[illegible]

狂ったように叫び声をあげた。防音効果の成されていない小さなアパートで大きすぎた深夜の大声。大声は近隣住所に鳴り響き、彼らを叩き起こし、友春の部屋のドアを強く強くノックする。

そんな音が半狂乱となっている友春に聞こえるわけも無く。絶望

に染め上げた叫び声をあげていた。父親に向かい。優しい笑顔を湛える母さんに懺悔するように。

三日程経っていた。友春は学校も行かず、バイトも行かず母親の笑顔を思い出しては泣いていた。そんな茫然自失となっていた彼に友人から電話がかかってきた。電話の内容は簡単なモノだった。

「あのだ・・・昼のワイドショーで見たんだけど・・・あれって・・・お前の親父さん？」

白く濁った頭のまま電話を切ることもせず、受話器を畳の上へダイブさせ、部屋の隅に置かれた埃だらけのテレビのスイッチをつける。そこにはなんと情けない父親の姿があった。手首はスリッパで隠されていたが、しつかりとわかる・・・手錠をされていた。テロップが張られた画面の右下には『妻殺害！？保険金殺人か？』等と安っぽい煽り文句が記されていた。

父親が捕まるのは当たり前だった。

何故なら、それは・・・友春自身が通報したから。

青年には絶えられなかった。

『母さんを奪われたのを。母さんの命を奪っておいて、あの男は何も支払っていない。あいつは・・・等価交換をしていなかった。だから許せなかったんだ。母さんの言った事を全て覆してしまいうで。』

青年の母は言っていた。等価交換こそが人生だと。人間は様々なモノを失いながら得ていく。それは時に知識を得ては時間を失った

り。それは時に拳闘に慣れれば強さを得、そして人を殴る事に違和感を感じる事を失う。それは時に自由を得ては・・・親愛なる母を失ったり・・・。

母親が死んで父親は捕まった。・・・その代わり許斐友春は完全な自由を得た。

最低最悪の等価交換。望まないモノを得ては望んだモノを捨てられる・・・。

その日から友春は、なにももう欲しくなくなっていた。自由もくだらないと思えた。今までの自分が何だったのかすら理解する気も失せていた。

自墮落に、そして無気力に・・・さぼり気味のアルバイトを惰性的にこなしていた。

いつのまにか好きになっていたボクシングは隙を見てはシャドーをする程度まで堕ちていた。死んだ眼でシャドーをする姿は彼自身でも不気味に見える。

いつのまにか季節は春を迎え、親しかった友人は高校を卒業して行った。友春自身は情緒不安定など様々の理由から高校を留年していた。成績は悪くなかった。しかし、いつの頃からか友春の父親の事件を言うクラスメイトが出始めていた。そんな奴らに対しては慣れたんだ、拳闘で黙らせる事を覚えていた。当然の如く粗暴になつていく友春を教師達はそんな簡単に世に排出する事はない。そして友春自身、まだこのまま世界へ羽ばたく程、あの事件から回復はしていなかった。

そもそも父親逮捕の事件以来、友春は高校を辞め、何処かで下らない仕事を探す気だった。

しかし、それをするとう母親を侮辱する事になるのでは・・・？

命を使わせてまで自分を自由にしてくれた母親。そんな母親を思い出すとどうしても高校を辞めることは出来なかった。

無意味に稼いだお金から教育費を学校に入れて苦しい生活を送る。しかし、学校へは行かない。自分より年下の連中と一緒に勉学に励む事も嫌だったし、もう既に友人達も世に出てしまった。学校へ行く理由が友春の中に生まれる事はなかった。

狂ったような矛盾生活。だが、どうしようもない。友春にはもう己の生きる意味が見出せなかった。

そうやって無駄な時間を過ごし、暇を見てはたまに高校へ顔を出し、煙たがられ、それを自嘲する毎日。いつのまにか行かなくなっていたアルバイトはクビになっていた。底を突きかけた金で生活しながらも、母親が残してくれたいた財産・・・使用人に無理を言っで送ってくれていた『遺産』には手をつけなかった。友春の母が最後の最後まで息子を心配してくれていた「形」を消したくはなかったから。

情弱な毎日を送っていて気付けば、春は過ぎ、夏は終わり、秋になっていた。冬にもなっていないのに寒い日が続いており、まるで都市全体をクーラーが覆ってしまったのではないかと思える。

そんなある日・・・許斐友春の人生最大の岐路に立つ事になる。

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 01 - (後書き)

Key Word

> 許斐 友春 (このみ ともはる) <

18歳 男性 身長173cm 体重53kg

凄みのある三白眼のようにキレた瞳と引き締まった体躯を持つ青年。18歳なのに高校生3年生なのは、とある事情により精神不安定となり留年している為。

本来は面倒見が良く、悪や不正に立ち向かう事の出来る義に厚い青年だったのだが

自身の家庭の事情から、性格を捻じ曲げてしまい今の性格になっている。

戦闘中に扱う『拳闘』は高校1年から始めたが、その強い意志力がかなりの

クラスに位置する。しかしアルバイトが忙しく、試合等には一切出ていない為無名。

口癖は戦闘開始時の『Round・・・』である。

> 等価交換 <

読んで字のごとく、等しく価値のあるものを交換すると言う意味。

許斐友春はこの論理に縛られている。

次章『慙愧悔恨』にてこの説を解き明かせたらなあ・・・と思ってる。

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 0 2 - (前書き)

メシア教徒達とガイア教徒達の戦いに訪れた友春。
その友春最大の岐路はどちらに傾くのか？

一節 残照風景 - 許斐 友春 #02 -

1999年10月13日（火曜日）

雨も降らない・・・風も吹かない、10月13日・・・運命の日
ハジマル。

許斐友春は喧嘩やトラブルを、ここ数ヶ月イヤと言う程味わってきた。だからこのトラブルも大した事にならないと踏んでいた。

街を意味も無く闊歩していると青と、白を基調としたローブを羽織った服装の男が居た。その男は駅前ですつと募金活動をしていた。最近増殖している『メシア教』の信者である。メシア教徒は別名『狂信者』とも呼ばれており、その対岸にある宗教団体『ガイア教』と様々な暴力事件を起こしている宗教団体である。そんな武道派組織のわりに信者は多く、この東京を殆どの人口が信者になりつつある。無論それはガイア教も同じで、信者の数はほぼ同率と言える。

昨今ニュースもロクに見ない友春ですら知っている、噂のメシア教徒の募金・勧誘。

「信じるものは救われる」「神を信じ、奉仕しましょう」。そう言い続け、道行く人に声を掛けていく。この台詞は情弱な生活を送っていた友春にとって、この口上は極上のスパイスとなって彼の脳を刺激した。

（信じれば救われる。ふざけてる。信じても救われない人間がこの世には五万と居る。悪事を働く人間が善人を意味も無く殺すこの時代・・・信じていれば救われる、だと。信じていれば神の御許に行く事を許される、と。だがこの現世で神の身許に行きたい人間なんて、ほんの一握りだろうが・・・。そして、人々が祈るのは救われないからだ。悪人から、天災から、突如として訪れる己に降りかかる災厄を退ける為、人々は神に祈る。

今だけは信じるから私たちを救ってください。

神も無残なモンだ。こんな下らない人間達から祈られても救う気になんてならないだろうよ。その下らない人間を増殖させる機関『メシア教団』。なんとも吐気のする奴らだ）

友春は凄まじい怒気を孕んだ視線をメシアの男へと送りつけ、そのまま近づいていき、

「楽しいか？空虚な祈りを捧げる人間を集めるのは。楽しいか？有りもしない神の救いを信じて待つのは」

自然と悪態をついていた。勿論、気分は全然良くなかった。どちらかと言うと言ってから少し後悔していた。何を言っているんだ俺は・・・と。しかし相手は友春の後悔を知らず、虚を突かれた様な顔をした直後、見下すような・・・怒りを込めて友春を睨みつけてきた。

友春は久しぶりにゾツとした。街を徘徊しては喧嘩を吹っかけられたりはしていたが、これ程ダイレクトに、背筋に悪寒が走る視線を感じたのは初めてだった。友春の脳裏に嫌な予感が走る。そもそも冷静になってみれば、宗教者に喧嘩を吹っかける事自体非常事態

なのだが。

友春はその視線を受け流すように、そのまま歩いていく。それでトラブルは終わりだと思っていた。

その日は空虚に、底抜けにまで明るい街を練り歩いていた。何度も通った道。知らない道。そんな所に何があるのか。判別はつかないが、何かを探すように、何かを見つけようとするように、友春は数ヶ月間歩いた道をまた歩く。

それは路地裏に通りがかった時だった。いつもならヤンキーなる不良共が屯たむろしており友春にフリーファイト染みた喧嘩を仕掛けて来る連中が居た。・・・大抵は返り討ちにされており、逆恨みめいた感情を抱いている。今日は不思議とそこには静寂が広がっており、雑音共は居なかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

友春は不思議に思った。何故だろうか。先程のメシア教徒の視線があまりに不気味だった為か。今日に限って、いつもは入り込まない静寂を携えた路地裏へと足を運んでいった。

社会不適応者共の顔は覚えていた。いつも不満そうな顔で路地裏で屯するだけの人間だ。それらは許斐友春と言う男と変わりないから、友春はとても覚えやすかった。

だからすぐに理解した。そう、理解してしまった。

顔を血袋のようにさせた男と、腹から血を垂れ流す男。両目から血を涙の様に流し、目を瞑り懺悔するように空を仰ぐ男。いつも友

春に喧嘩を振り掛ける連中だった。いつの間にか目を見開いてそれを見ていた友春は、自分の足がガクガクと震えている事に気がついた。

（なんだこりゃ・・・！）

異常な世界。昔の残酷な童話に似ている。『グリム童話』。日常の風景をさも面白おかしく狂気に満ちた世界感を作り出している御伽噺。異常事態で緊急事態。おそらく腹からナイフが生えた男はもう息をしていない。目から洪水のように血を垂れ流す男ももう明らかに手遅れだ。顔を赤黒く染め上げた男は・・・まだ息があったが、もう虫の息だった。

そんなボロ雑巾のような彼らを見ると、奥のほうから青と白のローブを着た人物が一人歩いてきた。

「まだ居たのか」

男性の小さな呟き声は友春に届く。あまりに小さい声と口元が見えない為、この異常風景が聞かせる幻聴のようにも感じられたからだ。男はこちらに歩進めながら・・・ローブからナイフを取り出しながら言い放った。

「貴方は神を信じますか？」

（・・・キレてやがるな・・・）

友春は即座に直感した。目の前のローブ男はキレている。そう感じた。そう知った。そう体に叩き込んだ。で、なければ彼は路地裏で倒れ伏せている、未来の時間を奪われた3人ようになってしま

うだろう。友春は長年忘れかけていた、拳闘の構えを相手に見せ付けるようにファイティングポーズを取った。

「……異教徒め……！」

その一言が許斐友春の脚をタタンツと鳴らせる合図となった。

踏み込みから、右ストレートまでの時間は1秒掛かるかからないか……。友春自身でも惚れ惚れするくらいの速度で相手の懐へ潜り込み、貫通させるように体全身のバネと筋力、脚力、体重、全てを乗せて黒い影となっているフードの孔へと右拳を突き出す。

瞬間、両者の耳にゴス！と言う骨と骨が叩き合う音が聞こえた。

友春の拳にはゴツゴツした硬い歯の感触、そこから瞬時に出る唾液に混じった血液の感触。ゴブツと言う男の悲鳴とも慟哭とも取れない声。ローブ男は慣性の法則に従うように頭を後方へと持っていていけるように、吹き飛んだ。

友春は手についた血液と唾液を愛用の赤いジャケットで拭き取りながら、いつから鳴り出したのか解らない心臓の爆音を抑える為、止めていた呼吸を再度行っていた。

（このローブ男が一人でやったのか……？）

3人のあまりの酷い有様に目を背ける事無く、事実を受け入れる。友春を異教徒と言ったローブ男はメシア教徒であろう。それは間違いない。ならば異教徒とはガイア教徒の事である。ローブ男が昏倒している事を確認してから、友春は死に掛けている、顔を腫らした男へと近づいた。

「お前ら・・・ガイア教徒だったのか？」

息も絶え絶えな男はフルフルと震えながら「・・・そ・・・う・・・だ」
とだけ答えた。男は目の前の人物を確認するように視線を上げる。
友春の見やすい位置へとしゃがみこみ、相手に顔を確認させた。男
は「・・・お前・・・か」とだけ呟いた。

（こいつが死んだら・・・何処に電話すりゃいいのか。やっぱり警察かあ？）

そう考えていると男は「・・・これを・・・」と右手を掲げた。

（・・・？）

それは不思議なモノだった。小さなモニター付きの筆手。ボタン
がキーボードのように浮かび上がっている。ボタンには絵文字のよ
うな意味不明な文字が描かれていた。

（なんだこりゃ・・・？こんな玩具を俺にどうしろと？）

そう考えているうちに、男は器用に片手で右手の筆手を外し、友
春に差し出した。男は最後の力を振り絞りながら

「悪魔擬・・・似・・・召還プログラム・・・試作・・・品・・・
・・・」

それだけを言い残しガイア教徒は・・・硬く冷たい路地裏のコン
クリートに身を捧げ、己の時を止めた。

有体に言えばこんな馬鹿馬鹿しい話は常人には信じれない。事もあろうに死を寸前に得体の知れない箆手を差し出し、悪魔召還アイテムだと言うのだ。

だが友春はなにかこの箆手には魔力めいたモノを感じた。魅了して止まない何か。友春は不気味に白光する箆手をその手に取り、初めて気付いた。・・・愛用していた腕時計が潰れていた。

（・・・また等価交換と言うやつか・・・）

友春はウンザリした顔で時計を外し、その辺にあったゴミ箱へと捨てようと思い、ポケットに突っ込んだ。

等価交換の代償。腕時計を失い、用途不明で如何わしい白光する箆手を手に入れた。箆手をジャケットの裾を上げずにそのまま服の上から被せ、皮製のベルトをきつく締め上げる。以外にもフィットしており、中々の装着感だった。

追剥ぎのようにも感じられたが、これは託されたのだと直感していた友春は生命活動を終わらせた3人の男の事を警察に知らせるため、近くの公衆電話に行こうとした。

友春の周りに沸いて出た、ローブ男の姿が増えていなければ・・・そのままこの異変は終わっていたかも知れない。

まず初めに友春は目を疑った。

酒を飲んだ事は2、3回はある。しかし皆が言うような電信柱が3本も4本も見えたりするような、不可思議な現象には未だに立ち会ったことが無かった。

しかしその現象は素面状態じふめんの友春にもはつきりと判るように、彼のすぐ目の前に規律正しく立っていた。

青と白を基調としたローブが3つ。メシア教徒の狂信者達の深く被ったフードは、まるでフードに顔を飲み込まれているような印象を与える。顔の判別は全く出来ない。どれもこれもが同じようにしか友春には見えなかった。

暗く狭い路地裏に3列並んだ規律正しい青と白が1列・・・ゆらりと動く。まずは友春から見て左に立っていた男が動いた。

「救いを・・・与え・・・えええええん！」

そう言いながらナイフを片手に走り寄ってくる狂信者・・・！

（・・・なんて異常事態）

恐怖と言う思考が勝手に友春の頭の中でイメージを作る。刺された時どれ程血液が流れ落ちるのかな？切られたら自分の筋肉細胞はぶちぶちと千切れるのかな？

友春は頭を振り、妄想を振り払う。その動作を不振に思うほど、突っ込んできたメシア教徒は頭の良い人間ではなかった。友春は先ほど昏倒させた狂信者と同じ要領で、奇声を上げながら狂信者が突き出してくるサバイバルナイフをサイドウェイでやり過ごし、未だ

衰える事の無い相手の勢いを利用して

ゴシヤツ！

相手の鼻っ柱をへし折るように右フックを繰り出した。骨の砕けた感触はいつ感じてても嫌なもので、メシア教徒は友春の拳を枕にするように、そのままうつ向けに倒れていった。

これで二人。友春の頭の中で異常分泌されたアドレナリンは、何故メシア教徒が襲い掛かってくるのか・・・等という事実をどこかに放り投げてくれていた。

(・・・それでいい)

疑問は体に余分な動作を与える。疑問は頭を働かせてしまう。この異常風景において『疑問』を抱いた瞬間、後ろで転がる名前も知らない3人組の屍達とあの世へ旅立つ事になる。

もう一人のメシア教徒は学習能力が無いのか・・・やはり奇声を上げてナイフを突き出してきた。さすがに3回目の動きには余裕が生まれ、回避する前に相手のナイフを持つ手の甲へ拳を叩き込む！

ゴキ。と言う音と共に男の右手の指・・・2、3本があらぬ方向へと曲がっていた。どうやら叩き折れたらしい。青年の拳が吹き飛ばしたナイフはビルの壁に激突し、刃を半身失っていた。友春はトドメとばかりに、悶絶する男のフードの孔に全身の体重を乗せた拳を叩き込む。男はスケート場でスリップしたように足を上へ、頭を下へと移動させられて・・・ゴッ！と言う生々しい音と共に奇声を止めた。

あと一人。そう思い狂信者を見やり・・・友春は驚愕を隠せなかった。

狂信者はフードを頭から取り除き、その素顔を友春に見せるようにニタリ・・・と笑った。

「てめえ・・・」

そう呟くのを止められなかった。目の前の男はつい先程、この異常空間に友春が紛れ込む前に駅前で宗教者の呼び込みをしていた男。友春が怒りに身を任せつい罵倒してしまった男。その男が・・・この血の匂いが充満している異世界に飛び込んできた。

「凄く暴れてますね。貴方。とても良くない、良くない、良くないですよ？このままじゃ救世主様メシアに救ってもらえませんよ」

カクン、カクンと電池の入りきっていない人形のように顔を動かしながら、男は下卑た笑いを友春に見せ付ける。

「気持ちの悪い、吐気がする笑いをこっちにむけんな・・・！メシア教つてのはてめえみたいな人の皮をかぶったバケモンを集める集団なのかよ」

友春の罵声をハハハと生気の籠らない笑い声で退ける、メシア教徒。

「あなたの様な醜い心でも神は救ってくれます。さあ心を清らかにし、全てを『神』に捧げるのです。信じるのです『神』が生み出す世界を救う救世主を」

「・・・神が生み出すだと？ハッ！笑わせるなよ。神の思いのままに使われるような救世主が一体俺らの何を救ってくれるって言うんだよ！大体な、世界を救うって意味判ってんのかてめえ！？」

相手の冷静な物言いにに対し、激昂しながら友春は吐き捨てるように狂信者を罵倒する。目の前の男は2人・・・いや3人の倒れた信者を見ても、感情の無い顔をしている。生きているのに死んでいる顔。・・・死んでいるのに生きている男。

「大体、救世主様ってのはどうやってこの世界を救うんだよ！この汚染されまくった空気を一掃してくれるのか？貧乏な奴らに金を恵むかよ？この東京のビル畑を一面綺麗な花畑にでも変えてくれるのかよ？ああ！？」

「その通りです。察し・・・いいですね」

虚を衝かれるまさにこの事だろうか？目の前の男は友春の罵倒・・・有り得ない、出来ない事を、その通りと宣^{のたま}まった。

「何・・・言ってた・・・てめえ」

友春の呟きは、久しぶりの激昂からか・・・未知なる恐怖からか、微かに震えながら相手の答えに縋る様に絞り出てきた。

「簡単です。この東京を破滅させるんです」

許斐友春はこの一言で駆けた。狂信者・・・いや友春の中ではすでに目の前の男は、狂信者ではない。目の前の『イカレたジャンキー』に向かってファイティングポーズを取りつつ一気に接近する。

「だって、薄汚れているんですよ？だから一度、綺麗にしないと綺麗に綺麗に」

ゴオオ、と風を切る音と共に友春は男に急接近する。

「綺麗に・・・綺麗に綺麗に綺麗に綺麗にキレイ・・・キレイキレイキレイキレイニ！」

男はナイフを取り出した。キレた発言の後の行動。・・・友春は逡巡し、後数歩と言うところで急ブレーキをかける。

（相手が切りかかってきた時が一番のチャンス・・・！）

そう思い、相手の行動を良く見ている。

そして 相手が自分の手首を切り裂いた所を良く見てしまった。

その狂った姿があまりにも脳裏に焼きつき、ある男を目の前の狂信者に重ねてしまった。

（・・・父さん・・・？）

狂ったその光景はあまりにも良く似ていて。声や発音も良く似ていて。まるで目の前の男が脱獄してきた父なのではないかとも思えた。

「アアア・・・。キレイニシナクチャ・・・キレイニキレイニ・・・。テ・・・ンシサマ・・・」

妄想に気を取られていた為か、目の前の男が死に掛けていた。自殺をしに来たのか。そんな訳が無いだろうに、だがそんな友春の暢気な考えを振り払うように・・・『奇跡』が起きた。

ビルにこびり付いた血痕が何時の間にか、西洋の魔術等の『魔方陣』と呼ばれる形を成し、中央に友春の見覚えある象形文字のような落書きが映し出された。

（何処で見た？あんな文字見たこともないはずなのに・・・）

何故か記憶のものと一致する文字。気付けば血で作り上げられた魔方陣は、どす黒くビルの壁に描かれており、それを作り上げた男は・・・壊れた笑みをその顔に張り付かせたまま絶命していた。

ウン！

突如鳴った機械音に友春は体を強張らせる。見ればいつ解いたのかわからないファイティングポーズを構えていた右手。そこに着けられた筆手の小さなモニターが薄緑色にライトアップされている。見れば小さな文字がツラツラと現れては消え、現れては消える。そんなモニターの上半分。・・・血で出来た魔方陣の中心に書かれた文字と同、じ落書きがボタンに書かれていた。

ドクン・・・ドクン・・・と心臓が蠢動する音。腹の底に響くような、ともすれば太鼓のような音が魔方陣から聞こえていた。

嫌な予感がした。シックスセンスと言うのを友春は今度ばかりは信じたくなかった。

（・・・逃げろ・・・！！・・・でも何から・・・？いや・・・わ

かんねえけど・・・逃げなきゃやべえ・・・！）

友春の体に流れる警戒音、警告、警報。ここに居ては危険だと、今までの異常事態を思い出せばすぐにわかる事だ。それなのに、恐怖心のせいで足は竦みあがり。好奇心のせいで足は動かなくて。見届けたい気持ちから足は直立不動となり、大地に根を張った。

幾人もの重傷者と死体が散乱する腐乱空間で、一人の男が血液で描かれた魔方陣に魅了されたように立ちすくむ。見る人から見れば友春はキチガイにしか見えないだろう。

ドクン・・・ドクンと蠢動音は鳴り止む事を知らないように、次第に路地裏の壁となつていくビルがこの世界の心臓となつていくような印象を与える。

魅了されたように見つめていた血液魔方陣から・・・何かが生まれてきた。

初めは手だった。綺麗で体毛や毛穴など無い程にまで美しい腕・・・赤ん坊のような肌の、細く長い手。その手が中空を掴み、己をひきづり出すように頭が這い出てきた。美しく映えるブロンドの髪。サラサラと髪から雫が落ちてきそうな艶を持っていた。美しいと思えた。

美しい四肢と煌びやかな髪を持つ羽を持つ女性体だった。足首には手錠がはめられており、黒いレザーを体に巻きつけ動きにくそうな格好をしていた。しかしその黒い服・・・とも言えぬ服が天使の様な羽を一層引き立てていた。

「・・・天使・・・？」

自分でも気付かぬ内に眩きが漏れていた。その瞬間、魔方陣から這い出てきた美しき天使は、こちらを向いた。

天にも昇る気持ち・・・と、言えいいのだろうか？

その気持ちを粉々に打ち砕いた映像が友春に流れ込む・・・！

美しい髪で隠れていた顔は革製の大きなアイマスクがされていた。それだけならどうとでもなる。想像して綺麗な女性の顔を思い浮かべた。

だが・・・女のアイマスクからは五寸釘のような太い釘が幾本も立っていた。女のアイマスクからは血が滴り落ちていた。髪の艶は恐らくは垂れ堕ちている『血液』。口はムンクのように上下に裂け、閉じる事が出来ないにも見える。

上下に裂けた孔には歯・・・だったものだろうか。沢山、不規則にバラバラに並んでいた。口からは涎が垂れ流れ、知性のかげらはその姿からは感じられなかった。

果然とその異物を見続けていた最中、右手の籠手が発光を強めた。

「Summons failure///Race Angel
el///Name///brokenAngel」

モニターに色々な文字が出てきた中、この文脈だけが記憶に残る。

（・・・サモン・・・召喚？失敗・・・レイス・・・種・・・族か？エンジェル？天使だと？）

そして最後の文字。

（ブローケンエンジェル・・・壊れた・・・エンジェル）

友春は目を見張り目の前の異物を見る。

そしてこの筆手を渡した男の言葉を思い出す。

「悪魔・・・擬似召喚・・・」

（本当だったのか？・・・こんな事態が起きていいのか？・・・こんな生物が居ていいのか？）

しかしあの象形文字。最後のメシア教徒の言葉。この不思議な筆。そして・・・拭い去れない目の前の現実。それら全てが符合してしまう。

異物が友春を威嚇するように羽を広げた。

（死ぬかもしれない・・・。殺されるかもしれない・・・）

目の前の異端は居るだけで許斐友春の死のイメージを植えつける。

だがしかしこの異常な空気が、血が充満するこの空気が・・・この数ヶ月、友春自身が自分自身の惰性的な生活に終止符を打てるような気がして・・・！

未だ追いかけている父親の妄執から逃げ出せそうな気がして・
・・！

母親の死に報えるような気がして・・・！

許斐友春はうつすらと笑いながら天使と相對した・・・！

ヴ・・・ヴヴ

「Digital///Devil///Pseudo///S
ummons///Program///Start///Sta
ndby」

一節 残照風景 - 許斐 友春 #02 - (後書き)

Key Word

> 拳闘 ボクシング <

許斐友春が高校3年間を通して続けた格闘技兼スポーツ。

顔面を強打すると言う荒っぽい格闘技で、恐らく打たれ強さと不屈の精神、瞬発力にかけてはトップクラスの格闘技と思われる。友春は才能があつた為、悪魔達と素手で対等に戦っていた。

> 悪魔召喚 <

メシア教徒が行った奇跡の一つ。

体中を流れる血液の中から>生体マグネタイト<を放出し、異界より悪魔を呼び出した。

その際に召喚者の血液の>業<により現存する悪魔が変わってくる。精神崩壊一步手前だったメシア教徒が呼び出したのは、どのランクにも当てはまらない壊れた天使であった。

一節 残照風景 - 日常生活 - (前書き)

居神心の日常へ異常への道しるべの話。

一節 残照風景 - 日常生活 -

199X年10月30日（金曜日）

199X年。世界は徐々に『繁栄』と言う成長促進剤を常にその身に受け入れ創めた。繁栄と言う薬は世界に住む人々に有益となるまさに理想の薬。しかし、世界に寄生する人間はその薬が世界そのモノをどんどん腐らせていく、毒薬だと言う事にまだ気付いていなかった。

街には大木のようなビルが立ち並び、緑は駆逐され、人と言う動物以外の存在を否定するように街は成長していった。豊かな自然を破棄し、人が愛する無機物を誰の許可を得て成したのか・・・巨大な建造物が無尽蔵に立てられていく時代だった。

世界は未だ廻り続けているのに、そこに住まう人間は世界終末論を提示してきた。そしてこの世に『悪魔』が現臨し始めていると、少しずつ人々の心に浸透し始める。それが認められるには世界・・・常識の崩壊が必要だった。

人間が持つ『常識』が悪魔達の存在を未だ『居るかもしれない』程度に留めている。しかしこの世界の総て・・・いや八割程度で事は成り立つ。八割の人間が『居る』と認識、諦めにも見た異常の認識を行う事で、悪魔達は外理世界から内理世界へと・・・つまり『魔界』から『現世』へと現れるだろう。

その悪魔達の現臨を望む二つの意思。

『メシア教団』 悪魔・・・『神』の再臨を心待ち、神によって生み出される『救世主^{メシア}』が世界を救う、真理を心持つ狂信者達の集い。彼らにとつて悪魔は憎むべき世界の癌。根絶やし・・・あるいは外理世界への追放を望んでいる。されどその世界は『法』と言う絶対法則が織り成す矛盾世界。壊れた硝子のように様々な秩序^{ロウ}を映し出す・・・人間が人間として生きられぬ世界を目指す。

『ガイア教団』 悪魔・・・『天魔^{てんま}』と言う黒き光に蛾が街灯に導かれる様、無法に集う信者達。彼らは悪魔達との共存を望む者達。されどその共存は『力』によつてのみ形成される無法の世界。ありとあらゆる事象は捻じ曲げられ、狂った万華鏡^{カオス}の様な混沌を織り成す・・・人間が人間として生きられぬ世界を目指す。

時代は混乱を人に提示する。人々は迷い、探し、疲れ果て、また歩き出す。行き着いたのは空虚な祈りか、虚無の生か。・・・全ての答えは『魔都・東京』にて導き出される。

しかし双方の道に続く答えへと続く道の通過点。紛う事無く、抗う事無く、避する事無く。『世界崩壊』と言う通過点を通る事が必要だった。

「言つてなかったか？俺は今日は非番だぞ」

痴れたフリすら見せぬ居神光太郎の言葉に眼を見開く少年、居神心は自らの兄を非難するような目でねめつける。

「ぜんっぜん聞いてないよ！そんな事だったらとつとと学校に行つておけばよかった！」

非難めいた弟の言葉を聞き、光太郎は肩をすくめる。自らには全く非がない。と言わんばかりのリ・アクション。中々に決まったのではないかとフンと得意顔になる。

「お前が下らない事を聞いてくるのが悪いのだココロ。非はお前にこそあると思うぞ？兄は今日久しぶりに訪れた休暇を楽しもうと思っていたのに、朝からメシアだのガイアだのの会話を終わらせなかったのだ。兄の休日を潰したと思い、少しくらい遅刻しそうになっただけで構うまい」

「構う！構うよ！ちよつと寝坊したくらいでリビングの時計30分もずらさないよ普通！大体メシアだのガイアだのの会話を延々続けていたのは兄さんでしょ！」

ココロは椅子にかけておいた制服のブレザーを着込みながら、怒鳴り声・・・ココロと言う少年は大声のつもりなのだろうが、いかんせん迫力は無い。をあげながらリビングの時計を指差す。リビングの時計は8時45分。しかテレビ画面に映し出されているデジタルな時計は9時20分を示していた。ココロの高校への道のりから考えると有無を言わさぬ完璧な遅刻『寸前』である。

「兄の寛大な心を無下にする気がココロ。お前が俺のトリックに何時までたっても平和顔して気付かないから教えてやったというのに」

平和顔と言われ、中性的な顔が少し不満げになる。居神心と言う少年は、温和で柔らかな顔をしており女性のような顔立ちとまでは行かないも、中世的な面をしておりそれをコンプレックスに思ってい

た。サラサラと流れる黒髪がそれを助長する。

「平和顔って言わないでよ！気にしてるんだから！兄さんがそう
いつて中学の頃、僕の友達にそのあだ名を広めたのはまだ忘れてな
いんだからね！」

勿論、男子にとってそれは精神的なコンプレックスである。ココ
ロもその例に漏れる事無く自分の顔や、少し小柄な体を嫌っていた。
彼の前で片肘ついて手の甲の上に顎を乗せ、何処からどう見ても馬
鹿にしたような態度で居る兄。彼が男らしい人間だからこそ、ココ
ロにとってより強いコンプレックスとなっていた。

「まあ、それはそのうち強制的に忘れてもらう事になっている。い
つその事高校にも広げてやろうとも思っているんだが・・・ま
あそう睨むな。冗談だ。兎にも角にも、とっとと学校に行かないと
遅刻『確定』刑となるぞ」

ココロはあまりの自分の不遇な立場に怒りを通り越し、引きつつ
た笑顔を兄に示す。いつか復讐してやる・・・！そう昔から決めて
いた。

「遅刻なんて『瑣末な事』だよ！じゃあ、いつてきます！」

兄の返答も待たずリビングから飛び出して玄関へと走っていく、
弟の後姿を見ながら

「なんならパトカーで送って行ってやろうかー？」

「この・・・不良刑事いい！！！」

不良刑事「居神光太郎」はクククと喉を鳴らしていた。

街角に貼られているメシア教団のポスターを眺めながらココロはひた走った。晴れた天気の中、少し肌寒い風がココロのヒートアップした心中を穏やかにしていく。

遅刻寸前で、古くも無くさりとて新しくも無い、見慣れた学び舎にたどり着いたココロはいつもの、変わる事の無い日常をその身に浸透するように味あわせていた。

不変の毎日、されどその不変から学び取る事は多すぎる。人間はこの不変から学び、変動に備える。人間だけではない、動物、自然、そして・・・世界。不変と変動は切っても切れぬ螺旋塔。

そんな不変を愛しく思いながら、ココロは毎日が幸せそうな顔をしていた。

朝のような兄との口論は好きだった。学校の友人達と話す取り留めない、明日には忘れていそうな対話も好きだった。窓際の席から眺める風景も好きだった。そう、日常の不変を人間は愛さなければならぬ。変動を求める人も居るだろう。それは不変から変動への挑戦。『不変で学び』『変動へと挑戦』するのだ。これが人間の生きる道。そう、ココロは思っていた。

学校の授業を撫でるようにこなし、良くもなく悪くも無い成績でクラスに溶け込む。ココロは友人達からの風評は良く誰とでも仲の良い、何処にでも居るようなごく一般的な生徒。

学業が終わり、放課後。後は帰るだけの時間。友人の一人に誘われ、CDショップへ。聞きなれないグループ名を熱く語られ、そこまで言うのならと着いてきた。特に買うものも無いココロだが、店内を物色しては友人の姿を確認し、また物色し始める。そんな繰り返しを続けて、時間と言う貴重な硬貨を有意義に世界に支払った。

友人達と店から出たときは秋特有の現象が、まだ6時にもならないのに辺りは闇に侵食されたように、光を奪い去っていた。ビルから放たれる弱々しい電光が必死に抵抗をし、ココロ達の足元を照らしている。

「じゃあまた・・・明日ね」

ココロは友人達と分かれ、家路へと急いだ。夜の街。当然、まだ人が出歩いている時間である。暗闇に対しての恐怖等もなければ、夜遅く・・・と言う概念への畏怖も無い。しかしココロ自分自身に気付いていないだけで、足はメシア教徒やガイア教徒が見られるという大きな道、駅前を回避しながら、誰の目から明らかな急ぎ足になっていた。

本日10月30日・・・。日常は壊れ異常へと変化する。愛して止まなかった不変は、望まぬ変動へと掬^すり返られる。この夜から『居神心』の世界は・・・壊れる事になる。

世界は変動への挑戦を望むのか。明日への不変を望むのか。その時はまだ、地球上の生物には計り知れない事象だった。

突然なのだが、皮を叩く音と言いつのを聞いたことがあるだろうか？ベルトを重ね緩ませ引つ張る。パシン！と言う音。レザー製のサンドバックを思い切り殴ったような音。・・・人間を殴り飛ばすような響く音。

ココロの耳にそんな小さな違和音が飛び込んできたのはビルとビルの谷間。その隙間から風に乗って聞こえてきた皮を叩く音。

日頃から兄にどんな小さな違和感を感じても、どんな小さな危険を感じても。それら全てを回避するように徹底されていたココロ。そう、このまままっすぐ家へと帰ろうと足を動かす。

はずだった。路地裏から悲鳴さえ聞こえなければ。

己の身が一番大事。これはどのような人間においても優先される事項である。ココロもそう。しかしそれは他人の命が関わっていない場合である。もし他者の命が自分の些細な行動で救われるのであれば、己の身を率先して動かすべきだ。・・・そう理論で解ついても体と言つのは動かない。ココロは直立不動のまま、まるで金縛りにあつたように動けなくなっていた。

突如として響く、悲鳴とも雄叫びとも判別つかぬ人間の声と、聞いた事もない違和音が隙間風に乗ってくる。

そんな異常な音を聞いてしまい、ごく一般的な人間の思考回路がおかしくなってしまったのも、仕方ないといふべき事なのかもしれない。いつもならばこんな事をするような少年ではないのだが、ココロは意を決して路地裏で起こっている事象を確認しに行った。

もし、暴力事件なら家に兄が居る。すぐさま電話をすれば良いことだ。なんでもない事ならすぐさま引き返して逃げれば良い。．．．なんでもないはずなんて無いのにココロは、そう荒唐無稽な理論を脳裏に張り巡らせる。

コツ。コツ。と己の耳に革靴の音をしっかりと捉えながらココロはゆっくりとビルの隙間、路地裏へと足を運んでいく。まるで死刑囚が死に行くようなプロモーションビデオだな．．．と暢気な考えを頭に無理矢理植え付ける。そうでもしなければ『異常』に憑り殺される気がした。

強く鉄の匂いが鼻をくすぐる。暗く細い、電光が届かぬ都会の獣道。赤黒く飛び散った紅く乾いた液体はペンキなのだろうか．．．それとも．．．。暗闇はココロを飲み込むようにずぶずぶと深くなっていく。恐怖心をココロは抱きながら、一本道の谷間をずっと．．．ずっと．．．歩いていく。

違和音が鳴り響き、悲鳴があがる。ココロはドキドキと体に心音を響かせ、路地裏の最果てへと顔を覗かせる。そこには大きなバスケが出来そうな位の広場があって．．．

そこには『異常』が広がっていた。

一節 残照風景 - 日常生活 - (後書き)

Key Word

> 学校 <

居神心が通う学校。通学路にはメシア教団のポスターがあれよあれよと

貼られており、通学中精神的に疲れるらしい。

また許斐友春もこの学園に通っている・・・が最近では登校していない。

服はこの時代では珍しくない、黒の学生服を基本としている。

> 悪戯 <

居神光太郎が弟に対してよくやる行為。

主におちよくったり、からかったりする。

ストレス解消と見られがちだが、彼特有の家族愛溢れる接し方だったりする。

傍迷惑としか言いようが無いです。

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 3 - (前書き)

精神崩壊を起こしていたメシア教徒が呼び出した『壊れた天使』
許斐友春が初めて悪魔との死闘を演じる・・・！

一節 残照風景 - 許斐 友春 # 3 -

回想・・・1999年10月13日（火曜日）

不変は人に尊きを学ばせ、安寧を知らせ、豊かさを尊ばせる。

不変があるから人は人生を緩やかに生きる事ができる。

今、吸っている空気が突如として消えうせるだろうか？

今、飲んでいる水が突如として消えうせるだろうか？

今、着ている服が突如として消えうせるだろうか？

あるかもしれない。突如として不変は終わりを告げる。

日常、歩いているだけで通行人に包丁で刺されてしまう。不変の
終わり。

日常、電車の駅のホームから足を滑らせ轢かれてしまう。不変の
終わり。

日常、旅行に行こうとした矢先乗っていた飛行機が墜落。不変の
終わり。

不変は終われば先には何も無い。途切れてしまった不変と言う日常の先は暗く果てし無く闇が広がるだけ。

では・・・『変動』とはなんだろうか？

日常、今まで行く事のなかった病院に通院する事になった。しかしこれは変動ではない。日常の不変にほんの少し『変化』が起きただけ。変化を吸収し、日常はまた不変となり、変わらぬ日常となる。

では変動とは・・・？

今までの日常を殺す事ではないだろうか。不変と言っなの日常を殺し、新たな日常を探し、受け入れる事。

しかし、変動を起こせば今まで居た不変の日常には『絶対』に戻れない。これは人として生きる事の『ルール』である。

小学生から中学生へと変動すれば小学生へは戻れない。

社会人になれば今までの学園生活には戻れない。

不変の日常から多くを学び、知り、経験とする。そして『変動』するチャンスを探し、見つけ、今までの不変の日常の『卵』の中から変動・・・『羽化』する。人はその繰り返しで成長し、多くを知り、人生と言うトンネルの色を明るくしていく。

しかし時折、望まぬ変動を起こしてしまう者も居る。それは自分が知りえぬ所で勝手に起こり、今の不変を破壊してしまう。それは自分が拒否しているのにも関わらず今の不変を破壊し、新たな変動へと無理矢理に導いていく。

暗い暗い路地裏。右と左にしか通る道が無い一方通行。ビルとビルの隙間に出来た、道ともいえない理由の無い道。まるで自分の人生のようだとも友春には思えた。

ニット帽を深めにかぶり、赤いジャケットにジーンズのズボン。肌寒くなってきた子の季節には少し、薄着にも感じられる。眼光鋭く、その目には彼以外誰も居ないにも拘らず周囲に敵意を送っていた。何かを不満に思うような口元は不満げに一の字を描いている。青年『このみともはる許斐友春』は街と闇を交差させる路地裏で、クロス疲れたように座りこんでいた。

街を歩いていれば不満そうに歩く青年たちの一人のようにも見えたが、路地裏にうずくまり、右手には白く光る籠手型のハンドCOMP。ジャケットの上からつけられたソレは手の甲部分にモニターが設置されており、その周囲には薄いボタンがいくつもあった。誰がどうみても一般人からは少々敬遠されそうな雰囲気その身に纏っていた。

夜の帳がするすると消えいき、朝を象徴する美しい白空が天を多い尽くす時間。未だに友春は右手のCOMPのモニターをじっと見つめ、己自信を詰問するような目で睨みつけていた。

父や母から逃げ出し、ただだと生きていた毎日。停滞し、動かない毎日。そんな中で出合った異端風景。3人の顔も良く知らない不良達が殺された現場の目撃。それを一人でやったのか、メシア教徒の出現と突然の襲撃。ソレの撃退と突如沸いて出たメシア教徒の増援。2人倒し、最後の一人が・・・狂い。そして

壊れた天使を召喚した。

そして、友春は感じ取った。この天使は・・・救いなのかもしれない。自分の死亡した日常をがらりと変え、新たな日常を与えてくれる『神の使いかもしれない』、と。

今でもあの戦いは彼の脳裏からは離れない。初めての異形との戦い。そして・・・。

何者かがこの路地裏に侵入してくる音を聞いた。確かな足音。そして狂う事の無い『数名』の足音。まだ友春に近づききるまで少しの時間が掛かるだろうソレを聞きながら、友春は『壊れた天使』の事を思い出してた。

一人の壊れてしまったメシア教徒は、壊れた魔方陣を描き、この世とは別の世界から呼び起こした。『壊天使』を。

許斐友春が相対した天使からは表情を読み取れない。フードを深めに被り顔を隠匿するメシア教徒と似てはいるが、この天使は鼻まですっぽり覆いつくす、皮製のアイマスクで顔半分を隠している。そこからは太い釘がごつごつと生えている。皮膚に食い込み、肉を貫く釘からは血が滴り落ちていた。口は小さな顔には不似合いに縦に割れており、唇と言うものが無い。ただそこはパツクリと裂けていて、歯茎のような薄い桜色の肉から醜悪な墓石のような歯が縦方向にアンバランスに生えていた。

体は美しく黒いレザーで女性体の乳房や股間を覆い、まるで有名な『ヴィーナス』のようである。その美しい体の背からは見るも煌

びやかな白い羽が生え、見るものを圧倒し平伏せさせる雰囲気をもし出していた。

しかしその美しい体が逆にその恐ろしいまでに壊れてしまった顔を強調し、神々しい雰囲気恐怖に変わってしまった。

友春はその異形を前にして顔に笑みを張り付かせていた。引きつったような諦めに近い笑みでは無く、楽しくて仕方が無い快感を得た笑み。狂ったように目は相手に対し敵意をぶつける。

「Round 1・・・行くぜ・・・！」

得意の「拳闘」スタイルを取り相手への距離を縮める。

逡巡すれば負ける。その考えすら友春は生命の危機感から脳裏から押しやる。彼の頭には勝つ事・・・考える前に動く事しか無かった。

「・・・らあああ！」

人を効率よく殴るのに必要なのは「タイミング」と「腰のひねり」「足の踏ん張り」そして、「慣れ」。

一番重要なのは・・・「容赦しない事」だと友春は知っていた。

天使とすれ違う程に近くまで移動し、一瞬のうちに体を潜り込ませ腹部に右拳をめり込ませる。皮と皮のぶつかる音など聞こえず感じたのは相手の肋骨が折れる感触。普段はここで止めるが友春は・・・押した。そのまま腹筋、脚力、腕力を総動員し、相手の腹部を貫通するのではないかと思われる程腕を振り抜いた。

一瞬、友春の足がたたらを踏む音が路地裏に鳴り響く。その一瞬後突風。バサリバサリと風を唸らせる音。

「A A a a a A A - - - A A - - - A A A A A - - -」

天使の鳴き声が響いた。友春は未だに相手の骨を砕いた感触が残る右手を名残惜しそうに拳闘スタイルに戻し、中空の天使を仰ぎ見た。

「卑怯モンが・・・！」

その嫉妬心が含まれた罵倒は天使に届いたのか・・・。天使は友春の拳が命中すると共に、その痛みから逃げるよう背の羽を羽ばたかせ狭い路地の中空へと飛び上がったのだ。腹部に残る激痛を取り払うように腹を掴み、押さえ込む。

友春にも「飛翔」する予感があった。だからこそ一瞬のうちに相手を沈めようとした。しかし目の前で人間大の物質が羽を唸らし飛び立つのを見て友春は異常な状況を再確認する。

「本物の天使だとはな・・・憎たらしい顔して憎たらしい事するぜ・・・！」

相手が空中に浮いている状態では友春には文字通り手も足も出せなかった。拳銃や投げナイフ等あれば対応できるかもしれないが、友春にはそんな技術も知識も無い。今ある『拳』だけで相手を沈黙させなければいけない。そんな緊張が天使に伝わったのか、天使は未だに鳴き声を上げる口から

「A・・・A・・・あ・・・あ・・・コ・・・
コロ・・・シテ・・・ヤ・・・ル」

殺意を宛がって来た。縦方向に裂けた口を器用に蠢動させ、友春へとメッセージを与えてくる。

（ここからが本番か・・・！）

友春は死のイメージを取り払うように、軽快なステップを打ち鳴らせ突如遅い来る可能性に警戒した。

「・・・え・あえ・・・」

空に浮かぶ天使は口をもそもそと蠢動させ言葉を吐き出す。友春にはその行動の意味するところがわからなかった。試行錯誤を行う前に友春の右手に着けた遺留品、筆字型COMPの悲鳴の様な電子音が緊張の場に鳴り響く。

ピーッ！ピーッピーッ！と凄まじい音を立てる。まるで今の持ち主である友春に危険を知らせるように。友春は今までと違う違和感を覚え戦闘スタイルを解かぬままモニターを覗き込む。

「・・・MAGIC?・・・魔法・・・だと・・・。・・・つい・・・わかんねえ！何魔法と読むんだよ・・・！・・・ZAN?・・・」

最後に浮かび上がる「ZAN」と言う文字。その言葉を友春は確認するように叫ぶ。

「「ザン!」「」

友春と異形の天使の声が重なるように路地裏に木霊する。見れば天使は両手を友春へと向けている。その先端・・・開いた手の平の前面に浮かび上がる魔法陣。天使が現れた魔方陣とは違った文字が中央に描かれていた。

友春は嫌な予感が走るのを止められなかった。死の予感。瞬時に後方へと距離のあるバックステップをし、吹き飛んだ。

「がはっ！・・・っあ！」

まるでプロのボクサーのアップercutが決まったようだと言春は思った。凄まじい『衝撃』は友春の顎を突き抜けていく。喉仏が引きちぎられるような痛み。体は空へと投げ出され、スロモーションのように落ちて行く。

「がっ！・・・ああぐ！・・・ぐううううううああ・・・」

凄まじい痛みが友春を襲っていた。しかし、この痛みは拳闘を嗜んでいる時に良く味わっていた痛みに似ている。友春はふと先輩から教えてもらった言葉を思い出していた。

『痛みがあるうちに痛がるとけ。痛み声は自信を助長する力がある。悔しかったら声を上げる。痛かったら叫べ。あらん限りで己を表現し、自分自身に示せ』

こんな言葉をくれたのは誰だったか・・・よく青いバンダナを巻いていた転校してしまった先輩を思い出す。痛みを自分のモノと、屈辱を自分のモノだと納得させ、友春は今一度天空で優雅に羽ばた

く天使を仰ぎ見た。

「ぬう・・・く・・・!!・・・てめ・・・てめええええええ！」

殺意を含む怒号。チンピラ程度ならこの声だけで戦意を奪い去れるだろう。しかし目の前の天使には感情が無いのか、こちらを見下ろしかくかくと顔を揺らす。その動きは天使を呼び起こしたメシア教徒に似ていた。

（どうにか・・・あんな遠距離攻撃されていたら・・・手も足も出せないまま殺される）

友春はいつのまにか魔法と言う突飛な存在を認めていた。それは当然であろう。なにしろ『実行』と『犠牲』になつた許斐友春と言う人物を体験したのである。魔法と言うものに恐怖を感じ、また幸運だとも思っていた。

（もしも今のが衝撃なんてもんじゃなくて・・・火や雷が飛んできてたら・・・）

そう、死んでいたのだ。そう思い友春は幸運だと思っていた。しかし依然、相手は中空に浮かび、いつでも魔法を繰り出せる準備をしていた。

（どうする・・・！）

さすがに拳闘で鍛えたと言ってもそれは地上に居る相手のみに有効な『力』である。彼の腕は伸びないし、また彼自身空中に跳躍する術を持たない。

相手の魔法陣がまたも『意味』を持とうと光りだす。陣の中央には先程の衝撃の意が記した『形』が記される。友春は内心舌打ちをしながら、路地裏の深部へと向かって走り出した。ステップとは違い、全力疾走。逃避ではなく、新たな戦いをする為の準備。

天使はそんな友春を見て、裂けた口を蠢動させ笑い声にも似た呻き声を出していた。

「はっ・・・あ・・・！はっ・・・」

たいした距離でもないはずなのに体は呼吸を大量に求める。心臓は爆音を鳴らし血液を流動させる。緊張からか普段走るよりも体力を大幅に消耗してしまう。

「くそがあっ！」

出切るだけ大きな声を張り上げる。己の声は己自信に響き「しっかりしろ」と言う言葉を脳裏に刷り込む。怒声は自分自身を落着かせる良薬となった。

（どうする・・・あんなのに勝てるのか・・・？）

今更であった。落ち着いた心は冷静になり、「退却」と言う言葉を脳裏へと運び込み実行させようとする。

（ふざけるな・・・っ！まだいける・・・っ！）

そう、例えば硬いものを投げつけるとか・・・そう思い硬い物・

・ 箒手に手をやる。

（そういえば・・・）

危機が迫ると先程から電子音を鳴らし友春を救おうと知識・・・
メッセージを送り出してきた箒手型COMPを見やる。あの時見た
魔方陣の中に描かれた象形文字と同じボタンがあった。

（まさか・・・）

友春は予感めいた直感を胸に、あの時の象形文字・・・そう世間
で言う「ルーン文字」を押した。

天使は友春を追いかけていた。あのまま捨て置いても良かったが、
召喚主の最後の願いがあの人間の浄化だった。その命に逆らう事も
出来ないし、あの人間が与えてきた屈辱的な痛みを忘れる事が出来
ず、最後の命令に従っていた。

「どう・・・ほ・・・こ・・・」

召喚主のあまりに美しく純粋な心から描かれた魔方陣は彼女にと
って格式高い者だったらしく今の姿は『全て』気に入っていた。

体は美しく、髪はブロンドでサラサラ。そして顔は常に『神』の
与える痛みにより試練を与え続けられ、口は縦に裂け余計な言の葉
を紡ぐ事の無い完璧な存在。

異常者に召喚された天使は壊れていたのだ。

壊れた天使は逃亡者をくまなく探した。

「よお……。探し物か？」

そして見つけた。浄化すべき不浄な存在を。

「ひでえ顔だな……。涎で顔ベトベトじゃねえか……」

天使は路地裏に余裕顔で立つ男に断罪の手の平を向ける。紡ぐは言の葉。言の葉は『論理』を認知させ、論理は魔を産み、魔は法を描き、法は陣を組み立て、其処に意味を作る！

「……Round 2……。だ！」

魔法陣。そして

「ザ……。ン！」

綻びある、魔法を放つ。

衝撃魔法ザン。目標物に衝撃波となる魔力の塊を放ち、破き、破裂させる人外の法。その威力は先程も友春が思ったようにプロボクサー並みの一発だが、魔力値によりその威力上下する。

人間が直撃すれば只ではすまない一撃。友春は先程バックステップにより威力を軽減していた為、直撃は免れた。しかし……。友春は動かない。それどころか右手を前にし、拳を作る。打ち破る。そんな意思が現れた行動。

（なんと・・・馬鹿馬鹿しい）

天使は愚かな人間の最後を見届けようと見下す。

パァァン！

衝撃音が路地裏へと駆け巡る。

天使は勝利を確信し、笑い声を上げようとし、止めた。

許斐友春は腕を突き出したまま笑っていた。相手を嘲笑し、大地から天を見下していた。突き出した腕を拳闘スタイルに戻し、掛かって来いといわんばかり、ステップを打ち鳴らす。

その行動に怒りを覚え天使は今一度魔法陣を描く。友春が何故無事だったのか。友春が何故腕を突き出していたのか。友春の余裕の意味は何か。その「生きる為」の思考を投げ出し、天使は完成しつつある魔法を打ち出そうとした。

「Digital・・・Devil・・・Pseudo・・・Summon!!!!」

それより速く友春の声が天使の耳に届く。

（なにをしようとしても、もう遅い）

天使は友春に衝撃の槌を打ち下ろすように両手を振り下げる。

友春は右腕を弓矢のように引き、籠手を着けた右腕を天に浮かび人間を見下すだけの存在・・・壊れた天使を打ち上げるように拳を

天へと突き出す。

「ザン！」

「Program Start・・・Your name - T
ENAGA - ! ! !」

ドパアアン！

舞い散る翼。破裂するような『皮と皮』がぶつかる音。骨を砕き、
内臓を破壊する破裂音。くの字に体を折り曲げ・・・天使は裂けた
口から多大な量の血を吐き出した。

「ご・・・げ・・・あ・・・」

血液は汚くドロ水のように大地へと垂れ落ちる。天使は己の腹に
食い込んだソレを掴む。

異腕・・・と言えいいのだろうか。友春の天に伸ばした
右腕・・・そこに着けられた箒手の小さなモニターに浮かび上がる
ように、天使が召喚された時と似た魔法陣が描かれ、天使が掴んだ
腕がそこから生えていた。

異腕は天使の腹を打ち破らん勢いで天を貫き、大気を突き、空気を
破裂させ更に力を込め上昇する。天使はビクビクと体を痙攣させ、
血で滑る手に力を込め、異腕を腹からどけようとする。

種族：妖鬼 名前：手長テナガ

山形や九州地方に現れる日本の怪異。黄色い「異腕」を持つ人外の鬼。腕の長さが3m程あり甚大な腕力により過去から人を貪り食っていた。

友春の腕の延長上・・・テナガの黄色い異腕により天使は腹内部の内臓と骨を一瞬にして砕かれた。ゴキゴキリと気色の悪い骨と骨が軋み、擦れ合う音。友春は『もういい』と言わんばかりに痙攣するだけしかできない天使から異腕を取り除いた。

天使は力なく大地へと崩れ落ち、体を痙攣させる。虫の息・・・死の間際天使は、力を振り絞り全力で異形の顔を敵に向け、絶望した。

友春は腕を振り上げていた。天に聳え立つ異腕と共に・・・振り下ろし。それはもはや拳闘などではなく・・・単なる暴力だった。

刹那の時間・・・天使は神に懺悔しようとして・・・あまりに無駄な行為に感じ・・・止めた。

ドゴオ！

大地が震える音と共に・・・天使は自身の生まれた意味を考えながら、生命と鮮血を天へと散らした。

あの時友春が押したボタン・・・それは悪魔召喚プログラムの起動ボタン。

薄いボタンを押した瞬間モニター上に魔方陣が描かれ、黄色い肌を持つ3mの異腕を持つ男が片腕と顔だけ覗いて来たのだ。

この怪異、友春を見るや否や「面白い」とだけ言い放ち、「力を貸してやる」と言い友春を困惑させた。

聞けば先程まで装着していたあの男では物足りない、お前のほうが面白そうだ、と言う。つまり

「俺の事が気に入ったのか？」

友春は目の前の怪異に向かい無然と言い放った。片手と顔を覗かせながら男は大笑いした。

「ああ・・・！いいぜお前！血の匂いがプンプンしやがる・・・！さっきまでの奴は口だけだったが・・・お前は良い！」

何故か・・・恐怖は感じなかった。友春は自分の中に浮かび上がる感情を抑えながら、この怪異が何処まで役に立つのかを聞いた。

「ククツ・・・。お前の腕になってやる。お前が望むまま動き、曲がり、唸り、そして楯突くものの心臓を抉り出してやる！」

「条件は・・・。条件はなんだ？」

条件・・・友春は聞く。当然だ。このような怪異がタダで手を貸

すはずが無い。

「……強いて言うなら……敵は殺せ」

「……わ、わかった……」

「何故とか聞かないのか……?」

不思議そうな顔をするテナガに友春は可笑しそうに質問に答える。

「魂を奪うとか……そんなところじゃないのか?」

悪魔の相場なんてそんな事だろう。そう友春は思ったのだが返答は違った。

「ああ魂? そんな食っても仕方ねえもん、要るかよ……。俺が欲しいのはマグネタイトだよ。マグネタイト」

「……マグネタイト?」

そんな言葉は生まれてこの方聞いたことが無い。マグネシウムやゲームに登場する金属アダマントタイト等なら知っているが。

「血液にある理念物質だ。人間には感知できないし、また採取も出来ない。しかしこのCOMPにはそのマグネタイトを吸収する機能がある。この俺様を呼び出す際に使う。だからマグネタイトは必要。そして採取するには人間を殺すくらい血を流させる必要があるんだよ」

「召喚……マグネタイト必要……」

先程のメシア教徒の理解できぬ行動が頭の中で「ああ……なるほど」と納得いく形になる。

「まあ殺さなくても最低血を流させるだけでも良い。あまり派手にすると色々な所に目をつけられ食事どころじゃねえからな」

テナガは不機嫌そうに言う。その何処か人間染みた物言いに

「俺も派手な事はしない。警察に捕まりたくは無いからな……。ただ襲い掛かってくる馬鹿どもは……。叩き潰す……。！」

友春は異常な光をその目に灯し、只々薄い不気味な笑みを浮かべていた。

テナガはその光景をクツクツと笑いながら見ていた。

「今後とも……ヨロシク」

テナガの一声と共にその契約は成された。友春の日常を引き換えるに。

友春が籠手をかざすと天使の血は粉末状に空へと消えていく。

粉上になり空を舞い、天へと消えていった。ソレは美しい空化粧

となり友春の心に染み込んでいった。

「結局・・・このコンピューターってなんなんだ？」

未だに消えない異腕に向かい最後の疑問を提示する。テナガは器用に振り向き答えを教える。

「悪魔擬似召喚プログラム。VとSの合同作品だそうだ。未だ完成しない悪魔召喚プログラムを、ある鬼才どもが手を取り合い色々な組織に送り込み使わせ、完成への道しるべとしている。そもそも、この俺とお前がこんな悠長に話していられるのもこのCOMPの機能の賜物だ。悪魔言語を瞬時に和訳しているからな・・・。これほどまでに性能の高いCOMPは今の所これだけだろう。他のCOMPはまだ『一瞬だけしか召喚出来ない』『悪魔言語が翻訳されない』『召喚してもその一定空間から移動できない』等、様々な制約が起きる」

テナガが言うには、箒手型のコンピュータは悪魔擬似召喚プログラムと呼ばれるモノで、世界に点在する、希少な悪魔達と交渉、あるいは強制的に仲魔にできる代物。友春が持つCOMPは性能が高く今一番最新のモデルとの事だった。

「悪魔・・・召喚・・・ね」

友春は未だ血の匂いが消えない空間の中、未だ血潮が空へと上る中、愉しそくに晒った。

「最高だ・・・！俺・・・今の一瞬まで・・・母さんの事忘れてたよ・・・！」

アハハハと乾いた笑いを路地裏に木霊させ、許斐友春の人生を変えた戦いは・・・始まっていった。

一節 残照風景 - 許斐 友春 #3 - (後書き)

テナガ

年齢不詳 男性体 150cm(腕3m) 体重不明

許斐友春の受け取った『DDSプログラム』の中に入っていた悪魔の一人。

日本古来より存在する妖怪で、異状にまで長い異腕を扱い敵を攻撃する。手の長さは3m程度。全身は普通の人よりちよつと小さめ。肌は黄色く髪はボサボサに長くしてある。

主に人を襲ったり、川でその長い手を駆使し魚を採って暮らす鬼。友春を兄弟と呼び、それなりの信頼関係を築き上げる。

尚、本来は足長^{アシナガ}と呼ばれる妖怪とコンビを組んで襲ってくる。

悪魔擬似召喚プログラム

原作では既に完成している『悪魔召喚プログラム』。

本作ではその過程作として登場するのが『悪魔擬似召喚プログラム』である。

試作品として扱われている。

ステイブンと本来は登場しないヴィクトルの合同作品となっている。

この作品中は『D(Degital)・D(Devil)・S(Summon)』と無理矢理な省略をかけている。

ちなみに本当の原作中のD・D・Sの略称は『Degital/D evil/Story』である。

一節 残照風景 - 運命交差点 - (前書き)

19XX年東京・・・最初の交差点。

居神心は許斐友春を知り

許斐友春は居神心と出会う。

物語はここから綻びた謎を紡いで行く。

一節 残照風景 - 運命交差点 -

10月30日（金曜日）

居神 心は叫び声を上げそうになりながらも、その風景を教会の
ステンドガラスの様に美しいと感じていた。

違和音の正体を突き止める為に歩いていった路地裏の最果て。バ
スケットコート大の空間で一人の男が白と青を基調としたローブと
闘っていた。数人居たのだろう。5、6人のローブが地に伏せてお
り、全く動く気配が無い。倒れたローブからはナイフが零れており、
今4人を相手にしている青年を、殺す明確な意思がココロには感じ
られた。

青年の動きは美しく精錬されていた。2人のローブを着たメシア
教徒からナイフを避け、襲い掛かってきた1人のメシア教徒の顔面
を右フックでなぎ倒す。レンガをコンクリートで破壊したような嫌
な音がきっかけで、メシア教徒はピクリとも動かなくなり戦いの場
からリタイアした。

ステップを踏み続け様々な位置へ移動、攪乱、そして渾身とも思
えるほどの威力が伴う拳の一閃。ココロは瞬時に青年は闘い慣れて
いると直感する。テレビでも見るようなボクシング形式のフリーフ
ァイト。しかし、試合には無い殺意が飛び交うリングで、青年は晒
いながら拳を振るっていた。

青年は許斐 友春と言った。約2週間前程に箆手型の悪魔擬似召
喚プログラムを拾った事により、メシア教徒から度々襲撃を受けて

いた。メシア教徒が襲撃してきてからと言うものの、家には帰らず路地裏で睡眠を取っていた。何故か。理由は簡単・・・それはメシア教徒が襲撃しやすい様にある。友春は待ち望んでいたのだ。メシア達の襲撃・・・非日常空間を。

友春は30日の早朝に一度目の襲撃を路地裏で受けた。2度3度と行われる襲撃に慣れていたのだが、案外大人数を相手にする時狭い路地では戦いにくかった事もあり、30日の夜・・・2度目のメシア教徒の襲撃をこの路地裏の最果てで待ち受けた。

暗い闇が広がる中、薄暗い電光のみを頼りに白と青の薄気味悪いメシア教徒達をなぎ倒していく。筆字型COMPを拾ってからの通算5度目の襲撃は、案外あっけなく終わりそうだった。

3人残った一人を薙ぎ倒し、メシア教徒達は9人から2人に減っていた。しかし、教徒達には焦りの色も動揺も感じなかった。2人のメシア教徒が同時にナイフを手に・・・一人は首へ一人は手首へ宛がう。友春は晒う。

「呼ぶんだろ・・・早く呼べよ・・・」

口調はあくまで冷静に。しかし意識は貪欲に「悪魔」を望んでいた。

メシア教徒達は友春の言葉に答えるよう、一気に刃物を引き散らす。血液が空へ飛び陣を虚空へ描く。中空に留まり魔方陣が意味を持ち・・・そこから・・・

現臨。

「・・・・・・・・あ・・・・ああ・・・・ああ・・・・あああああ！
あああああ！」

友春は天使の声だと初め思った。女性のような高い声。しかし・
・天使の放つ化物染みた声ではない。これは・・・・人の声だと悟った時は遅かった。

陣より召喚された天使エンジェルは以前のような壊れた存在ではなく、美しい四肢を持ち、煌びやかな髪、そして封殺された目に小さな口。何処からどう見ても天の遣いだった。完成されたエンジェルは友春へと飛び掛る。・・・・一体だけが。

「ちいっ！テナガア！」

一閃。路地裏の広い空間の只一つの出入口へ一直線に飛び立つ天使に、友春は悪魔擬似召喚プログラムを始動させる。

友春の突き出された右手の着けられた籠手型COMP。そのモニターから淡い緑色の光が漏れ、中空に陣を描く。その陣から黄色い腕が生え、友春とは別方向に飛ぶ天使に向かい伸びていく。

1m・・・・2m・・・・3m・・・・！留まるところを知らない黄色い異腕は天使を捕らえようとして、虚しく空気を裂いた。

「っ！く・・・・そがあっ！」

友春は逃してしまった天使より、敵意を剥き出しにしている残った天使に意識を向けた。天使は空に浮かび、崩れ落ちていたメシア教徒達を見下すように笑っていた。

「っ……はっ……ああっ……はっ」

ココロは走った。暗い中一方通行の道。補整されているコンクリートの道は何故か険しく、ココロの足取りを重くさせる。全力で走っているはずなのに……脳裏に浮かぶあの血飛沫が自身の心をあの場所から逃がさなかった。

「なっ……んだよ！……あれっ……なんだよ！」

誰に問うているのか。闇の中の叫び声は答えが返ってこない絶望の叫びとなる。長すぎた路地裏を走りぬけ、闇と街の交差点。安寧の地へと逃げ出すように駆け抜け、見える。街の光、人の光……そして光臨した天使の羽が。

「はっ……あ……は……あ……は……っ！」

慟哭は言葉にならず、絶望は言葉にならない。乾いた口は半開きになり、思考を停止している事を示す。全力を使い切った足は碎け散り、血の通わない冷たいコンクリートに尻餅をつく。ココロはガタガタと全身を震わせた。震える体は持ち主に思い出させる。いつも見る『夢』を。

「くっ……るな！くるな！くるなああ！」

直感。目の前のモノは殺す。自分自身を。死のイメージが脳裏を

掻き乱し、冷静な判断が出来なくなる。大声を出せば人が来るかもしれない。でも・・・届かない。あまりにも街の光は己から離れすぎている。

天使はココロの無様な姿を見て満足したのか、視線の無い顔に笑みを浮かべゆつくりと歩いていく。ペタリペタリと足の音。ガチャリガチャリと足に付いている足の錠。音は畏怖を纏い、ココロへと忍び寄る。手は風を切り、優しく手の平をもたげる。その腕を毒蛇のようにしか見えない不気味な凶器を、天使はゆつくりと・・・撫でた。

「っ・・・・・・・・っ
！」

いやだ！

言葉は声と成らず……。意思は通じず……。視線は中空へと飛び、思想は暗闇へと飛んでいく。ガランガランと回る世界。街の光がグルグル廻るのを『万華鏡』のように感じる。天使は羽ばたき何処かへ飛び去る。首の無い体から噴水のような血飛沫を上げ、黒い学生服を濁った黒に染めていく。路地裏には紅い果汁が飛び散り、大地には似合わない人間の頭・・・『花』が一輪咲いていた。

友春は残っていたエンジェルを一撃の下、粉碎していた。右手から生えた異腕、妖鬼テナガの力により虚空へと飛び去った所を狙い

打った。顎を狙い、顔がトマトのように弾け飛び重力に逆らう事無く墜落した。ヒクヒクと痙攣を起こし、最後に動かないのを確認した所で・・・先程逃がした天使が帰ってきた。

「早かったじゃねえか。抵抗しなかったのかな。・・・ま、いいけど」

顔も知らない。男か女かもわからない。名前も知らなければ、助ける義理も無い。友春は死んだであろう不幸な隣人を忘れた。でなければ、悪魔との戦いでは生き残れない。右手に着けたCOMPに意思を繋げるよう力を込める。戦闘体制・・・命のやり取り。口元は歪み、つりあがる。

「第2ROUND・・・勝負！」

大地に血で汚れたシューズが踊り猛る。友春はエンジェルから目を離さず、警戒しながら詰め寄る。残り8歩届かぬ距離からの右手の突き上げ。ウン！と言う機械音と共にテナガの異腕が伸び、エンジェルを貫かん勢い空を切る。

エンジェルは前方から迫る脅威に静かに空へと舞い上がる。天空よりの魔法射撃により、『神』の意思に逆らう愚か者を裁かんとする為、魔法詠唱。衝撃魔法『ザン』。大地を撫でるように手の平を開き、虚空に開くは魔法陣。右手を突き出し固まっている愚者に衝撃の槌を振り下ろす。

「阿呆の一つ覚えだな」

友春は嘲りを含んだ呟きを天空の天使に漏らす。天使が訝しみ、対する人を見る。友春の右手から延びた異腕が途中から折れ曲がつ

ていた。異腕は中折れし天を掴み取ろうと、魔法陣を描いている天使へと伸びる。

一瞬の驚愕。そして無理な魔法陣の中断。エンジェルの翼が風を唸らせ異腕より逃れる。テナガが叩き潰したのは作りかけていた魔法陣。ガラスが砕けるような音がして、小さな法律世界が砕け散る。

「っちい！」

表面は悔しがり、内面は愉しかった。そう、この程度で終わってしまったては面白くない。もっともっと粘って俺を楽しませろ！と。

歪んだ人生の最果てを目指す青年の心象風景は、血で血を洗う『混沌世界』となっていた。

天使はそんな男の内蔵した世界を読み取ったのか……。雄叫びを上げながら空中に魔法陣を描く。

「A A A A - - - A H A A A A - -」

良く聞けばソプラノボイスの賛美歌。悪く聞けば小鳥の絶命の声。無論友春には後者にしか聞こえなかった。

「M a h a - Z A N !」

追撃をかけようとした友春に緊張が走った。今までの魔法とは違う発音、『マハーザン』。友春はC O M Pで裏拳をする要領で、C O M Pより生えたテナガの異腕で向かってくる衝撃波を叩き潰そうとする。

ぶつかる衝撃、吹き荒れる風。異腕があらゆる方向から遅い来る衝撃波に、捻じ曲がりそうになる。しかし、その刹那友春が右腕を引き、複数に広がる衝撃波を各個迎撃するように素早いジャブを繰り出す。異腕もその動きに付いていき、暴風音の音が衝撃魔法全てをかき消した事を告げた。

残った天使は両手を広げたまま啞然としていた。驚いたのは異腕の動きか、普通の青年でしか無かった許斐友春の素早い状況判断か？

「はっ・・・広範囲か・・・厄介だが・・・！」

その言葉と共に再び天に向かい拳を突き上げる。エンジェルは魔法障壁を張り相手の攻撃に備えるも、その攻防は既に意味を成さなかった。

エンジェルが感じたのは足首の異変。異腕はエンジェルの急所部位を狙わず、足の錠を掴み取っていた。

「- - -！A H A！A A A A A A！」

「っ！らあああああ！」

怒声を周囲に打ち鳴らし、凄まじいスピードで天を舞う天使を大地へと叩きおろす。この街全体を震動させているのではないかと思えるほどの轟音。ひび割れたコンクリートは異物の落下により粉々に打ち砕かれていた。天使は後頭部を破裂させ、大地に血を染みこませて絶命した。

「はっ・・・はっ・・・は・・・あ」

息を切らせ、死闘を終わらせた溜息の合図を告げる。余韻に浸る間も無く、血に濡れたテナガが語りかけてくる。

「んで？さっきの小僧はどうするんだ？」

テナガの声を忌々しそうに聞き流そうとする。が、違和感を感じ聞き返す。

「小僧？女じゃなかったのか？高い声だから女だと思ったが……？」

「いや。男だ。黒い……学生服か。いかにもお前とは正反対の優男が逃げていったのを見た」

友春は逡巡する。黒い学生服……近辺では自分が通う高校の制服と一緒にある。

「だが……こんな異世界に迷い込んだ奴が悪い。大体、俺が助ける義理は無い」

そうは言うがやはり気になっていた。異世界に迷い込んだのは友春も一緒。しかし自分には悪魔を味方につけた『強運』があった。だが……あの先程の少年は恐らく駄目だろう。

脳裏に浮かぶのは少年の惨殺死体。声だけで若いだろうと判断してきた。こんな時間に学生服を着ていたのは真面目な学生か、部活帰りの学生だろう。この路地裏の最果てで戦っていなければ、あの少年も巻き込まなかったかもしれないと、小さな後悔を友春に残した。

2体の天に帰ろうとする天使達からマグネタイトを吸収し、その

姿を抹消する。其処に残ったのは夥^{おびただ}しい血の『匂い』だけ。他には死体が2名、重傷者7名の事件とも言えない事件。

許斐友春は生き残った。度重なる戦いから知恵と力を身につけていった。先程の天使も初戦なら、あの広範囲魔法で敗れていただろう。自分自身の成長に満足をし、死線を越えた路地裏から這い出て行こうとする。

暗い暗い、長く細い通路。何処かにあの少年の死体があるのは明白だった。もし、出会ったなら手を合わせるぐらいいいだろう。そう思い街への帰路を歩く。

血の匂いがした。夥しい血の匂いと血痕。頭痛がするような思念が此処にあるような感覚。友春は辺りを見回す。もう後数十歩で街へと出る。この場所であの不幸な隣人が『死』を迎えたのは間違いなかった。まさか生き残ったか？友春の脳裏に浮かぶ願望に近い推理は、あの2体目のエンジェルが出現した事により間違いである事を証明される。

「どういう・・・事だ？」

「こういう事だ」

気が付かなかった。己の力に慢心し、敵の接近に近づかなかったか……。闇と光の交差点、白いスーツに紫のシャツ、黄色いネクタイの派手な男がそこに居た。白いスーツを血で汚し、黒い服を着た少年を担いでいた。

「・・・てめえ・・・いつからそこにいた・・・！」

力を込め、いつでもテナガを召喚できるようにする。相手の距離は6m程度。テナガに攻撃させるには後3mの距離詰めが必要だった。しかし、目の前に立つ男は両手が塞がっているのにも関わらず、友春には3mの距離を埋めることが出来ないとプレッシャーを与えてくる。

そこで気付く。両手が塞がっている。そう、右手に男子の首無し死体を担ぎ。左手に頭部の髪を握り締め、ブラブラとメロンの様に揺れる『顔』があった。

「・・・やっぱ助からなかったか」

「ん？ああこいつか。芸術的な殺し方されてたな。恐らくは法をこよなく愛するLawサイドの連中の仕業だろう。暴力を信条とするChaosなら、骨と血肉がその辺に散らばっているからな。まあ、綺麗な殺され方してるから回収できるんだが」

「回収だと？」

先程の戦闘からか、いつのまにかずれていたニット帽をかぶりなおし、不思議な事を言う目の前の異常者に聞き返す。ニヤリと笑いながら待ってましたとばかりに異常者が口を開く。

「そう、回収。こいつを」

「キョウジ！依頼内容の漏洩は禁止だっていつも言っているですよ！大体今回の依頼は私乗り気じゃ無いんだから・・・！とつと帰るわよ！」

路地にまた音も無く現れた影。茶色いストライプスーツに、茶色

と黒が入り混じった髪の大人の女性。またそれも友春にとって威圧感を与えてくる。

「チツ……。これから面白いんだがな……。レイホウ、車用意できているな？とつとと行くぞ」

「だから準備できているって……。ハア……。もういいわよ……」

まるで夫婦漫才のような速度で場を切り上げようとする。一瞬戸惑うも友春は疑問だけを残して去っていくその二人に、多少の怒りを覚えたのか、大声で怒鳴り散らす。

「待て！てめえら……。メシア教徒じゃないのか！？」

「ああ？あんな空っぽな奴らと一緒にすんじゃないよ」

不機嫌そうな声。それに伴う女性の知性的な声。

「……。どうやら貴方もこちら側に入り込みかけているみたいね。あまり、図々しい事は言いたくないけど、火遊びは少して済むから火遊びなの。貴方の様に火遊びを何回も続けていると、感覚が麻痺して次第に大きな炎を周囲に灯していくわ。そうやって今回みたいな被害者を出すの。これ以上大事にしたくなかったら、今のうちにそのCOMPを捨てるか誰かに継承する事ね」

全てを見透かしたような優しい声。しかしこの場でその優しさは仇となる。

「……。るせえ……。！相手が襲い掛かってくるんだ！叩きのめ

して何が悪い！力を使って何が悪い！俺が俺の総てをぶつけて相手を下すんだ！その何が悪い！？」

「・・・そうやって、やり返していれば今は満足でしょうね。でもいつかもっと強い力に当たった時、あなたは更なる力を求める。そして、自らを人外へと追い込み『力』なんて言う妄執に取り付かれ、いつか貴方の友を・・・あなた自身を裏切る事になるわ」

友春の怒りを包み込む慈愛に満ちた声。哀しい視線。友春は女性に『母親』を重ねてしまい、記憶を思い起こしてしまう。

「ダチなんて・・・もうとつくの昔にいねえ！それに、俺自身を裏切るだと・・・馬鹿馬鹿しい！俺は俺を裏切らねえ！」

「そう・・・その考え方なら後はただ、悪魔共に殺されるか天使どもに浄化されるか・・・野垂れ死ぬだけね。どの道信頼する者も居ないんじゃない、この暗い世界を歩く事は出来ないわ。強引にでもその『力』の源・・・COMPを破壊するべきかしら・・・」

女性は何処から取り出したのか・・・三節棍を構える。恐らくは3m程度の長さか、友春は右手に力を込めテナガ召喚のプロセスを組み立てようとする。

「ガキの相手はもういいだろう。それより死体の鮮度が悪くなる。とつとこいつを冷却してヴィクトルの爺の所に持っていくぞ」

「・・・っ！貴方が先にこの少年と接触したんでしょ！？大体この少年がもしもステイブンの言っていた『カオスを創る者』ならどうする気よ！」

怒りの矛先を白いスーツのキヨウジと呼ばれた男へ向ける。キヨウジはそ知らぬ顔でスタスタと路地裏を出て行った。

「はあ・・・も、いつか。とにかく、力なんてものに振り回されたら碌ろくな事にならないからね。肝に銘じておきなさい。それから・・・そつちの孫の手君もあんまり引きずり込むのは良くないわよ。あんまり無茶ばかりやってると、『葛葉くすのは』の名に懸けて・・・封殺するわ」

優しい感情と厳しい感情が入り混じった言葉。ソレを聞き友春はゾクリと身震いさせる。

（こいつ・・・見切っていたのか？）

己のCOMPに仕込んだテナガを見切っていた。それだけであの二人は高い戦闘能力と実践経験があるのだろうと、容易に想像できた。立会いと数度の口を交わしただけで・・・友春は相手に敗北を教え込まれた。

「じゃあね」

それだけ言う三節棍を背に仕舞い、出現と同様に音も無く走って行き路地から消えていった。

友春はそんな様子を覗き込む様に暗い路地裏から、怒気を孕んだ視線で凝視していた。

「本当に良かったの？あのまま放って置いたら多分、あの子混沌に飲み込まれるわよ？」

高速を走る車の中レイホウと呼ばれた女性がキョウジに咎める様に質問する。

「・・・確かにあのガキ。ステイブンの言っていた『カオスを創る者』に近いな。・・・力は細い山みたいな物だ。強く強く、高く高くすればするほど折れやすく、崩れやすい。だからこそ強い地盤が必要となる。力だけを求めて天を目指してもいずれば、大地へと堕ち己を外法とするだけだ」

キョウジは運転をしながら退屈そうにレイホウの質問に答える。

「それにイザとなれば地元警察の厄介になってもらう。そこで無力化している所を封殺すればいい。・・・あのガキまだ覗き込んでいるだけだつてのに、あの戦闘力は中々脅威的だ。真正面から戦えば恐らく苦戦する」

「・・・キョウジが？」

驚いたのはレイホウ。力の差は歴然だと思っていたのだが。

「魔法を使えば良いんだがな。あのガキは魔法の相殺をしゃがった・・・俺の魔法もイザとなれば相殺しかねん。それにかなり頭の回転が速い。そしてあのタイプ・・・従者と主人の相性が抜群としか言えんな。ボクサーに手長。厄介なコンビだ。俺に前衛が居れ

ば『炎熱魔法アギラ・オ』で仕留めれるとは思うが」

ジロリとレイホウの方を睨みつける。

「お前がもう少し前衛で戦えるか、後方に撤すれば何とかなるかも知れんがな・・・」

レイホウは引きつった笑みを浮かべ、ゴウゴウと走る高速道路の先へと視線を移す。

「お前の性格上、前衛後衛両方務めたいと、言うのは判らんでもないが中途半端では邪魔なだけだ。故にあのガキを殺すなら警察と言う組織に捕まってもらい、そこで殺す。もっとも手っ取り早い方法だ」

「外道ね・・・」

キョウジはふん！と鼻を鳴らすとアクセルを踏む力を強める。

「悪魔召喚プログラム・・・か・・・。ふん・・・。俺が最高の完成型を手に入れてやるさ・・・どんな手を使ってもな・・・」

そんな悪意の呟きは・・・レイホウには届かなかった。

一節 残照風景 - 運命交差点 - (後書き)

Key Word

> 衝撃魔法ザン<

女神転生シリーズに一貫して登場する『衝撃』を属性とする魔法。ザン・ザンマ・ザンダインと威力が上昇していく。

尚、マハが頭についた場合広範囲魔法となる。

・・・ちなみに作者は別作品の某女神転生漫画に発音された

『マハー・ザン』等の言い方が気に入っていて作中もそれにしている。

> 悪魔と人間<

彼らには大きな力の差がある。故に人単体で悪魔に勝利しようと思うならば

余程の訓練と知識が必要である。

しかし友春のように悪魔擬似召喚プログラムを有用に利用すればなんとか対抗できる。

が、ココロの様ななんの力も持たない人間ではなぶり殺しにされるのがオチである。

一節 残照風景 - 魔人生誕 - (前書き)

死した居神心。

そしてそれを連れ去る二人の人間。

それを欲する二人の狂人。

四つの軌跡は哀しき物語を紡ぐ。

一節 残照風景 - 魔人生誕 -

10月30日（金曜日）

深夜、暗い闇を切り裂くように白い軽自動車が走っていた。長い高速を走り、煌びやかな繁華街の光点々と見える街を目指していた。

高速を降り、未だ眠らぬ事を知らぬ東京の街『吉祥寺』に車を滑らせていく。静まり返ったアーケード街の前に車を違法駐車し、男と女が降りてくる。男の肩には赤い染みが残る人間大の白い袋を担いでいる。また女性は大きなスポーツバッグを重そうに両手で持っていた。

所々赤い斑点を持つ白スーツを着込んだ常人とは違う雰囲気を持つ男は「葛葉キョウジ」と言う。そしてその相棒「レイ・レイホウ」。彼女の引き締まったプロポーションを、茶色いストライプのスーツがより引き立てていた。

二人は小さな街頭を頼りに暗いアーケード街へと入っていく。並ぶ店舗は既に時間外なのかシャッターが下りており、外界を遮断していた。

二人は互いに沈黙を守り、コツコツと二重に響きあう革靴の音を聞きながらある建物の前で立ち止まる。

「・・・ここだ」

「・・・あの人が変わらず何考えてるのか判らないわ・・・」

一人は呆れ、一人は頭を片手で抑える。

アーケード街に洋館風のモニュメント。入店を拒否するような大きく重そうな扉。扉の上には「HOTEL業魔殿」と達筆な文字が描かれている看板が張り付いていた。

「・・・客人だ」

「またこんな夜更けにですか？・・・Dr・ヴィクトル、私は居ない事にしておいてくださいよ？」

腹に響くような静かで厳かな声。それに反応するような若く、知的な声。両者は業魔殿の食堂で簡素な食事を取っていた。

赤いマントを羽織った紳士服を着込んだ男が立ち上がる。食事を邪魔された事を遺憾に思った様子も無く、夜遅くの訪問者を迎えに一人、車椅子の男を置いて食堂を後にした。

「やはり・・・葛葉達だったか。葛葉・・・荒事をするなら目立

つ白いスーツは辞めておく事だな。昼間ならば確実に公僕達の厄介になる所だ。裏世界に生きるのなら表世界を常に意識する事が大事だと幾度となく言っている」

暗い玄関ホールに入ってきた男と女を見やり紳士はニヤリと笑う。と、同時に赤いマントの紳士はキョウジが着ている赤斑点スーツを見るや否や、呆れた様に忠告した。

「ふん……。大きなお世話だ。それを言うなら貴様の赤いマントの方が奇人に見えるぞ。いつその事『悪魔全書』にでも書き込んでらどうだ。種族怪人赤マントとな」

不機嫌そうに顔を歪ませながらキョウジは言い返す。仲が良いのか悪いのか、レイホウはそんな様子を疲れた様な顔で見ていた。

此処はホテル業魔殿。赤マントの通称ヴィクトルが経営する、悪魔研究所。悪魔の研究に余念が無いヴィクトルは様々な所から資金を得、様々な悪魔が集中的に現れる都市に業魔殿と名の付く建造物を建てる。アーケード街からは全く判らなかつたが、中に入ると立派なホテルそのもので玄関ホールには2階へと通じる大きな階段が一つあつた。部屋数は少なく、大きな間取りの部屋が売りの『流行らない』ホテルだつた。

「ヴィクトル。頼まれていた『ドリー・カドモン』とか言う人形。貴方の予想通り、品川のメシア教総本山……。大聖堂に安置されていたわ。忍び込むのが大変だつたんだから」

ヴィクトルと呼ばれた赤マントと、キョウジの睨みあいを崩しレイホウが本来の話へ戻す。

「ほう……。やはりメシア教徒共が隠し持っていたか。メシア計画の名を聞いたとき、もしかと思ったのだがな」

「……どういう事よ、ヴィクトル？メシア教徒って神が生み出す救世主を待つ宗教団体でしょ？それがなんでこの人形と結びつくのよ？」

『ドリー・カドモン』が入ったスポーツバッグを渡しながら、今回受けた依頼の疑問を聞きただす。

「うむ……。このドリー・カドモンは新たな生命を宿す『器』ホムクルスとなる存在なのだ。中世の学問『錬金術』の『人造生命体』に酷似している。そもそも錬金術と言うのは……」

「ヴィクトル。話が長くなるのならば、俺はさっさと帰らせてもらうぞ」

長くなりそうな話にキョウジが横槍を入れる。意気揚々と話そうとした矢先の事なので少し不満げなりながら続きを話す。

「ドリー・カドモン。人造生命体だ。そこまで言えば判るだろう……。メシア教徒達はいつ来るか判らぬ『神』のメシアではなく、『人』のメシアを生み出そうとしたのだろう。終末の予言が近づく中、様々な組織が生まれてくる。しかしいつまでたっても『法を拓く物』……Lawヒローは現れない。ならば……と言う事で教徒共で生み出そうとしたのだろうな。『人造英雄』を」

つらつらと話すヴィクトルにレイホウは神妙な顔をし、キョウジは暇そうにキョロキョロしている。

「しかし・・・二つもあるとは予想外だ。葛葉よ。報酬は2倍払わせてもらっぞ」

キョウジの担いだ袋を見て、ヴィクトルは驚きと喜びを入り混じえた声をあげる。キョウジはそんなヴィクトルの目の前に血塗れた袋を放り捨てる。

「・・・あまり乱暴にされては困るな」

そう言いながらスポーツバッグを床に置き、袋の中身を確認した。直後ヴィクトルの体が硬直する。

「・・・ふ・・・ふはは・・・ふははははは・・・これはこれは・・・成程、外理世界の悪魔に殺されたか。喰われてもいない。こういう手口はおそらく天使達か。あやつらは必要以上の傷を付けるのを嫌うからな。しかし葛葉よ、これ程までに活きの良い『人外』に殺された死体は久しぶりだ」

レイホウは驚く。目の前の紳士がこれ程までに高揚するのを見たことがないからだ。ハイになったヴィクトルは口からマシンガンのように専門的な言葉を打ち出し続ける。

「Dr・ヴィクトル。一体どうしたんだい？」

キコキコと言う音と共に、キョウジ達の前に赤いスーツを着た車椅子の男が近づいてくる。先程食事を取っていたもう一人の男。理性的な顔付きが印象的であった。

「やあ・・・やはり葛葉達だったか。隠れる必要は初めから無かったかな。また自衛隊達かと思ってね」

「ステイブン？貴方・・・どうしてここに？2日前吉祥寺に居なかった？」

レイホウは男と知り合いのようで、案外フレンドリーに話しかける。そんな物言いに気を悪くせず、車椅子の男『ステイブン』がにっこりと笑いながら言葉を返す。

「何、ほんの数百キロ、転送移動しただけだよ」

そんな冗談とも本気とも取れないセリフを、レイホウは引きつった笑顔で受け止めた。

「しかし、Dr・ヴィクトルの大きな笑い声が聞こえたが、何かあったのかい？・・・と、それは？」

ヴィクトルが丹念に死体袋を覗いてる中、すぐ近くのスपोर्टツグから少しだけ覗いていた人形『ドリー・カドモン』を見つける。

「ヴィクトルに頼まれていた『ドリー・カドモン』と言う人形よ。人造生命体とも言つみたいね」

「・・・なるほど・・・それがドリー・カドモンか。私には見つけることの出来ない代物だったが、この目で直に見ることが出来るとはね。しかし、Dr・ヴィクトルに先を越されたのは少し悔しいな」

悔しい気持ちを抑えようとせず、低い声でステイブンは唸っていた。そんな様子を尻目にヴィクトルは大きな玄関ホールに立つ一つの柱に近寄る。柱の表面をスイと指で撫でるように滑らす。指

先が長方形を描くと表面に切れ目が走りコンソールパネルの蓋が開き、そこに素人目には何語なのか判らない象形文字が書かれたボタンがあった。

ヴィクトルは躊躇う事無くボタンを押す。そのボタンが引き起こしたのか、建物全体に小さな震動音と地震を引き起こす。

「なっなに!？」

驚きの声を上げたのはレイホウ唯一人だった。他の3人は何事も無い様に玄関ホールの2階に通じる階段を見ている。

(また一人蚊帳の外・・・)

すこし落ち込みながらレイホウも玄関ホールの階段を見やる。するとどうだろう・・・階段がゆっくりと回転し始める。機械音が鳴り響く中180度回転した階段。あれでは2階に登れないではないか。そうレイホウが考えた瞬間、ゆっくりと階段自体が下降していった。

ズウウンと重い物がゆっくりと落ちた音。階段は既に見えなくなっており、見えたのは地下へと続く空間。レイホウは焦る気持ちを押しさえ、下方へと向かう階段を覗き込んだ。その最下段には魔方陣が描かれた扉が厳かに閉じていた。

「我輩の工房だ。誰彼に見られては困るのでな、少し工夫して隠している」

「少し・・・ね」

レイホウは文句を言う氣力を無くし、項垂れながら階段を降りていく。

「待て、レイホウ」

葛葉キョウジが呼び止める。何事かと振り返れば

「俺は死体、ヴィクトルは人形。お前はスティーブンが階段を降りるのを手伝え」

有無を言わさぬその物言いの後、レイホウを横切りスタスタと地下へと降りていく。ヴィクトルもそれに続き、後に残っていたのは啞然とした顔のレイホウと少し困った顔のヴィクトルだけだった。

「ステイツ・・・ブン・・・。悪魔召喚・・・プログラムより・・・先に・・・階段の上り下りが出来る・・・車椅子を作ったら・・・どう・・・」

ゼエハアと息を切らしながらヴィクトルの工房へと入っていく。レイホウが肩を上下に揺らしながら辺りを見渡せば部屋の中心部には魔方阵があり、柱は風水を取り入れているのだろうか美しい左右対称に並んでいた。様々なガラス張りの円筒があり、その中に張られた水がコポコポと空気を鳴らしていた。不気味な光景であり、魔界とも思える異常さを部屋全体が醸し出していた。

「では葛葉よ、死体の服を脱がしてその魔方陣に寝かしておいてくれ」

「・・・レイホウ」

「・・・もしかして私にさせる気？冗談じゃないわよ！」

バトンタッチの様に回ってくる指令を跳ね除ける。が、キョウジはそんな不満を聞く気は無いらしく死体が入った袋から、ズルリと土気色になっている少年を曝け出した。

（・・・まだ若いわね・・・。思えば少し哀れな子ね）

まだ闇の世界へと身を沈みきれて居ないレイホウは、不覚にも首の無い死体を見てそう思う。あの時あの場所で何をしていたのかは判らない。しかし、学生服を着たまだ幼さの残る体は首を落してしまい、時を刻まなくなった。

惨殺死体を幾度と無く見てきたレイホウにとって、死体など見慣れたもので吐気など乙女めいた欲求は体を駆け巡る事はなかった。首から先がポソツと魔方陣に置かれた死体の近くに置かれる。

「・・・女の子？じゃ、ないわね」

体の付いていない首から上は穏やかな顔で、まるで眠っているようだった。男の体が付いていないからか中性的な顔が更に女性的に見える。レイホウはキョウジの視線に気付き、仕方なしに死体の服を脱がしに掛かる。

ヴィクトルとステイブンは培養液へと漬けたドリー・カドモンを見ながら議論を交わしていた。暢気な・・・等と声に出ない不満を体に貯めながらスルスルと服を脱がしていく。

「・・・？これって・・・名札？」

血塗れの学生服の胸部。名前が刻まれたネームプレートがチャチな針で学生服に縫いつけられるように張り付いていた。レイホウはじつと顔を近づけ読み上げる。

「居・・・神・・・？居ない神？居る神？・・・なんだか気になる名前ね・・・」

「レイホウ。なにをやっている」

ギョツとキョウジの声に反応し、謝罪の言葉を心に抱きテキパキと服を脱がしていった。

「終わったか？」

脱がし終わった男性の体を見に、ヴィクトルとステイブンが魔方陣の近くに立っていた。

二人の科学者は沈黙し魅入るように死体を見ている。レイホウには二人が高名な科学者には見えず、単なる狂人にしか見えなかった。

ヴィクトルは手にとって体の細部まで見ていき、ステイブンは車椅子に付いたCOMPを弄りながら死体を検証していた。10分・・・20分だろうか、静かな時間が過ぎて行く。レイホウが何をやっているのかと怒声を上げそうになった時、ヴィクトルが試験管をマントから取り出す。試験管には透明な液体が満たされていた。

ヴィクトルは試験管の蓋を取り、液体を振りまいて死体を満遍なく濡らして行く。液体が死体に付着していく中ヴィクトルとステイブンは唸り声を上げる。

「・・・何故だ・・・。この少年はまるで毎日トレーニングでもしていたかの様な・・・美しい死に方をしていた。首を真一文字に切り裂かれる事を知っていた様だ。殺される相手が天使だと知っていたとしか思えない、事象を予想した死に様。故にこの少年の魂は『死んでいる』はずなのに、『死んでいない』状態になっている」

「成程・・・確かに幾度と無く『死』を体感したような、予言めいた死体ですね。幾度と無く死に、そして生き返る過程を何千回も実行していたとしか・・・。」

二人の鬼才はブツブツと言いながら、キョウジとレイホウを狂気の世界へと導こうとする。そんな光景をキョウジは退屈そうに見ていたがレイホウは少しだけ此处に来たのを後悔していた。

本当に来なければ良かった。

そう思ったときは既に手遅れだった。

レイホウは目の前の光景に脳が付いていかなくなるのを、惚けた

頭で考えていた。

ヴィクトルは液体をかけ終わった死体の近くに跪き、首から腹に掛けて右手に持った鋭利なメスを一閃させた。

サツと言う音と共に死体の皮膚に縦線が走る。ヴィクトルはその縦線に指を入れ、ベリベリと張り付いたウェットスーツを脱がすように『皮』と『肉』を剥がしていった。いとも容易く剥がれていく皮を全て剥ぎ取り、まるで理科室にある人体模型のような姿を見た瞬間、レイホウは口を押さえ工房から走り去った。

「……チツ……。これだから女つてやつぁ……」

葛葉キヨウジはパートナーであるレイホウを嘲るように吐き捨てた。

狂気を含む悪魔が作る惨殺死体には理性が無い。レイホウは悪魔達が築いた惨殺死体の山を見た事があるが、その時は吐気なんて起きなかった。だからこそレイホウは勘違いしていた。死体なんて慣れっこだと。だが違った。

惨殺死体の中に理性や理論は無い。理性や理論の無いモノは頭が理解しない。故に死体にさえ慣れてしまえば大きく恐怖を感じる事も無い。だが、レイ・レイホウは知ってしまった。この世を生きる人間の理知ある行動。淡々と死体を切り刻み、分解していくヴィク

トルを見て・・・レイホウは寒気を感じた。ヴィクトルは死臭漂うあの中で、一人叡智を含んだ笑みをその狂気の顔に貼りつかせていた。

階段を駆け上り、玄関ホールをつき抜け外へと通じる重い扉を体当たりのように開ける。そしてなるべく人に見つからなさそうな場所、レイホウは久しぶりに嘔吐した。滲む視界の中、あの少年の中性的な顔と弱々しい体を脳裏で再生させる。

「・・・っ・・・は・・・ほんと、情けない・・・。これじゃ葛葉の巫女失格だわ・・・」

想像の中の復元された少年の顔は笑顔で・・・とっても朗らかで・・・。レイホウの心に悲しみを強く染み込ませていた。

「・・・別に無理をして来なくても良い。邪魔なだけだ、車に戻っておけ」

狂気の空間に戻ってきたレイホウに冷たい一言を言い放つ。キョウジは優しい言葉を掛けない。そんな事はレイホウには判っていた。

「・・・大丈夫よ。御免なさい、勝手な行動をして。以後、慎むわ」

キョウジは気丈な返答に満足したのか、それ以上の追求をする事は無かった。

「あの子は？」

死体をあの子・・・等と呼ぶ辺り未だに先程の事を、自分自身で判っていないのかかなり引きずっていた。

「あそこに居る」

キョウジは親指で暗闇の中、薄く光るガラス張りの円筒を指す。ゴボゴボと空気音の中、水中を揺らめく『ドリー・カドモン』と透明な液体の入った円筒。そしてその周りのガラス張りの円筒には、人間の眼球、脳髄、臓器全てが唯ひたすら液体の中を泳いでいた。その異常な光景をキコキコとステイブンが移動している。

分解された少年。すぐさまそれを理解した。そして、肉の焦げる音が聞こえる。焼肉屋等で聞こえるジュージューと言う水分を飛ばす音。

レイホウはそちらへと顔を向ける。そこには魔方陣の中心に置かれた肉・・・腕や足と言ったパーツが転がっている。人体の筋肉の筋束に^{すじは}跪きながら、半田ごてのような機器を器用に肉片の上を滑らせていく。その度に音が聞こえる。それは悲鳴のようにも聞こえ、レイホウを責め立てた。

ヴィクトルは死体の皮と肉に象形文字・・・つまり『ルーン文字』を書き込んでいた。ステイブンは死体の臓物を一つずつ円筒から取り出し、千枚通しの様な鋭利な針で刺青のような言語を組み込んでいく。あたかも『プログラム』のように。

異常な風景だった。だが、レイ・レイホウは逃げる訳にはいかなかった。恐怖心はあったが、逃避する気は無くなっていた。それは恐らくこの異端が踊り狂う道筋を通っておかなければ後悔すると、直感した為。

見ればヴィクトルは一際大きな円筒に綺麗な皮と薄桃色の肉片を放り込む。ステイブンは全ての臓物に細工をし終わったのか、いつものニコやかな顔で近づいてくる。ヴィクトルもいつもの無表情を顔に張り付け、近づいてくる。

「一応は全て終わった。この研究が成功すれば、恐らく完成した『悪魔召喚プログラム』を提供できるはずだ」

ヴィクトルが額の汗を拭き取りながら言う。

「……今までの凶器じみた行為の何処に『悪魔召喚プログラム』が関与するのよ！」

最後の最後……耐え切れなくなったレイホウの叫びを聞き、神に弓引く狂人二人は答える。その激情を嬉しそうに受け止めながら嬉しそうに唯一言。

「彼を生体COMP……『魔人』とするのだ」

一節 残照風景 - 魔人生誕 - (後書き)

Key Word

> 業魔殿<

悪魔研究家であり悪魔合体師でもある『ヴィクトル』の経営するホテル。

尚何故ホテルなのかは理由は分らない。見られれば一発でアウトな隠し工房を持っている。

真・女神転生の世界には本来登場しない業魔殿は、本作中は世界各地にある建物と言う設定になっている。

> 葛葉キョウジ・レイレイホウ・ヴィクトル<

この三者は真・女神転生・デビルサマナーより初登場している。

真・女神転生の話には本来接点を持っていないが、本作では登場してもらった。

> スティーブン<

真・女神転生より初登場している。

原作ですら謎だらけの人で、主人公の味方である。

本作では少し性格を変えて描いている。

一節 残照風景 - m a e r D - (前書き)

いつもの夢。でもそれは違う夢。

居神心が初めて体験する本当の夢。

そこで少年はかけがえの無い人と出会ふ事になる。

一節 残照風景 - m a e r D -

・ ・ ・ 2 ・ ・ ・ 0 ・ ・ ・ X ・ ・ ・ X 年 ・ ・ ・ 1 0 月 ・ ・ ・ 3 1 日

（ああ ・ ・ ・ またいつもの夢だ ・ ・ ・ ）

そう思いながら荒野を歩く。滅亡した、人の呼吸が感じられない世界。人に安らぎを運ぶ風は、砂利を人に張り付かせる悪意ある存在となり、歩を進める彼を邪魔していた。

（崩壊している ・ ・ ・ 。木々は無くあるのはビルばかりだ。でもそのビルも殆ど崩壊している。赤い夕日は見えるけど ・ ・ ・ どちらかと言うと血のような世界だ ・ ・ ・ ）

無秩序な世界を防塵マントを羽織ながら歩く少年 ・ ・ ・ 名を『いが居神心』と言った。

（でも、夢を見ているって事は僕は寝てるって事だよな ・ ・ ・ 。何処で寝たんだっけ？確か放課後友達とCDショップに行つて、そのまま帰って ・ ・ ・ ）

少年はこの世界に来る方法を知っている。それは眠りに入る事。自身の精神を現世から解き放つ事だと。しかし、気付かない。自らがこの世界に来た方法を。そして何故自分の意識がここまで明瞭にあるのか。

（ ・ ・ ・ 何があつたのか思い出せない ）

少年はがつくりと頂垂れ、荒野を進んだ。まるでその先に答えがある事を知っているように。

(?そついえば・・・)

少年は空を見上げた。真つ赤な太陽が揺らめき、荒野を照らす。ともすれば熱を帯びる光景とは裏腹に、体は寒さを訴えかけてきた。この上なく世界が寒く感じられ、防塵マントを握り締める。

(ここは・・・寒い・・・。人が居ない寒さ・・・。孤独な・・・寒さ・・・)

傍若無人に砂嵐が舞い視界を遮る。しかし何故か『明瞭』に全ての景色を伺えている事に気付く。少年は我に帰ったように辺りを再度見回す。いつもの夢とは違う光景が視界を占めていた。

「・・・どういう事・・・」

口から洩れ出た言葉は世界に浸透する。口に入り込もうとした砂埃は身を擦じらせ、意思あるようにココロから離れていく。まるで彼の発言を邪魔してはいけなさとばかりに。

「いつもなら・・・ここで砂埃が・・・口に入るんだっけ?あれ?でも・・・なんで?」

困惑は頭の上をグルグルと回る。突如轟音と共に前方に砂埃が舞い上がる。ココロはそれを凝視する。いつもの『死』がこの世界を終わらせる為に太陽より降り立った。

「天・・・使・・・」

ココロはやつと自由になれる喜びと、また体験する死に体を強張らせた。

（そうだ・・・ここで僕は逃げるんだっけ？）

不思議と冷静な頭は指令を下す。『みつともなく逃げる』と。いつもと違うのはソレが『真に迫る逃げ』ではなく『演技の逃げ』と言う違いだった。

後ろを振り向かず後ずさる。ザリザリと砂利を踏み散らす音と同時に目の前の天使をゆっくりと観察する。

（いつもは判らなかったけど・・・鎧・・・。銀の鎧と・・・大きな剣・・・？）

透き通るような白い肌が多く露出した銀の鎧。籠手や具足が重そうにも見える、女性の騎士。背には大きな天使の翼を背負い、砂埃に汚れる事無く靡なびいているブロンドの髪。腰に下げた細い長剣をチャリチャリと鳴らせながら歩いてくる。

（ここでもいつも僕は・・・何を言っているのか判らないんだ）

理解できない幻理、言葉、存在。ココロは目の前の直視できたにも関わらず、夢に囚われ理解しようとはしなかった。しかし、それもここまでだった。

「何者だ、貴様」

天使の口から吐かれた威厳ある声は居神心を硬直させた。

「……え……あ……」

聞こえたのだ。いつも理解出来なかった言葉を。ココロは困惑の後設問に答える。

「ぼつ……僕は『居神心』で……す」

世界に取り残されていた少年はそんな質問の意味を理解する事無く答えてしまった。

「……貴様……。悪魔召喚師か」

天使はココロの素直な返答を無碍にし、怒りを隠す事無く目の前の敵を睨みつける。

「悪魔……召喚師？」

「惚けるな！貴様らが悪魔を使役し、我ら天使すらも使役し、世界の平定を邪魔しようとしているのは明白なのだ！カテドラル完成の間近、貴様らのような神に弓引く愚か者達を生かして置く訳にはいかん！」

天使は激昂し鉄の擦れる音と共に抜剣する。天使の言っている言葉を理解できても、意味が判らないココロは引き抜かれた剣を見て脅えてしまう。

「まっ……まってください！僕はその悪魔召喚師とか言う人じゃありません！僕は日本の学生です！しっ……信じてくださいー！」

「違うだと・・・？それに・・・学生・・・？それが真^{まこと}だとしてもだ。悪魔召喚師で無いと言つのならは何故、私の声が理解できる。私は貴様らの言う『悪魔言語』で会話しているのだぞ。一介の人間では理解できぬはずだ！」

「あ、悪魔言語・・・？わっ、わかりません！だけど・・・信じてください！僕は・・・もう死にたくないんだ！」

零れ出る悲鳴。死にたくない。もう『二度と』。幾度この世界で死んだか。そして・・・、

（おもい・・・だした・・・）

緊迫した状況が記憶を蘇らせたのか、ココロの記憶に死に面した瞬間の記憶が生まれる。それはこの世界『夢』の死ではなく、現実世界での死。

（僕は・・・死んだのか？）

ならば、何故このような世界に居るのだろうか？困惑する少年周りが見えなくなっており、目の前の剣士が剣を構えているのに気付けなかった。

「何かを捧げなくして人を信じると？汝ら人は我らがどれ程にまで救いを与えようが信じなかった。そして己の危機にのみ信じる。『困った時の神頼り』か。・・・貴様が『悪魔召喚師』であろうが無かるうが、カテドラルの制圧戦において不確定要素となる危険性を捨て置く訳には行かない。ここで・・・死ね！」

構えた剣を突き出し、翼による加速で突進。常人には捕らえきれない3mの滑空移動。ココロが気付いた時にはすぐ目前まで来ていた剣の先端は、

「っ！」

居神心の皮膚を貫く事無く、広げられた右手の平で止められていた。凄まじい衝撃と共に5m程後方に砂埃を上げ押しやられる。差し出したココロの右手は揺れ動き、魔と魔のぶつかり合いの火花を散らす。天使は未だ止まらず押しやるココロに付いて行く様な形となる。

「ばっ・・・馬鹿な！」

不満を声に出したのは天使だった。大きく距離を開けるために飛翔し後方へと移動し着地した。

「っはあ・・・はっ・・・な・・・んだ・・・今の・・・」

動揺の収まらぬ体の硬直をゆっくりと解いていく。自身の右手を覗き込む。貫く意志を止めたその右手にはキズの代わりに、黒い革のような後が手の平にあっただけで傷一つ付いておらず、それが逆に不安材料となる。

「・・・貴様・・・魔人か・・・」

ココロが着込んでいた防塵マントが、先程の衝撃から遙か上空に流されていた。飛ばされた防塵マントを目で追い、天使の呟きを聞いてから己の体を見やる。

「な・・・なんだこれ・・・!?」

学生服は脱がされており、着込んでいるのは学生ズボンのみ。上半身は裸なのだが、その肌にうつすらと浮き上がる太い黒線。まるで生きているように明滅し時折黒い線の中に象形文字を浮かび上がらせる。その黒い線は両手にまで続いていた。体を駆け巡る黒い線に吐気を抱く。

「なるほど、道理で悪魔言語を理解できた訳だ・・・。しかし・・・私たちの知る魔人ではない・・・。知らぬ技法で作られた邪悪な魔人・・・。やはり・・・生かして置く訳にはいかん!」

天使は剣を天にかざす。その珍妙な行動はココロを正気に戻らせる。

(このままじゃ・・・殺される・・・!)

死にたくない気持ちが強く現れ始めた彼の行動は・・・全力で逃亡する事だった。歩きにくい荒野を足の力全てを使い逃げる。目の前の脅威から。

「逃がすか・・・!受けてみよ!」

天使は再度、天へと飛翔する。5m程飛び上がった時点で体を捻らせ、一気に下降する。その視線からは先程『魔人』と、認定した少年の後姿。大地へと肉迫し、勢いを殺す事無く右手の剣を大地へ刺しつけた。

直後、震動。大地はその身を割り、居神心へと亀裂を走らせる。

「 M a h a - M A G N A S ! 」

その天使の発声と共に大地より太い錐^{きり}が押し上げる。ココロはそれに気付かず走り逃げようとして、後方から迫った地の錐に背を削られた。

「っ！あ、うああああ！」

肉を削られる痛み。無様に転倒する自分を想像しながら、両手を挟まれたであろう背に持つていく。

「・・・ありえん・・・どのような魔防^{まほう}を施されているのだ・・・！」

驚愕の声はココロか・・・それとも天使があげたのか。居神心は無傷だった。痛みが治まっていく体に熱が籠る。

（だ・・・だめだ・・・！逃げたら殺される・・・！な・・・なら・・・！）

痛む体を叱咤し、懸命に立ち上がらせる。相対するは天使『アークエンゼル』。喧嘩どころか人を殴った事すら無い彼には、策は無く武器も無い。あるのは己の体のみ。

（勝てる・・・わけじゃないか！ど、どうすれば・・・！！・・・僕にも・・・あんな剣があれば・・・！！）

そう思っても、近辺にはアークエンゼルに対抗できるような武器は落ちていない。観察するように遠距離を保つアークエンゼルは、目の前の魔人にどのような攻撃を仕掛けようか図りかねている。そ

んな今がチャンスのハズなのに、

「ど……どうすれば……どうすればいいんだよ……」

戦い方を知らないココロは、踏み込むことすら出来ない自身を嘆いているだけだった。

チリン

そんな鈴の音を聞いたのは幻聴だったか……、ココロは辺りを見回した。

チリンチリンと鈴の音が響く。何処を見回しても荒野の世界。目の前には襲い掛かる天使。しかし、

（呼んでる？）

直感した。あれは自分自身を呼ぶ『声』なのだと。ココロは自らの敵を確認する事無く、もう一度後方へと全力で駆け出した。鈴の音を運んでくる一つのビルへと。

アークエンゼルは神妙な顔つきで逃げ出した魔人を見ていた。追撃するか否か……答えは決まっているはずなのに考え込む。

「……負けるというのか……あの者に……」

そう、全力を伴っていないあの『突き』はともかく、地変魔法『マハーマグナス』を受けて尚無傷だった魔人に脅威を覚えた。かなり高位の魔人とも思えたが、それよりも傷ついたプライドが彼女の思考を惚けさせた。

「……否……負けるはずが無い……あの魔人……生かしておいて、我らの悲願達成に支障がでては……」

プライドは己を奮い立たせる処方箋となった。天使は数分遅れて魔人を追う為、天使の羽根を広げて飛び立つ。

「ここか？」

そう言いつつビルに入っていく。既に聞こえなくなった鈴の音に一抹の不安を抱きながら、砂塗れになっている体を払いながら、老朽化したコンクリートの階段を上がっていく。

このビルまでおよそ数キロあった道のりを一瞬の間に走りぬけ、尚且つ体には異変が無かった。動悸、息切れ、心音の増加。そういう『人間』味のある変化が無かったのだ。しかしココロはこの異常な『夢』のせいで気付けない。

階段を上がっていくとまた鈴の音が鳴り始めた。まるで彼自身を誘導するように響く弱々しい鈴の音を聞きながら、長い廊下を抜けココロは一つの扉の前で立ち止まった。

破壊後の廃墟のビルにはあまりにも似合わない、聖堂の様な扉の前。逡巡する気持ちを殺し、意を決して扉を押し開けた。

軋んだ音が建物全体に浸透していく。その扉を両手で全て開け放

ち、あまりの事に中を見て驚きを隠せなかった。

「真つ白だ・・・」

部屋は気が狂うほどにまで白かった。純白の壁紙が張られており、机や本棚は無く簡素な部屋。その大きくも無く小さくも無い、空気すら白く感じられる部屋の奥の小さなベッド。そこには一人の少女が座っていた。

「・・・・・・・・」

首を傾げる。首に巻かれている首輪に付いた鈴がリンリンと鳴る。この鈴の音があんな遠くまで響いていたのだ、と有りえない事象を自然に受け止めていた。

「・・・・・・・・君は・・・」

白い部屋の中に足を踏み入れる。まるで密閉された空間に感じ、体の一部一部を分解して、縮こませるような感覚が襲う。

少女の肌は白かった。あの夜、路地裏で出合った天使や先程襲い掛かってきた天使のような不気味な白さではなく、美しい白。その肌の反転か、髪は深い黒。飲み込むような黒が寝起きのようにボサボサになり、腰辺りにまで伸びていた。

「・・・・・・・・」

目の前の男が彼女の部屋に侵入した事を不安や不満に感じず、ただ不思議そうにチリンと首を傾げるだけだった。魅入られたようにココロはいつしか彼女の目を見ていた。燃えるような赤い目。眠た

そつにこちらを見ているその目には敵意は無く、興味を抱いたようなそれでいて退屈そうな目。

コツコツと歩いていく。警戒したのか、それとも見ているのに飽きたのか少女はベッドから腰を上げた。

白い装束・・・正月に兄・光太郎とお参りに行ったときに見た『巫女』のような服。しかし赤の袴ではなく白い袴。袴は膝部分で無くなっていて白い脛が見える。

ザリザリと草履特有の擦れる音を出しながらココロへと近づく。

「オマエは？」

惚けたような声。それだけで先程まであつた恐怖心と焦燥感は薄くなる。

「ぼ・・・僕は居神心・・・き、君は？」

「・・・・・・・・」

返答に答え自らの名前を目の前の少女に教え、その返礼にと彼女の名前を聞き出そうとする。しかし彼女から返ってくるのは沈黙だけだった。

少女はゆっくりと居神心の顔を指差した。小さな体軀は小柄な少年と数十センチも差が有る為、それだけでも重労働にも見えた。

「赤い・・・手」

振袖から覗いた腕は肘の少し上から、指にまでかけ真つ赤に染まっている。それはまるで血のように煌き、

（綺麗な手だな・・・）

場違いな感想を抱かせた。

「イレギュラー」

「えっ？・・・と、ぼ、僕の事？」

イレギュラー。普通ではない、通常ではない。様々な意味を込められた言葉。オロオロする居神心を眠そうな目で見る少女はとつと話を続ける。

「ワタシは造魔。未だ肉を持たぬ、意志無き人形。己と言う確固たる存在を認められなかった、この世から溢れ零れた外理念体。外法により神の意思無く、造られる人造の悪魔。そして・・・イレギュラーが私をこの世界へと連れてきた」

抑揚の無い口調を聞きながら、この少女は造魔と言う名称を知ったココロは少し嬉しく思う。このままコミュニケーションを取れなければどうしようかと思っていた。

「造・・・魔・・・。悪魔・・・？ぼ・・・僕が君をここに連れてきたって・・・という事・・・此処は僕がいつも見る夢で・・・」

「夢・・・？そうか。おそらく外理念に近づいたイレギュラーの意思が、ワタシを巻き込んでこの世界へと連れてきたか。ワタシた

ちの血と肉は未だあそこにあると、考えて良い」

「巻き・・・込んだ」

「そうだ。ここはイレギュラーの未来世界だ。何故破滅世界なのかは解らないが、間違いなく現世の未来だと思う。イレギュラーは精神だけを恐らく飛ばしていたと予測できる。」

「・・・じゃ、じゃあ僕がこの世界で何度も天使に殺されたのは・・・」

少女は疲れた様子で腕を下げ、ココロの顔をじっと見つめる。

「理由は解らない」

この少女なら理由を知っているのではないかと言う、期待は落胆に変わり激しく肩を落としてしまう。

「イレギュラー。どうする。先程からこっちへ迫る『天使』が居る。多分、イレギュラーを殺す天使だろう」

ギョツとした。そういえば忘れていた。自分の迂闊さを呪いながらまたパニックに陥る。またあの天使と相対すれば、死は免れないだろう。

「嫌だ・・・！死にたくない・・・！この世界から逃げれる・・・脱出方法を教えてくれ！」

「・・・」

造魔はじつと見つめる。真っ赤な瞳は何を思っているのか。

「イレギュラー……貴方はワタシに教えてくれるか？ 生の意味を。イレギュラー……貴方はワタシに教えてくれるか？ 人の意味を。ワタシは現世が向かう未来を今この目で見た。このような破滅を迎える意味を知りたい。ワタシは生まれて世界を知る『義務』と世界を知る『権利』がある。ワタシは……自らが生まれる様々な意味を知りたい」

聞きたい事は素通りされてしまい、虚を突いた少女を凝視する。脱出の答えが無いのだと知り落胆する。そんな少女の新しい発見は、案外知識に貪欲なのだ、と知った。

ココロにとって目の前の少女は無感情だと決め付けていた節があった。しかし目の前の少女は必死に訴えてきた。自らの『意味』を。しかし、そんなものは自分自身にだって判らない。自分が生まれてきた理由。世界崩壊の意味。

「……僕にだって判らないよ。だけど……もしかしたら知っていく事が出来るかもしれない。……いやもしかしたら生きる事こそ、自らの生の意味を探求する行為なのかも知れない……。僕にだって難しい事は解らない。それにもかしたら、もうすぐ天使に殺されるかもしれない……。こんな唐突の死がある人生なんて……僕一人じゃ見当も付かないよ……。」

「なら、二人ならわかるかもしれない。イレギュラー。ここから脱出できたらワタシと共に生きる意味を探してくれるか？」

「……！で、できるのかい！？」

無我夢中とはこの事だろうか、少女の肩を乱暴に揺さぶる。そんな彼にやはり、感情籠らぬ声で

「できる。ここはイレギュラーの頭の中の未来世界だ。故にイレギュラーが死ぬか、イレギュラーの死に関して密接しているあの『天使』を殺すか。そうすればこの世界から脱出できる。」

到底不可能と思われる事を告げた。

「むっ・・・無理だよ！相手は・・・天・・・いや悪魔なんだよ！？剣持ってて、飛んで・・・！」

「大丈夫だ。イレギュラーも悪魔だ」

グラリ・・・と体の力が抜けそうな感覚。自然と体は崩れ落ちそうになる。

「な・・・なにを言って・・・僕は・・・人間・・・」

「いや、イレギュラーは悪魔・・・魔人と呼ばれる生物だ。人と魔の合成体。ワタシと・・・『造魔』と良く似た存在だ」

後ずさり尻餅をつく。体が震えているのと同時に、自らの体に起こっている異変を思い出す。震える両手を確認し、涙が出そうになる。黒い線は何処まで皮膚に張り付き、ズクズクと明滅する。鋭利な剣を片手で止めたこの体は、本当に悪魔なのではないのかと頭が思い始める。

「イレギュラー。どうだ、ワタシと共に探してくれるか？生きる意味。人の意味を」

「・・・った・・・わかった・・・わかったよ！もう、なんでもいいからここから出してくれ！」

マシンガンのように、休む間も無く最悪の事実を突きつけられていく狂った世界に疲れはてる。少年は狂ったように叫び、『契約』を成した。

「契約完了だ。では、主よ、^{あるじ}ワタシの名を決めてくれ」

イレギュラーから主へとココロの呼び名が変わる。それを聞き不思議そうな顔で造魔を見つめる。

「あの・・・造魔さん、主って・・・」

刹那・・・！造魔が凄まじい速度で扉へと走る！右拳は刀を模す『手刀』を造り、一気に『侵入者』を袈裟切りした。ギインと金属と金属が弾けあう音。造魔はドアを潜ろうとした人影を吹き飛ばした後、すぐさま開かれたドアを閉める。

「・・・・・・・・」

啞然とした顔で少女を見る。ドアを占め終わり、無表情な顔をしながら少女は自らの不満をぶつけた。

「主。ワタシは造魔、と言う名称ではない。正確にはそれは種族と思ってもらいたい。ワタシの名は主、お前が決めるんだ。どの様な名前でも良い。それは明確な契約執行を取る上での責務だと思ってくれ。外国の名前でも良い。日本国内の名前でも良い。但し、あまりに呼びにくい名前などは無しにしてくれるとありがたい」

鈴の音を鳴らしながら、少女は主と呼ぶ少年に近づいていく。

「・・・赤い・・・手が・・・刀に見えた・・・」

居神心、17歳の身で小さな少女の名前を考えなくてはならない重責に身を擦じらせていた。

「おっ・・・のれ・・・！」

魔人を探していた天使『アークエンゼル』は思わぬ反撃を受け、ビルの廊下を滑る様に吹き飛ばされていた。

「仲魔が居たとはな・・・」

そう、吹き飛ばしたのはあの少女、造魔。アークエンゼルの悠々とした侵入を吹き飛ばし、天使に屈辱を与えていた。

立ち上がり、もう一度扉へと進行。次は油断無く相手を浄化する。天使の意思は固く、歩みに強みを帯びさせる。

ギィ・・・と目指す扉が勝手に開く。目を凝らせば、一人の少女。少女は無然と白い部屋の入り口に立ち、天使の侵入を邪魔する。

「・・・なるほど・・・造魔か・・・。人にも成れず、悪魔にも成れない魔人にはお似合いだな。邪魔をするならば・・・容赦はし

ない」

「人にも成れない、悪魔にも成れないのは当然だ。主は『魔人』と言う種族になった。魔人と言う種族が人になったり悪魔になったりするのはおかしい。魔人と言う確固たる種族を、今まであった種族に例えるなどと天使は変わってる」

「・・・下らないへ理屈を！」

怒声と共に天使は滑空移動をし、一気に少女を刺し貫く為剣を突き出す。少女はそれに答えるため先程と同じように手刀の構えを取る。

激しい金属音と青白い火花が、赤い太陽光が差し込む廊下を照らした。

「っ！」

天使は剣を巧みに使い、見る物を感嘆させる剣術で少女を追い詰める。

対する造魔は両手の手刀を振り回し、獣のように髪を振り乱し、敵の剣を弾いていく。

ココロは先程言われたとおり、その攻防を不安そうに見ている。造魔が一人で戦うと申し出たのだ。確かに魔人だとか悪魔だとか言われても、彼自身には全く戦闘経験は無い。そして少女・・・造魔は自らを悪魔だと名乗った。故に戦闘に置いて、天使を倒してくれるかも知れないと、彼女に任せた。

だが、その考えは間違っていた。彼女はまだ生まれてすらいない、力の無い生物なのだ。造魔としてまだ、力を授かっていない。ココロがその事に気付いた時には少女は辛そうに息をしていた。

「はっ・・・あ！」

振り乱す両手の赤い手刀から飛び散る、天使の剣による傷・・・血液。いかに少女の手刀が刀のように鋭くても、相手の武器を相殺する事は出来ないのだろう、元々赤い手がより一層赤く濡れていく。

（あ・・・ああ・・・そんな・・・。ぼ・・・僕にも戦えるだけの力があれば・・・）

ギチィと青い光を上げる廊下の中を、白い部屋の中心で自身を守ってくれている少女を辛そうに見る。体は後悔の鎖に囚われている様にまったく動かない。そんなココロを嘲笑うかのように、少女が白い部屋の入り口付近に吹き飛ばされた。少女は尻餅をつき、両肘で上半身を支えながら尚も立ち上がろうとする。

「くっ・・・う・・・」

無表情な仮面は血で汚れ、少し悔しそうにも見える。白かった装束は、袖口に赤い斑点をその身に付け、少女の腕が切り刻まれている事を証明した。

「はっ・・・は・・・はあ・・・所詮は・・・人に媚びへつらう、人造の魔・・・この私に勝てる訳がありません・・・」

天使も体力を大幅に削られたのか肩で息をしながら、トドメを刺すために少女へと近づく。

（殺される……。殺される……。？僕のために戦ってくれていたのに……。）

天使は愉悦に肩と天使の羽を揺らしながら、刀を水平に薙ぐ為に片手に力を込め振りかぶる。

（違う……。あれは……。僕が毎回殺される……。違うだろ……。あそこにいるのは僕で……。）

少女は生まれても居ない……。なのに今まさに死の間近に居る。天使の薄汚れた銀の鎧に自分の姿が移る。

「成程……。ワタシは……。こういう姿なのか……。」

そう言っ、場にそぐわない言葉を口にし、ほんの少しだけ笑った。……。様な気がする。

（僕に……。あんな武器があれば……。！あの子のように強い力があれば……。！あの天使のように鋭い剣があれば……。！）

その思いが力となるように……。刹那、ココロの体中を走る黒線を光が滑り、右腕を伝い降り、拳へと集まっていく。ココロは右手の中に力を感じた。握り締めていた拳をほんの少しだけ緩める。

「！」

それはそこに生まれた。力の波動。緩めた指と手の平の隙間、そこから生えるように青白く発光する形の定まらない剣の様な……。ともすれば棒のようにも見える、『力』が存在した。

しかし、そんな力の余韻に浸る時間も無く、聞こえてきたのはすでに薄汚い声となった、アークエンゼルの声。

「……最後の最後まで、私を侮辱する……。造魔……。ここで……。！」

振りかぶった剣の一閃。風を薙ぐ一撃は造魔の首を狙う。

「鈴音^{すずね}え！下がれえー！！」

高い女性のような叫び声。あらん限りの力で出した声に答えるべく、造魔『鈴音』は力を振り絞り後方……。叫び声の主、居神心の居る場所近くにバックステップする。

「っ！逃がすか、ここで屍となれえ！」

もはや敵かな声ではなく狂気染みた、発狂音。アークエンゼルの放った横薙ぎは空振するものの再度振りかぶられ、天使の手から剣が飛び立つ。剣の投擲。一直線に鈴音の頭部を狙う殺意の一撃……！

「おまえがああ！」

それを遮る魔人『居神心』の怒声。振り上げた右手から零れる、魔力の剣。放たれた天使の剣にを叩き落すように自らの剣を投擲した。

魔力光を放つ魔人の剣は天使の剣と重なり、この世のモノとは思えない火花を散らす。火花は白い部屋を更に白へと染め上げる……

！

時が立つにつれ天使の剣はその身を崩し、ドロドロと溶けていく。魔人の剣は止まらず、天使の剣を貪り喰うように侵食していく。

呆然とする天使アークエンゼルに飛来する一筋の一閃・・・！

天使の剣全てを食い散らかした悪魔の剣。殺意を飲み込み、救いたい一心で放たれた魔剣は空を駆け・・・一閃の軌跡を描き、

「ひぁ・・・うあああああぎああゝあゝ！！！」

天使の心臓を貫いた。天使の体からブスブスと煙が上がり、青い炎が天使を渦巻く。

「っ！！ああ・・・！！！！！」

青い炎を纏いながら不浄なる敵に近づこうと、もがきながら足をよたつかせる。

「いつ・・・生きてる・・・！？」

先程までの雄姿は消え、脅えた表情のココロをよそにその従者、造魔鈴音は無表情に哀れな天使を見ていた。

「いや・・・もうワタシたちの勝ちだ、主よ」

鈴音の勝利宣言で脅える魔人は落ち着いていく。しかし、目の前で燃える『人型』の恐怖は自らの恐怖心を消しはしなかった。

しぶとく動く炎を纏った人型は崩れ落ち、その痙攣しつつ・・・
ようやく動きを止めた。そんな天使に既に興味を無くした様に鈴音
は主を振り返る。

「しかし、初めから主が戦っていたら早く済んだ。ワタシより強
いと言うのであれば、そちらのほうが効率的だったと思う。ワタシ
は・・・『くたびれ損』という奴だ」

妙な知識を持つ、不満を吐き出す造魔。そんな少女を見つめなが
らココロは未だに震えが止まらない右手を押さえながら、泣きそう
になっていた。

何故なら、生物から・・・命を奪ったのだ。命のやり取り。De
ath Match^{デスマーチ}となった天使の呻き声はココロの耳に暫く残り
そうだった。

「とにかくこれでこの『精神未来世界』から脱出できる。これか
らは一緒に生きる意味をさがそう、主よ」

鈴音の声は心なしか明るい。そんな鈴音の後ろで燃え尽きたアー
クエンゼルの体が、青白い粒子となり天へと緩慢な速度で帰って行
く。

「・・・あ・・・これは・・・？」

「?・・・ああ、マグネタイトか。生体マグネタイト。血液など
に存在する外理念存在・・・悪魔を固定化させる物質だ。しかしワ
タシの様な『造魔』や主のような『魔人』には必要無い代物だ」

「マグネ・・・タイト・・・」

疲れ果てた魔人は力を失い、フラリと倒れそうになる。それに気付いた鈴音がゆっくりと受け止める。

優しく受け止められた赤腕の暖かい感触を肌で味わい、ココロの意識は遠のいていく。

力なく閉じようとする目蓋を押し上げ、視界をクリアにしようとするが適わない。暗闇に染まる一瞬前に映った視界を噛み締めながら、ゆっくりと意識を失う。最後に聞いた言葉は安らかな子守唄となつて。

「……主よ……。ワタシの……。私の『心』となる人よ……。私は貴方の『心』をこの手に抱き……。貴方は私の『血肉』をその身に宿す。私と貴方は一心同体となり……。世界の意味を……。探す……。主……。マスター……。マスター『居神心』……。今後とも……。よろしく」

白く白く濁る部屋。差し込む太陽の暁の中……。安らかな『残照風景』の中で、己の運命を変える人外に出合った二人は、その身を互いに任せるように倒れ、消えていった。

一節 残照風景 - m a e r D - (後書き)

Key Word

> 赤手 鈴音 (せきしゅ すずね) <

年齢 0 歳 女性体 157 cm 体重 40 kg

デビルサマナーより登場する『造魔』をモチーフにしたオリジナルキャラ。

白い羽織と白い袴、そして首輪についた鈴。真つ赤な髪と眼、そして血に濡れたような赤い手を持つ少女。

品川大聖堂で安置されていたドリー・カドモンを葛葉達が盗み出し、ヴィクトルの下へと運んだ所、同時に居神ココロの魔人実験が開始された事が

イレギュラー要素となり、居神ココロの精神世界へと迷い込む。

ココロは『心』を、鈴音は『生』を与え、両者を現世へと生誕させた。

ココロの精神世界での映像を未来だと感じ取り、何故このような世界になってしまったのかと言う

疑問と、自分自身の意味を探す事を使命に感じている。と、造魔にはありえない意識を持つ。

口癖は『〜学習した。理解した。よく分った』である。

> 赤手 <

赤手とは何も持たないと言う意味で、皮肉にも造魔の彼女に名づけられた名前でもある。

尚、居神心はネームセンスが悪いらしく、彼女の名前を外見の赤い手と鈴の音色から簡単に取った。

が、鈴音自身は不満に思っていないようで、それを突っ込んだりはしなかった。

二節 慙愧悔恨 - 現世帰還 - (前書き)

4人の思想がいり交わる業魔殿の中、
少年と少女は現世へと帰還する

二節 慙愧悔恨 - 現世帰還 -

1999年10月31日

深夜、風すら眠りに付いたのではないのかと言つほどの静けさ。そんな静寂が横たわる街のとあるホテル。

『業魔殿』に4人の闇世界の住人が集まっていた。

ホテルの一室。先程まで悪魔研究家のヴィクトルと天才プログラマー、スティーブンが食事をしていた大きな食堂。

葛葉キョウジとレイ・レイホウは地下の工房を後にし、簡素な食事を用意されていた。

「実験結果が出るまで多少時間が掛かる。それまではゆっくりしていくと良い」

そんなヴィクトルの言葉に一同は賛成したようで、レイホウ以外の人物は楽しそうに談話に勤しんでいた。

（よくあんな光景の後でワイワイとはしゃげるわね・・・）

気が滅入りそうなあの空間。少年の頭蓋骨、眼球、皮膚、内臓、筋肉一本一本・・・すべてに細工をしていた二人を見てレイホウはため息を漏らしていた。自身の認識能力が甘かったためパートナー

の前で情けない姿を晒してしまった、落ち込み気味の彼女に三人の異常な話題には乗れなかった。

「私の悪魔召喚プログラムは総てのPCに対しての起動能力を前提に作成しています。これは私が選び、必ずや行動を起こしてくれると信じる人々の下に送る予定だからです。ほぼ総てのPCが対応可能でなければ、私の努力が無駄になりますからね……。その為にも、彼……。生体COMP『魔人』になってももらわなければ……。人間の固体情報処理能力を知る事は非常に興味深いです。兼ねてよりバグが多いプログラムの処理能力や、召喚プロセスの短縮、マグネタイトの密接な関係等、様々な改善ができそうですよ。なによりも固体を『人間』とした事により、総てのCOMPで使用出来る様になる『共通言語』が生み出せるかもしれない」

興奮気味なのか専門的……。なのかどうかすら判らないステイブンの独白を、キョウジとヴィクトルは頷いて聞いていた。

「我輩にとつての悪魔召喚プログラムは総てのCOMPに対応して作っては居ない……。故にステイブンより若干進んではいるのだが、中々に有意義な実験対象者が居ない。我輩の悪魔召喚プログラムは個人対応型だ。その個人にとつて最も使いやすい形を成す。今作成している『GUMP』等はその最たるものだ……。まあそれにこだわら過ぎて、プログラム作成は予定より若干遅れ気味ではあるがな」

そう言いながら赤いマントから『銃の形をしている銃ではないもの』を取り出した。

グリップにトリガー……。銃身が付いているはずの部分はノートのような大きさの板が二枚くっついていた。

「ふん……。それが俺の依頼していた、COMPか……。中々良い趣味してるじゃないか、ヴィクトル」

「まだ作成途中なのだな……。外理念体の……。つまり『悪魔』の固定化が中々うまくいかない。マグネタイトの排出プログラムに異常があるのだろう。一瞬だけ固定し、またCOMPの中に戻ってしまう。葛葉……。お前が言っていた青年の箒手型COMPとほぼ同等のモノだ。悪魔言語も理解でき、交渉、悪魔の格納も可能だ。ただし箒手も銃も、圧縮式が未だ不安定でな……。あまりに高位の悪魔ではすぐに容量をオーバーしてしまう」

「……。つまりまだ未完成か……。このCOMPに付いているイヤホンで翻訳するのか？」

「その通りだ。しかし件の青年の箒手型COMPはハード部分を我輩が設計し、ソフト部分はスティーブンが作り上げた、我輩たちの「共同作品」と言う奴だ。箒手から震動を発し、瞬時に肉体に言語を理解させる仕組みになっている。GUMPにもその機能を付与できるが常に身に着けておかないと効果を発揮しない。ナックル型や箒手……。具足のようなCOMPにはこのシステムを導入するつもりだ」

「チツ……。イヤホンだのモニターだのゴチャゴチャしたのは邪魔だ。完成品はなんとかするんだな、ヴィクトル」

「任せておくと良い。此度の『生体COMP』により悪魔召喚プログラムと人体の密接な関係。何処までプログラムにより人体に影響を与えられるかの実験だ。これにより飛躍的な進歩が望めるはずだ」

食堂での談話は続く。まるでキョウジは何かに取り付かれたかのように、銃型COMPを舐めるように見る。ヴィクトルとステイブンは未だ熱の籠った言葉のキャッチボールを楽しんでいる。

「そういえば、Dr・ヴィクトルは悪魔研究家の以前、悪魔を合体させる秘術を研究なさっていたとか・・・？」

ステイブンの何気ない一言に、ヴィクトルは落胆と不敵な笑みを表情に表す。

「ああ・・・。管くだを持つ霊能力者達が集めてくる悪魔達の合体を研究していた。悪魔達は貪欲だ。それが天使であつても、魔王であつても、魔神であつてもだ。貪欲に力を求め、己を強める為の術を探す。そして我輩が発見したのが『悪魔合体』だ。悪魔達は己の意識や肉体を捨ててもより強くある事を望む。そこで肉体と精神を2体・・・いや3体を限度に、結合・合体させるのだ」

「しかし・・・それでは合体した悪魔は新たな意識を持つ事となる・・・。ふ・・・む。合体後の契約継続を承諾させるプログラムが新たに必要になりますね。ふふふ・・・面白い」

悪魔合体・・・過去『管』を操る封印悪魔使役能力者と呼ばれる人種が居た。それは葛葉の一族も例に洩れないのだが・・・

「・・・ふん・・・。里の爺どもはアレを危険視しているからな・・・。『管』の秘術を知るのはこの世界で一握りだ。力を得るには手っ取り早い方法を『邪法』と抜かす爺共め・・・。く・・・く・・・。今に見ている・・・悪魔召喚プログラムで今まであった下らない葛葉の歴史をひっくり返してやる・・・！」

「確かにあれは危険な能力ではあるがな。管に封印した悪魔達を強制的に使役する能力だ。そこに契約は無く、ただ己の力にする為だけに利用する『外道封印悪魔使役能力者』達も存在したのは確かだ。しかし、本質は力を扱う者の心による。この現代で数人の若者に『刀』を持たせれば十人十色・・・人を襲う、銀行強盗、恐喝、またあるいは・・・様々な行動をするだろう。だが問題はそんな事ではなく・・・我輩の『悪魔合体実験』ができなくなってしまう事だ・・・!」

心底悔しそうにヴィクトルは天を仰ぐ。そんな彼を見て3人はまたか・・・と言う表情になる。

「我輩の総てである『悪魔合体』が出来なくなったのは非常にツライ・・・故にステイブンと協力し、霊能力が無い人物の為の悪魔召喚プログラムの作成に取り掛かったのだ・・・!その間、全く『合体』が殆ど出来なく、なんと無駄に等しい時間を過ごしたのだろうか・・・!」

毎度毎度、業魔殿での名物と化している『合体演説』。如何に合体が大事でそれを愛しく思っているかのヴィクトルの一人劇場がそこにはあった。

「大きな進展があると思われる『生体COMP』実験もこれで3回目だ・・・!これが失敗すればまた我輩の夢が遠のく」

「・・・ちよつと待つてヴィクトル・・・。三回目ってどう言う事?あれって・・・今回が初めてじゃないの?」

今まで会話に参加しなかった彼女に、己の演説を邪魔され少し怒

気を含んだ声で質問に答える。

「・・・うむ。かの実験は1999年4月16日木曜日、女性21歳成体で失敗している。同年7月21日火曜日、男性52歳成体で失敗している。どちらも外理念体により殺害され、外理世界と接触した事実から『生体COMP』に適していると思ったのだが・・・。一人目は情報書込作業中に自己の理解を超えた情報を与えられた為か、一瞬にして臓器や血肉を灰塵はいじんと化した」

聞いていて目眩が彼女を襲った。つまりこの人道に反する人体実験は何度も繰り返されていると、言う事なのだ。・・・悪魔研究家と言っただけで、彼と境界線を引いていたレイホウにとっては更なる衝撃だった。

「ちよっ・・・ヴィクトル！貴方自分が何をしているのか、わかっているの！？」

「協力を申し出てくれたのは葛葉キョウジだが？聞いていないのか」

何でもないような言い方。しかし彼女にとっては非常事態。困惑した顔でキョウジを睨みつける。

「キョウジ・・・！何を考えているの！？貴方は人を守護する立場にある葛葉の・・・！」

レイホウの怒りは当然である。世の為、人の為に『悪魔』を封殺してきた『葛葉』の一族が、死体攫い等をするのは以ての他だった。怒りに身を任せ目の前の白スーツを睨みつける。だが彼女には気の毒だが彼の辞書に『反省』と言う言葉は入っていないようで、悪び

れた様子も無く机に肘掛けていた。

「はっ……。死んだ馬鹿の事なんぞ俺の知ったことか。アレはなレイホウ。死体だ。未来が一切無い、生の先を奪われた存在だ。そんな何にも無い奴等が『悪魔召喚プログラム』の礎^{いしずえ}になれるんだ。そっちの方がよっぽど奴等にとって幸せだろうが」

「ふっ……ふざけないで！あの少年だって今回限りだって言うから私は黙認してたのよ！それを……！」

「痴話喧嘩なら他所でやってもらおうか。此処は我輩の安寧の場『業魔殿』だ、騒ぎ立てるなら今後一切の協力要請を無くす。勿論こちらの援助や協力も無しにさせてもらう。それにレイ・レイホウ。今までの死体に関しては我輩から遺族に通してある。……事後承諾となっているが、我輩の知的探究心を埋めてくれた分の謝礼はある。何より悪魔に殺されたましたと報告する訳にもいかんだろう。こちらの方が色々と社会的都合も良いのだ。そうがなり立てる事もあるまい」

「……っ！……わかつ……たわ……。但し！これっきりにしてよ！キョウジ！」

「……ふん」

そんな様子を見てステイブンは苦笑していた。彼やヴィクトルにとって目の前のコンビはまだまだ、若く感じられた。食堂は少しばかり静けさを取り戻し、レイホウの懔然とした顔だけが目立っていた。日付はいつの間にか変わり、10月31日……早朝1時である。これだけ大きな声を張り出していたのに、苦情が来ないのはこの館特有の防音能力があつてこそだった。

「Dr・ヴィクトル。確か『生体COMP』被験者二人目は複合作業中に、自己の『死』を認識してしまつて固体情報がすべて分解・崩壊してしまつた。まずは被験体に如何にして自身の『死』をごまかしながら、『生』を認識させるかだ」

「うむ・・・それについては液体窒素等を使い、被験体の時間概念を凍結させる方法を考えていた。そうすれば以前のような失敗も起きまい」

そう言いながら随分と緩慢な動作でヴィクトルは立ち上がる。業魔殿の大きな置時計を確認し、あの工房を出てから2時間余りが過ぎていた。何かを感じ取つた3人は業魔殿の主の次の言葉を待つ。

「そろそろ液体マグネタイトも人体に浸透し終わっているだろう・一度様子を見に行くでしょう」

赤いマントを翻しながら誰の返答も待たず一人食堂を後にした。そんな様子尻目に3人は顔を合わせてから、ゆつくりと後を追つていった。

深い赤を基調とした絨毯の上をゆつくりと歩いていく。業魔殿は大きなホテルではあるが、今現在は客が居ない。と言うか居る所を見た事がキョウジ達は無かつた。売れないホテルと言うより、売る気が無いのだと勝手に想像している。

それ自体は間違いではなく、ヴィクトルは身边に従者や従業員を置くつもりが毛頭無いのに、一人で経営の出来ないホテルを住处と

している。安寧の地と言っただけあり『悪魔』を連れてくる人間、または協力者以外を拒否する、悪魔研究家ヴィクトルの巨大な城でもあった。

そんな自らの城を闊歩し地下の工房へと歩いていく。悪魔合体や悪魔召喚等をこなす工房へ続く階段は、いつもより薄暗く見えた。

「レイ君。もう一度すまないね」

「・・・また・・・？」

車椅子の荷降ろし作業を嫌がる、レイ・レイホウを少しからかうようなステイブンの声。そんなやり取りが日常になりかけていた時。

ガシャアアン！

「！・・・レイホウ！行くぞ！」

夜の耳鳴りがする程の静けさには、五月蠅すぎるガラスの割れる盛大な音。

長年の慣れからか、すぐさま戦闘体制に入ったキョウジが懷から『剣の柄のみ』を掴み構える。続いてレイ・レイホウも背広の背中から4つの30cm程度の棒を、両手に二本ずつ器用に指に挟む取り出す。一瞬ソレをクロスさせたかと思うとギチリと言う歯車の噛み込む音。見れば4つの棒はすべて連結し、1m程の棍となっていた。

音の発生源、ヴィクトルの工房から聞こえてきた破壊音。ヴィク

トルとしても自身の工房から、正体不明の音が聞こえてくるのは酷くご立腹らしく、眉間に走る皺を押さえながら、

「・・・あまり我輩の工房で騒ぎ立てられては困る・・・のだが、状況しだいでは解決してもらえるか。一応、低級な悪魔共が勝手に侵入せぬよう境界を張ってはいるが、この魔都・東京ではいささか何が起るか予想だに出来ない。葛葉、レイ・レイハウ、よろしく頼むぞ」

低く怒りを込めながら吐き捨てる。そんな依頼なのかお願いなのか解らないヴィクトルの言葉に答えるよう、キョウジとレイハウはお互いの位置を気にしながら、慎重に階段を降りていった。

工房のドア手前・・・キョウジが右手に持った剣の柄を一闪、横薙ぎ・・・パチン！と言うバネの弾ける様な音が鳴る。葛葉キョウジが持つ剣の柄から白銀に光る『刃』が生えていた。ヴィクトルが作り出した『古代の剣』と呼ばれる、長期携帯用の武器である。

レイハウもそれに習い両手に構えた棍の両端を掴み、引き伸ばす。金属の擦れる音と共にズルズルと新たな棍が引きずり出される。完全に引き出された棍は三つとも総てワイヤーを束ねたような強い糸で連結している。これもまたヴィクトルが作り出した長期携帯用の武器『退魔節棍』である。

二人は武器の存在を明らかにし、すぐさま戦闘を行えるよう己の獲物を油断なく構える。

「行くぞ！」

キョウジの声を合図に工房のドアを蹴破る。薄暗い円筒のケージ

が並んだ部屋。その中心点……。

「ドリー・カドモン!？」

レイホウの叫び声に引き寄せられるように、ヴィクトルが工房に後ろから入ってくる。

「……これは……」

中心点の魔方陣。そこに円状に並べられたガラスケージの中……液体マグネタイトと、昨夜搬入された少年の死体の臓器が激しく揺れ動いている。そしてそれらに囲まれるようにドリー・カドモンが立っていた。……いや正確には浮いていた。地上数センチの所をゆらゆらと。

このような怪奇現象、実験や研究過程でヴィクトルはもちろん葛葉達も見慣れている。

だが……あまりにもおかしい点が多すぎた。

ドリー・カドモンには未だ肉と血となる『悪魔』を与えていない。合体・結合していないのだ。故に血肉を持たず、血肉の無い存在は意思を持ってない。だがそれが意思あるように動く。これが一点、おかしい事柄の一つ。

少年の臓器には情報を書き込んだのである。皮膚や筋肉の筋の一本一本にも細かな文字情報を書き込んだ。しかし、あくまで情報だけだ。情報だけでは生を確認できないはず。なのにあの臓器や人体の一部達は自らの生を、既に思い出しているように動いている。これが一点、おかしい事柄の一つ。

そして・・・ガラスケージが一つ割れていた。まず心臓が空中へと飛び上がり、魔方阵の中心・・・上空2m程度のところで停止していた。ふよふよと頼りなさげに浮いて、血と肉を炸裂させるように形状を変化させる。これが一点・・・もつともおかしい事柄の一つ。

グチヨグチヨとミンチ肉を揉み込む様な音。次々と独りでに破壊されていくガラスケージ。揉み込まれて行く肉と血は、浮上する臓器を取り込み少しずつ大きくなっていく。臓器はどんどん、肉の塊と化した存在に吸収され巨大化していく。しかし不思議と血と肉を床に落さない・・・まるで血液一滴すら見逃さない『悪魔』のように

「・・・ヴィクトル・・・これはなんだ!？」

キョウジにしては珍しく焦った声。飛び交う血肉の異常な風景に少なからずの恐怖心を抱いてしまう。攻撃すれば良いのか、それとも様子を見るべきなのか、逡巡してしまう。

「わからない・・・ふ・・・ふはは・・・はははは!これは一体なんなのだ!?!ふはははは!」

まるで神々しいモノを見るような声を荒げる。自らの予想より大きく外れる事象が目の前で起こっている。彼は何事にも変えれない奇跡、そして言葉では言い表せない幸運を感じていた。

『予想外』とは自分自身では『知って作れない』のだ。人の歩む道は予想だらけの推理の道。しかしその道には予想をする度に発生する『予想外』と言う落とし穴が生まれる。そして人は予想外と言う落とし穴に落ちた瞬間二通りの行方に出る。

一つはその予想外を嘆き悲しむタイプ。この世の中このタイプが一番多く、『予想外』の本質を捉え切れていない。自分の予想通りに進まない事に憤慨する、愚者。

一つはその予想外すら楽しみ自らの知識にするタイプ。そして、このタイプが・・・ヴィクトルその人。今、ヴィクトルは己の予想外に対し、歓喜に打ち震えていた。己の予想が外れてしまった悔しさ、己の予想を超えた現象。総てに感謝していた。

前者を通常の問題と例えるならば、後者は『狂人』とでも言えば良いのだろうか？

虚空に浮かぶ血肉に人体の一つ一つが余す事無く合成される。ヴィクトルはとうとう『魔人』が生まれると確信した。この1年を通して『生体COMP』に着目した二人の鬼才の大願が成就されようとしていた。

・・・最後に一つの最大予想外を起こして。

荘厳な闇と小さな光が見守る大きな部屋の中、赤い血肉が蠢動し流動し・・・人の形を成そうとした瞬間の事。

ヴィクトル・・・葛葉キョウジ・・・レイ・レイハウ・・・そして階段の上で耳を澄ませていたステイブン。

その四者に・・・チリンと運命の鈴の音が聞こえた。

その鈴の音を聞き、まるで血肉が人型を取るのを待っていたように・・・ドリー・カドモンは浮き上がる。上空、人型になろうとし

た血肉へと迫る。ズブズブと下方から埋まっていく人形と肉の塊。

再度聞こえる鈴の音。鈴は何処にも存在していない・・・しかしドリー・カドモンから聞こえてきていると、全員が感じていた。

『・・・心を・・・体を・・・を・・・すべ・・・ては・・・一・・・心・・・同体・・・我が主^{あるじ}・・・我が名は・・・』

脳内に直接響くような声。鈴の音を言の葉に縫い込めて、声は明確な情報として世界に認知され、ヴィクトル達へ言葉として運ばれる。

すべてが合体した瞬間、世界に眩い光が溢れる。各々が強い閃光から目を防護する為マントを翻したり、自らの獲物で光を遮ろうとしたり、またあるものは階段の上からその神秘の光を呆然と見ていたり・・・。

眩い光は業魔殿の館を侵略するように駆け抜ける。そして・・・

『我が名は・・・造魔・・・造魔^{セキシユ}』
『赤手^{スズネ} 鈴音^{スズネ}』
『・・・この心・・・主と共にあり・・・この軀^{からだ}・・・主とともにあり・・・』

閃光から現れた白装束の小さな少女。腕は血が流れ落ちたように真っ赤に染まっている。首輪をしておりそこに鈴が飾られている。赤く燃える髪が渦巻く風に撫でられ摩^なく。その少女の後方・・・まるで少女に守られるように一人の学生ズボンの少年が倒れていた。

「っ！あの子さっきの・・・！」

レイホウが見た少年の姿。いや他の2名も解っていた。先程の『

生体COMP』となるはずだった少年だ。

ヴィクトルは考えこむように、歪んだ口元に手を持っていき顎をさする。

「・・・」

少女は抑揚の無い瞳でキョウジ達を見つめる・・・いや睨みつけている。葛葉キョウジの血が騒ぐのか、剣を構えなおし、惚けた気持ちを入れなおす。

そして、造魔・鈴音は・・・何も語らないまま、疲れたようにひざまつき、光の粒子・・・まるでマグネタイトそのものに変換されるように、魔人の少年の体全体へと吸い込まれていった。そこに残るは少女の残影。倒れた少年の体には黒線が、体全体を縛り付けるように流れていた。

様々な事柄を知り、様々な経験を積んだ葛葉達でも、この状況の対処方法は全くと言って良いほど思いつかなかった。

無様に構えた自分達の獲物を未だ収めず、あたりを警戒しながら見回している。そんな中ヴィクトルの呟きだけが唯一『正常』への道しるべとなった。

「一心同体・・・造魔・・・心を頂き・・・血肉を渡す・・・いや・・・これではまるで・・・合体ではなく・・・」

静かに横たわる中性的な顔の少年。体中の黒線とソレに浮かびあがる『言語』。ヴィクトル自身が作り上げた『魔人』としての魔力を体全体に描く証。そして今、心無き『虚無』なる造魔を・・・そ

の身に宿したのだ。

生体COMP・・・『魔人』は成功している。創造主となるはずだったヴィクトルとステイブンの意思を疎通せず・・・この少年は『自ら魔人となった』。そして有りえない造魔との契約。

そして・・・先程の造魔の意味深な言葉・・・ヴィクトルは止まらない思考を強く・・・明確に・・・言葉として表した。

「そう、この少年は・・・融合・・・いや・・・『造魔と共生』すると言っのか・・・!」

二節 慙愧悔恨 - 現世帰還 - (後書き)

Key Word

> 生体COMP魔人<

本作オリジナルの用語。原作では魔人は『人が魔となった人修羅』である。

本作はVとSにより、魔法と科学と錬金術の力により、生み出されたココロを指す。

生体マグネタイトを吸収、放出する事で悪魔とほぼ同等の力を出せる。

夢世界で出した光の剣は、マグネタイトを放出した結果できあがった剣である。

二節 慙愧悔恨 - 汚濁中空 - (前書き)

目覚めるココロ。現実世界で初めて出会う少女。
己の境遇を知り、ココロは・・・。

二節 慙愧悔恨 - 汚濁中空 -

1999年10月31日（土曜日）

唐突に、なんの前触れもなくベッドで睡眠を貪っていた少年は跳ね起きた。

動悸・・・息切れ・・・まるで何百段もある神社の階段を何往復もしたような苦しさ。体は言う事を聞かず、ただただ心臓を握るように裸の胸元に右手をやる。

汗が滝のように流れ、右手の指には激しい爆心音が振動となり伝わる。破裂寸前を思わせる心臓の鼓動に中性的な顔立ちの少年・・・『居神心』は体を震わせる。夢を見た後は真冬だろうが真夏だろうが関係なく汗だくなる。しかしこれ程までに体に異常が如実に現れるのは初めてだった。

体全体が軋み、叫び声を上げる。起き上がっている上半身をもう一度ベッドに転ばそうとするが、痛みがその行動を邪魔する。背骨・・・脊髄・・・筋肉の一本一本がまるで異物のように感じられる。痛みと嫌悪感から動かない体は正常に戻るまで放置する事にする。

ココロは部屋を見渡す。なんの飾り気も無い部屋。洋風の机と・・・本棚・・・重なり崩れている本の山・・・、

「・・・え・・・？ここ・・・どこ・・・？」

そこは居神家次男、居神心の部屋ではなかった。首を大きく旋回

させあたりを確認する。

見る者を安心させるクリーム色の壁紙。自身が寝ている大きすぎるベッドの隣にもう一つベッドがあり、綺麗なシーツは少し埃が被っている。良く見れば部屋全体にハウスダストが漂っているのが、部屋の窓から差し込む光で良くわかる。

「・・・僕の部屋じゃない」

遅すぎる確認。何故この様なところに居るのかを考える。汗が冷え込む空気に徐々に寒さを体に教えてくる。体の痛みは未だ続いているが、寝そべれないほどではない・・・しかし自分の部屋でもないベッドにもう一度我が身を預けれるほどココロは暢気でもなかった。

（そうだ・・・確か、昨日・・・て・・・天使に・・・）

首を跳ねられた。それで世界は終わり。ちゃんちゃん、である。

しかしココロは生きている。息をし心臓は鼓動をあげ、小柄な体軀からは汗を噴出し・・・体には黒線が貼りついている。

（っ！・・・こっ・・・れは・・・）

夢の中の映像が少しずつ蘇ってくる。まるでコマ送りの様に流れる、荒野の情景。あれは精神が未来世界に飛んでいるとココロははじめて知った。

（・・・そう、僕は知った・・・でもなんで・・・何処でそれを知ったんだっけ？）

混乱する頭は中々脳裏の再生ボタンを押してくれない。うんうんと唸るココロ。

「主。^{あるじ}いかに魔人体と言えど、それでは体調を悪くしてしまう」

そんなココロに一つの小さな細い声。華奢な声の主に視線を移し、ココロは思い出す。夢の情景、天使の死闘。そして、

「鈴音^{すずね}・・・じゃ・・・あ・・・あの夢は・・・本物だったんだ・・・」

造魔『鈴音』・・・ココロの未来世界の夢に登場した少女。夢で見た時と姿は変わらず、白装束に燃える赤い髪と眼。そして血に染まったような紅の手。そして・・・鈴の着いた少女の首には少し大きい首輪。

そんな少女はこちらに感情の籠らぬ視線を向け、『床』うつむけになり寝転がっていた。両肘を絨毯の上に突き、上半身を少し浮かせ両手に持った本を読んでいる・・・最中だった。

（鈴音・・・マナー悪いよ・・・）

なんとなく行儀の悪い造魔を見て実の兄『居神光太郎』を思い出す。途端に思い出のスクリーンに、兄の途方も無い意地悪な笑顔が貼りつく。少し心にムカつきを感じ、スクリーンをクシャクシャにしてやる。

「どうした主。もう少し休んだ方が良く。体の変体からまだ10時間も経っていない。ヴィクトルが言っていたが主はかなり特殊ら

しく、魔人の体に慣れるまでもう少し掛かるらしい。しばらくは口々に動けないと言っていた」

本を読んでいた少女は起き上がり、主……ココロに歩み寄る。無感情な赤い瞳の中から少しだけ困惑と心配の感情が見て取れた。

「……ヴィクトル？」

「ああ、主を魔人に変貌させた男だ。このホテルのオーナーでもある。……悪魔研究家として裏世界では有名だそうだ。歳は30歳……くらい……。いつも赤いマントを羽織っている。物腰は厳しい感じだ。あと……」

「いや……、もういいよありがとう鈴音」

「そうか」と言いココロをじっと見つめる。鈴音の言動から彼女が敵では絶対ないとココロは心底思った。先程得た知識から必死にココロの問いかけに答えようとする姿を見て、体の不調が少し治まった気がした。

冷静になっていく頭の中、解った事は「ここはホテルの一室」。「このオーナーは『ヴィクトル』と言う人物」。そして……「その男が自分の体を変異させた」と言う事だった。……あと「赤マント」が少し気になるココロだった。

（その人……僕の体を作り変えた人……頼めば……元に戻るかな……）

夢現世界での天使との戦い。魔力で創造された剣の投擲。天使を貫いた音、天使の燃える音。戦いの総てがリアルに思い出される。

確かにココロは生きたいと願った。しかし、自分が願った『生』はこんな異世界の生物めいた『生』では決して無かった。

「・・・鈴音。そう言えば、あの戦いのせいで君の事をきちんと聞いていなかった。教えてもらってもいいかな？」

じっと見つめている鈴音の視線に耐え切れず、身近な話題を振る事にした。と、同時に自分が少女の事を呼び捨てにしている事に気付く。ココロは同年代の女性も呼び捨てにはしない。夢でおきた事を引きずり、少女を呼び捨てにしてしまった事を後悔する。

「あの・・・鈴音ちゃんのほうがいいかな？」

「いや、鈴音でいい」

ココロの深い後悔は抑揚の無い声で一蹴された。落胆しそうになる顔に力を込め、引きつった笑顔を浮かべる。

「しかしワタシの事と言われても、返答に困る質問だ。・・・いやこれも生きる意味を探す行為の一つになるのだろうか・・・。・・・いいだろう、主。何でも聞いてくれ」

一瞬だけ瞳に宿った強い意志。しかしそれはまた無感動へとすり替わる。

「え・・・っと。じゃあ、あの夢。あれは僕が精神を未来世界へと飛ばしていたって言ってたよね。それはまあ、あんまり理解出来ないんだけど、なんで君までその・・・巻き込んだの？」

ほんの少しの罪悪感。自身が思った行動で相手に被害を与えた訳

でもないのに、相手を自分の騒動に巻き込んでしまう。そんな理不尽な罪悪感を含む言葉を受けても、迷惑そうな顔など鈴音は一切しなかった。

「それなら答えられる。それは主の全身がワタシの近くに『あった』からだ。精神が虚ろになり、ワタシを連れ去る形で未来へと飛んでしまったんだ。そして主が浸っていた『液体マグネタイト』の効果もあった。主が精神体で、あの強力な天使を一瞬で葬れたのも過度のマグネタイト摂取による副産物だ。『力』を使った攻撃はマグタイトを消費する。つまり主は実体からマグネタイトを取り入れ『剣』を作った。ただ、マグネタイト摂取は生命活動にはなんら影響は出ない。だからワタシ造魔や魔人である主には不必要だ。しかし戦闘行為になればやはり少量のマグネタイトが……」

「わ、わかったよ、鈴音。とても参考になった……」

参考書のような物言いに、機関銃のような唇の動作。頭の中に入ってくる情報を必死に纏め上げてはいたが、それに疲れ鈴音に中断の言葉を吐いた。

「そもそもマグネタイトって……。ん？ いやちよつと待てよ、あの時……。天使が粉雪みたいになった時、確か鈴音はマグネタイトとか言うのが必要無いって言ってた？」

「……。あの時はワタシ自身そんな事ができるなんて知らなかったからだ。今はもう大丈夫だ、学習した。次は戦闘行為で十分な戦果を上げることが出来る。期待して良い。あとマグネタイトについては後々説明する」

すこし拗ねた様な言い方に苦笑する。しかし、『次』なんていう

戦闘行為はあるのだろうか？

ココロは不安に思う。あのような戦いは避けて通るべきだ。自分の命を賭けてまで血を流し体を痛めつける理由があっても・・・だ。人間の知能は『戦いを避ける』事に使われるべきだと強く思う。

「・・・あと・・・」

鈴音がおずおずと言いにくそうに言葉を紡ぐ。不思議に思うココロは黙ってソレを聞き遂げる。

「ワタシは自分自身が主に巻き込まれたなんて思っていない。主をこの世界で見つける事が出来たのは・・・『幸運』と言うのだろうか。その単語が相応しく思う」

そんな言葉を聞いてココロはどうしようもなく嬉しい気持ちになる。

（なんて・・・純粋な『言葉』なんだろう・・・）

自分には出せない『純粋な言葉』。未だ精神が未発達だからこそ放たれる、純粋と言う思い。この少女の言葉に嘘偽りは無く、本当に幸運だと思ってくれているんだろう。ココロは言いたい言葉が自分の中に生まれるのを感じ取る。そしてそれが下らく、汚れた思考に染まりきる前に『純粋』な言葉を少女に返した。

「ありがとう」

それだけ聞くと少女は「うん」とひとつ頷いた。

「話は終わったか？」

ギィと扉が開けられる音を聞く。侵入者？ココロに視線を移そうとして、何処に扉があるのかを知らないことに気付く。

「こちらだ、魔人よ」

声の主は鈴音の後ろに立っていた。鈴音は首だけを後ろに回し、見上げるような体制を強いられる。

ココロからすればかなりの長身の男。赤いマントに黒いスーツを着た老人・・・いや、50代・・・見方によれば30代半ばに見える男性がそこにいた。白髪と言うよりは銀髪で中心で流れるようにわかれている。眼光は鋭く、鈴音の燃えるような赤の瞳とは違う、見透かすような紅の瞳がココロの体を冷えこませた。

「もう名前は聞いているだろう。我輩の名は『ヴィクトル』。この世で幾人も居ない悪魔研究家の一人だ」

鈴音の興味対象から外れたのか、赤マントから視線をベッドで上半身を起こしているココロに戻す。

「主、さっきの読書の続きをしている。用があるなら呼んでくれ」

そう言うとココロの返答を聞く前に、スタスタと先程から積んであった本の山へと歩いていく。うつむけになり、目が悪くなりそう

な姿勢で本を読み始める。

「知識に対して非常に貪欲なようだ。我輩の書物を10時間程度、通して読んでいる。何故か解るか？魔人」

先程からぶしつけな物言いに、そして自身を『魔人』と呼ぶ男に少年はほんの少しの反骨精神を強める。

「僕の名前は居神心です。魔人と呼ぶのはやめてください」

「なるほど、では居神心よ。何故か解るか？あの造魔の知識を欲する心が」

「彼女には『鈴音』と言う名前があります！そんな呼び方は止めてください！」

溢れ出た憤慨は怒声となり古びた室内を震わせる。虚を突かれた様にこちらを見る少女と、少しばかり驚いているヴィクトルが視界に入り、冷静になり後悔する。

「……大声を出してすいません。でも……！」

「……いや、我輩に落ち度があった。済まなかった居神心よ」

先程と違い、少しだけ……本当に少しだけ親愛を含ませた口調になる。それでもこのヴィクトルと言う男と接するに、多大な進歩である。あまり、そうは思えないココロではあるが。

「居神心よ。彼女……鈴音は何故あれ程までに知識を吸収しようとしているか解るか？」

「・・・いえ・・・あまり・・・本を読みたいからじゃ・・・？」

他者の行為・言動の真理を読み取るのは難しい。例え慣れ親しんだ仲の人間でも、中々意志の疎通とは出来ないもので一方通行の意思のやり取りをするだけになる。鈴音が何故本を読み続けているのか、ココロにもイマイチ解らない。

「我輩の予想でしかないのだが、彼女は生まれてきた時、彼女はお主の中へと入っていった。その時この世界の情報を『居神心』と言う素体から吸収した。この世界の常識、理念、思想。しかしそれはお主から得た情報でしかない。先程までの彼女はお主とほぼ同一の知識を得ていた。だが、情報を吸収しつくした彼女はこちらに現存し、我輩の書庫から勝手に本を持ち出してしまった」

(・・・マナー悪いよ・・・鈴音・・・)

泣きそうになるココロを他所にヴィクトルは続ける。

「それから10時間程、悪魔学ならず今の組織図・・・メシアやガイア等の勢力の情報。生体マグネタイトの情報等、様々な知識を得ている。さて・・・ここぞだ。何故彼女はここまで知識を得ようとするのか？わかるかね居神心よ」

まるで意地悪な学校の先生のような、とココロは思う。

「・・・それは・・・この世界の事を・・・より知りたいと思っ
たからじゃないんですか」

「それもまた一つの答えだ。答えは常に変動し変形し、我輩達の

思惑から外れ、当たり、時に逆に問を返してきたりする。居神心が述べた答えも、正解の一つだ。しかし、我輩はもう一つの答えをお主に提供したい」

答えの推薦。ヴィクトルは出来の悪い教え子を見るような、歪んだ笑顔で自らの答えを押してくる。この邪推に満ちた笑顔の答えはなんだろうか非常に気になっていた。そして「一体それは？」と聞き、返ってきた答えを聞いた時・・・、

「居神心・・・お主の為だ。お主が知りえない情報を得て、居神心の・・・主の助けになろうと思っている・・・と言う考え方だ」

ココロは目の前の男性を嫌いではなくなっていた。腕組をしクツクツと喉を鳴らして笑っている。一瞬前なら嫌悪感を抱くこの動作にも何故か愛嬌を感じとっている自身になんら疑問は湧かなかった。

「ヴィクトルさんって、案外ロマンチストですね」

「悪魔研究家がロマンチストで無ければ何だと言うのだ。空想を描き、空想を抱き、妄想を愛し、妄想を作る為に生き抜く我輩達の信条と言うものだよ」

得意顔で両手を広げ、演説するようなモノの言い方をしているヴィクトルがココロを指差し、

「それはそうと居神心よ。もうすでにその体は自身のモノとなっているはずだ。動かす事になんら違和感を感じないはず。生命活動をする事になんら疑心を感じる事もないだろう」

そう言われてから目覚めた時の激しい動悸は消えている事に気付

く。

「色々聞きたいこともあるだろう。彼女の知識量でも解らぬ事があるだろうからな。例えば・・・そうお主の体を元に戻せるか、等の質問だ」

「！もしかして、元に戻るんですか！？」

ヴィクトルのまさかの一言に釣り餌に飛びつく様に飛び起きる。
そして・・・

「質問には答えるがまずは服を着てからだな。お主の服は用意させてある、数刻待たがいい」

「・・・はい・・・」

何故か全裸の体をもそもそとベッドの中へ仕舞いこむ。何故自分は素っ裸なのかと言う疑問の中、冷静に分析する。

（僕の体・・・全身に黒線が広がってた・・・）

夢の中では確認できなかったが着衣の下にまで病気が浸透するうちに、彼の皮膚を黒い線が犯していた。

「待たせたな少年よ。先程まで居た女性に買いに行って貰っていた服だ。サイズは合うかどうかは判らん。無理にでも使っておい

てくれ」

ヴィクトルが持って来たのはハンガーに掛かっている、黒いブレザーと黒いスラックス。白いシャツに赤いマフラーだった。何処かの夜の仕事をしている風貌になりかねない服装だった。

「あの・・・僕の学生服は・・・」

最もな意見。自身の着ていた服ではなく、新しい新品の匂いが取れない服を用意されても困ってしまう。

「血塗れで良ければ我輩が一応保管してある。要り様であれば新しいものを用意するが、時間が掛かる。数日待つがいい」

血塗れと言う言葉で、己の境遇の理解を強める。ヴィクトルより受け取った服を丁寧に着替え始める。その間に見える体を走る黒線が自身の不快感を助長した。

「・・・僕の体、結局どうなっちゃってるんですか・・・？」

怖くて聞けなかった一言。自身の体の変貌はもう認めざるを得ない状況まで陥っている。

「その質問に答える為には、まず我輩の質問に答えていただきたい
い……。君は・・・『悪魔』と言う存在を信じるかね」

「悪魔・・・ですか」

悪魔。ココロの脳裏に過ぎるはあの天使達。どちらもココロに対して危害を加えようとした異形共。認めざるを得ない。信じざるを

得ない。あれらは確かに現実中存在し、ココロを殺そうとしていたのだから。

「・・・信じます」

その答えに満足したように頷くヴィクトル。ココロは先程の質問の答えを視線で促せる。

「質問の答えはだ。『居神心の体を悪魔にした』といえは理解できるだろうか」

クラリと、体がフラつく。景色が一瞬真っ黒になり、背に力が籠らない。結果ガクガクと体全体が震えてしまう。

「正確には生体COMP・・・『魔人』と言う存在へと作り変えたのだ。お主は外理世界の住人『悪魔』達と出会い、その命を絶たれた。その結果外理世界に繋がりを持ち、外理念体・・・『悪魔』達を認識できるようになった。そして君は『死』と言う概念を経て、人の可能性を失った。そこで我輩達は兼ねてより研究中だった『悪魔召喚プログラム』の内容を、死んだお主に書き写し人ならざる物・・・『魔人』としての可能性を与えたのだ。

可能性を与えただけでは人は生き返ることは出来ない。様々な方法を思案していたのだが、君は独自の方法を導き出した。ドリー・カドモンだ。ドリー・カドモンは『虚無』から『生』を得ることのできる唯一の生物だ。君は造・・・鈴音と合体・・・いや・・・融合して、『生』を得る可能性を取得したのだ」

興奮していたのか、素人には全くわからない概念を説明させられ、ココロは混乱する。

「あの・・・僕は・・・戻れるんでしょうか？元の体に」

「・・・そうだな、君が元の体・・・生体COMP『魔人』つまり、悪魔の体から普通の人の体を手に入れられるかどうかだが・・・これはまず論外。不可能だ」

「・・・！」

予想をしなかった答え。いや、人外から元に戻れるとは・・・あの強烈な夢を見てからはそうは思っていなかった。だから予想しなかった。そう、この答えを聞きたくなかったし、知りたくなかったから。

「もどれ・・・ないんですか・・・僕」

「お主は『死』より生還したのだ。『生』を掴み取った。そこで生じた僅かな差。自身の体が只人なのか人外なのかの違いだけだ。仮に『力』を失い、只人に戻れたとしてもその先にあるのは決定された『死』だ。お主は元に戻った瞬間に死を迎える事になる」

（もどれない・・・もう家にも戻れないのかな・・・）

ヴィクトルの説明を聞く気が失せていく。自身の帰る場所の喪失と言うのは、これ程までに心を空虚にするものなのかと滲む視界の中理解した。

「じゃあ、もう僕どうしようもないんですか？このまま此处で隠れて暮らすんですか？もう僕は人間じゃないからっ！家にもかえれないんですか！？何処にも・・・いけないっ・・・ですか・・・！」

「隠れて暮らす必要は無い」

「・・・？」

ぐずる鼻をすすり、中途半端に着ていたシャツの袖を通していく。体を走る黒線が視界が捕らえ暗い気持ちを過ぎらせる。中性的な顔にも不吉な黒線は走っている。

「こんな・・・黒い・・・線が・・・皮膚を食い破って・・・どう見ても・・・人間の体には・・・見えません」

涙で濡れる目尻、喉が枯れ、心音は静まりまるで落胆しているようだった。

「それについては大丈夫だ。お主の体に走る『0』と『1』の情報羅列線は外理世界と接触した人間にしか見えない。身体の外部分は只人が見たところで普通の少年にしか見えまい」

「・・・つまり・・・」

「そうだ、居神心。此処で隠れて暮らす必要は無い。大手を振って街を闊歩もできる、また家にも責任を持つて帰そう。本来なら此処で我輩の実験に付き添って貰いたいのだが、お主には様々な事柄を経験して貰わなければならない。そうでなくては実験の意味がない」

（実験・・・じっけん・・・）

ヴィクトルの血の通わぬ、あまりの物言いにココロの体に熱がこ

もる。

「・・・貴方が僕を・・・何の実験かは解りませんが、僕の体を弄繰り回したのは・・・なんとなく理解できているつもりです。貴方は自身の目的の為、僕を『変えた』。そして僕は『生』を得た。だから・・・貴方に感謝しています・・・」

ガタガタとココロが使っているベッドが揺れ動く。手首が震えるほどに力を込め、そして

ビキィ！

木々の破裂する音。ベッドは中央部がめり込み、シーツの下の木製部分にヒビが走っていた。ココロの体を駆け巡る黒線が咆哮するように黒く光を滲み出す。強い『憎』を抱く。それは激情へと変わり声を荒げさせる。

「感謝しているんです・・・！そう思わなければ・・・僕は・・・僕はっ！」

「我輩を殺すか。勿論、我輩とて人の心が解らぬ『外道』ではないつもりだ。お主の心情は察している。だが、我輩はお主に対し謝罪をする訳にはいかない。謝罪をすればそれは、お主に対しての最大の『侮辱』となるからだ。だからこそ、我輩はお主のその『憎悪』を黙って受け入れる。殺されるわけにはいかないが、どのような罵詈雑言も受け止めよう」

「・・・っ！・・・う・・・うっ・・・うっ！うっ・・・ふう
うっ！」

自身の体が『悪魔』へと変質してしまっているのにも関わらず、未だ涙を流せる事に、更に涙する。溢れる涙はココロの『悪』をすべて溶かして、水にして外に押し出そうとしているようだった。

「・・・」

何も言わないヴィクトルの傍を小さな影が横切る。

造魔・・・鈴音だった。

何も語らず、何も訴えない。ただ・・・泣きじゃくるココロの隣に座り、慰め方を知らない彼女はじつと・・・居神心を見つめていた。

悲しみから、近くにいた彼女に泣き縋る。鈴音の肩を抱き嗚咽を漏らし、肩には凄まじい程の力がこもる。だが、少女は無感情になすがままにされるが、その慈しむ様な瞳の先はココロに向かっていった。

扉の上には『ホテル業魔殿』の看板が貼りついた、大きな扉を閉め切る。人を拒絶するような、洋風の扉のノブに『Closed』の掛札を仕込んでいく。

一人の少年と少女、そして赤マントの怪人は雑踏を歩いていく。

「本当に僕の事、解らないんですね・・・」

人々は体全身にタトゥーの入った少年を見る事はない。

「言っただろう。只人には理解できぬから、認識できぬのだ」

「ああ。主には視線は向かっていない。視線を集めているのは隣の赤いマントだ。赤いマントは世間で注目を集める。少し理解した」

「・・・鈴音・・・真似しちゃだめだよ」

そう言いながらヴィクトルから一步離れて歩くココロと鈴音。ヴィクトルは慄然と・・・と言うより他者の視線を気にせず歩いていく。

（ある意味大物だな・・・ヴィクトルさん・・・）

あの後ヴィクトルは・・・ココロが落ち着くのを待ち、ヴィクトルは目黒のココロの自宅まで、送ってくれる事を承諾してくれた。

アーケード街を抜け出る前に、ヴィクトルがマントを翻す。

「居神心よ。一つだけ忠告しておく。あの時我輩は、隠れる必要も無い。家にも帰れる。街を歩いても良い。そう言った」

ヴィクトルの言葉を聞き、二人は頷きあう。

「だが、安寧の地はもはや無いかも知れない。すでにこの世界は『戦い』で埋め尽くされている。居神心・・・お主がもしも『安寧』を守りたいのであれば戦う事だ・・・奴等と」

そう言いヴィクトルはアーケード街の外へ通じる道へと歩いていく。

「主・・・行こうか。ワタシは自分の在る意味を探す為に・・・」

そう言いながら、鈴音もアーケード街へ出て行く。そして、その鈴音につられる様にココロもアーケード街を出る。

「なんなんだ・・・あれは・・・!」

アーケード街の外。天空に広がる美しい雲に太陽。人々が生活するうえで絶対必要不可欠な『天』は・・・

「奴等は・・・そう、我輩達が悪魔と呼ぶものだ」

飛び交う数千と言う黒い影・・・羽を持つ悪魔達に支配されていた。

二節 慙愧悔恨 - 汚濁中空 - (後書き)

Key Word

> 地変魔法マグナ<

地殻変動を起こし、ドリル上の錐で相手を貫く魔法。
マグナ、マグナス、マグダインと威力が上昇していく。

> 生体マグネタイト<

悪魔達が自らの体を固体化させる為の>理念物質<。
主に人体の血液に含まれている。他には地脈を流れていたり、ある
いは大気に溶け込んでいる。
本作中の悪魔達は死んだ場合、マグネタイトへと姿を変え中空を漂
う。

鈴音とココロ、悪魔達はこのマグネタイトを使い己の能力を高める
ことも出来る。

二節 慙愧悔恨 ・ 帰郷と望郷 ・ (前書き)

目黒へと帰還する少年と少女。

そして目黒ではあの男が戦いに明け暮れていた。

二節 慙愧悔恨 - 帰郷と望郷 -

1999年10月31日（土曜日）

街の中を軽快に走る軽自動車の群れ。まるで追われる羊のようにひた走る。その中の黒い軽自動車……。その中に3人の影があった。一人は運転に集中し、一人は本を読んでいる。そして一人の少年……。ココロは未だに天を仰いでいた。

空を多い尽くそうとする黒点。うようよと飛ぶそれはまるで子蠅である。だがそれらは器用にも、合わさる事無く飛行を続ける。

「東京全体に……。こんな……」

「うむ。いつの頃だったか……。メシアとガイアが設立されてからだな。彼奴等やつらの増加に伴い、東京全土に悪魔達が集合していった。何かの前触れかと思い、東京でも悪魔が一番増加していた『吉祥寺』に工房を構えたのだが。今のところメシアとガイア達のぶつかり合いしか目立っていない。悪魔自体は人間に未だ危害を加えておらず……。といっても召喚された悪魔は別だが」

ココロの不満そうな顔がバックミラーに見えた為、咳払いをしてから訂正する。居神心は悪魔に一度殺された。その事実は変わらない。

「まあ、ここまで発展した人間の文化や、建造物の中では悪魔達もおいそれ手出しはしまい。悪魔達は通常『外理世界』……。一般的に言うならば『魔界』と呼ばれる世界に住む。そこから内理世界プロセス……。我輩達の住む『世界』へと『召喚』と言う過程を通過し、現れ

るのだ。しかし、時折『召喚』を通さずにこちらへ這い出る『悪魔達』も存在する。かなり高位の悪魔か、もしくは自身の力量を知らぬ愚か者・・・そのどちらかだ」

外理世界・・・『魔界』からこちら・・・内理世界『彼らの日常』世界へとやってくる、異形共。だが・・・

「何故、僕達の世界に・・・？魔界からこっちへ来る理由ってなんですか？」

そう、その理由がココロには皆目見当もつかなかった。凄く住みにくい世界か、またはこちらへの観光か。明らかに見当違いな考えしか持てない自分の頭を小突きたくなるココロを置いて、ヴィクトルはブレーキを踏みながら答える。

「多くは『この世界に住まう人間の都合』により呼び出されることが多い。この世界の歴史には悪魔達の影が見え隠れする。例えばそう・・・ドイツの政治家『アドルフ・ヒトラー』が最近で強い波紋を起こした『悪魔使役者』だったな。彼の者は悪魔をこの世に呼び出し、世界を転覆させようとした。他にも悪魔達の力を使いこの世を変えようとした人物は多い」

少しの間、青信号に変わった信号機に従うように黒い軽自動車動き出す。

「・・・じゃあアレだけの数の悪魔を呼び出した・・・人が居るって事ですか・・・？」

「・・・それが解らんのだ。あれだけの悪魔・・・我輩も始めて見る。大昔は魔界と現世の境界線がうやむやでな・・・。お主とて

『妖怪』を知っているだろう?」

妖怪。日本古来より居る人ならざるモノ。モノノケ、人外、化生などと呼ばれる世界の『異物』。

「ろくろ首とか・・・ぬりかべとか・・・ネコマタとか・・・ですか?」

「そう、彼らもまた悪魔の一種だ。現世と魔界の境界線が薄い昔は、ちらほらとこちらの世界に迷い込む悪魔達が多く居た。だが現世でコンクリートの建造物、下水道、空を飛ぶ鉄塊^{テックアイ}等が誕生するにつれて、どんどんと魔界との境界線が強くなっていく。故に近年では悪魔を見るのも稀になって来た。・・・まあ居るところには居るのだから。」

しかしあの天を舞う悪魔達は迷い込んだ者ではない。明らかに呼ばれた者だ。だが、何者に呼び出されたかは依然として判明せん。そしてあの天空で戦争を起こすわけでもなく・・・そう、邪と聖が入り混じって飛行しているのだ。まるで何かを待っているようだ」

静かな車内、空を切り大地を走る内部音を静かに聞く。ヴィクトルは静寂が好きな男だったため『ラジオ』等はかける気は毛頭なかった。

「何かをする訳ではないって事は、その・・・前みたいに僕に襲い掛かったり、人に襲い掛かったりはしないんですか?」

「・・・そうだな。あの天を舞う悪魔達は襲い掛かってくる心配はないだろう。しかし・・・お主を殺した天使のように『召喚者』の意思を受けた悪魔は、その意思に従い人に襲い掛かるだろう。そ

れはお主として例外は無い。また死を賭した事態に陥った場合は全力を持って抵抗するのだな」

つまり危機はもう一度訪れる可能性がある、と言う事だった。その事実を知ったココロの顔に陰りが落ちる。その様子を感じ取ったヴィクトルは一応のフォローを入れる。

「まあ、そう悲観する事もないだろう。今のお前には先とは違い『仲魔』が居るではないか。鈴音と協力し、悪魔達と戦うといい」

「・・・鈴音・・・」

呼ばれたかと勘違いしたココロの隣の席ですつと俯き本を読んでいた少女が顔を上げる。「なに？」と言った不思議そうな顔を浮かべながらヴィクトルとココロを交互に見やる。

「そういえば、鈴音・・・造魔ってなんなんですか？」

肝心な事を聞いていなかった。魔人としての生を受けてからずつと一緒に居る少女。その鈴音が一体何故自分に着いて来ているのか、よくよく思い出すと理解できていなかった。

そんな少年の言葉に肩を少し落とすヴィクトル。ハザードランプを点灯させ道路の脇に車を停車させ、キョトンとした少年と、それをじっと見ている少女が居る後部座席へと顔を向ける。

「造魔とは人が作り出した『悪魔』だ。ドリー・カドモン・・・いわば生命の根源と言われる人形を用いて血肉を与え、自らの意思を持たぬ人造の悪魔を作り出す秘術が確立されている。その秘術を用いて生み出される・・・ハズだったのが造魔鈴音だ」

「意思を持たない・・・？でも、鈴音は・・・」

そう、鈴音には確かに力強い意思が感じられない。瞳に宿る光はなく、ただそこには意思の無い無感動な目しかない。

「魔人居神がどのような経緯を通り、造魔鈴音と契約を果たしたのかは解らない。だが、悪魔との『契約』とは約束だ。何かを差し出す代わりに、何かを貰う。何かをする代わりに、何かをしてもらう。恐らくだ、居神心は契約したのだろう。己の『心』を与える代わりに造魔の『生』を貰い受けたのだ」

夢の中の風景が忽然と広がる。天使の襲来。助けを示してくれた少女。そういえばとココロは鈴音を見る。無感動な瞳の奥、何を思うのか鈴音が突然言葉を紡ぐ。

「それは契約ではない。それはあくまで契約を行う為の準備みたいなものだ。ワタシの契約は他にある。忘れたか主。ワタシはあの世界の意味を知りたい。この世界の意味を知りたい。ワタシ自身が生まれてきた意味を知りたいんだ」

ココロは改めて思い出す。少女との契約・・・『意味』の探求。ヴィクトルはソレを聞くと目を見開く。高鳴る心音は興奮か、興味心が爆発しそうな心を感じる。

「・・・驚いたな。そのような契約とは・・・。いや・・・造魔として心が『虚無』だからこそそのような純粋な願いなのかもしれないな。我輩とて造魔を見たのはこれが初めてではない。しかし今までの造魔は何も願いはしなかった。やはり異例には異例が付き添うものなのかも知れないな。意味の探求か・・・ふ・・・ははは・・・」

・!
」

車内にヴィクトルの含み笑いが響き渡る中、造魔鈴音の顔をじつと見つめる魔人ココロ。

「主。主はワタシと契約した。二人なら探せるとワタシは感じた。だから・・・」

無感動な声。しかし、ココロは感じる。だからこそ彼女には最後の言葉まで言わせない。

「・・・わかってるよ。君に僕は助けられた。死に際からの生を僕にくれたんだ。そしてあの時天使との戦いの時も僕を助けてくれた。だから、僕は君と共に・・・その・・・不明確なものだけどさ・・・『意味』って奴を探してみるよ・・・どうやって探すかも判らないけど・・・」

「あはは」と、困ったような笑い声が続く。しかし、それを聞いて鈴音は「うん」とだけ言い一度だけ頷いた。

車は再起動し国道を走り抜け、目黒の駅に到着し、駅前の大きなロータリーで停車する。

「ここまでで良いのか？望みとあれば自宅まで送っていくが？」

「・・・いえ、ここでいいです。ヴィクトルさんにだってあのホ

テルの経営があるんでしょ？早く戻らないと」

そう言いあの埃塗れの客室を思い出す。あんな部屋に客が泊まるかどうかはともかくとして、ヴィクトルはホテルのオーナーである。不在にするにも限度があろう。

「いや、あのホテルは捨ててきた」

「は・・・？」

突然の放棄宣言。あれ程までに立派・・・埃塗れではあるがあの
ような建造物を捨ててきたと、目の前の男は宣^{のたま}った。

「工房もお主が生誕した際にかなりの被害がでてしまった。復旧するよりは新しい場所を探した方が良くと思ってな・・・。我輩の新しい安寧の地を探す事にした。もう建物も用意してある・・・のだが些^{ちや}かホテルの『業魔殿』とはある二人組みに大反対されてな・・・。次は違う『業魔殿』にするつもりだ」

つまり、引越しである。魔人が生誕する際に工房に大打撃を受けたヴィクトルは、いつ終わるか判らない修繕作業よりも目の前の少年の実験結果を収集する方が大事だと踏んだ。故に、

「その商店街に一応居を構えるつもりだ。しばらくはこの街に根付く事になる。何か困った事があったならばここに来るがいい」

各地に用意されている『業魔殿』の中の一つ・・・目黒の業魔殿を新しい居城と選んだ。その業魔殿の住所を記した真っ白な四角いカードをココロに渡す。

「は・・・あ・・・。どうもです・・・。いえ・・・。ヴィクトルさん、どうもありがとうございます」

此処まで送ってくれた謝礼を、きちんとしていなかったとココロは思い言いなおす。そんな言葉に心根の良い少年だと感心するヴィクトル。だが、後悔や少年に対する罪悪感は抱かない。悪魔研究家として、少年の体を作り変えてそのような『甘い』考えは少年を侮辱するだけだとヴィクトルは知っていた。

「いや・・・ではな居神・・・いやココロよ。また会おう。鈴音も達者でな」

それだけ聞くと心は車内から降りようとするが・・・少女は全く動かない。

「・・・？どうしたんだい鈴音・・・」

まさか夢で受けていた傷が疼くのだろうか？不安になる心に飛び込む言葉は・・・！

「主・・・本を読んで・・・俯いていたら気分が悪い・・・大発見だ・・・」

ヴィクトルとココロの肩を数センチ落させるには十分だった。

駅前からそう遠くない場所。街の中の獣道のような暗い路地裏・
・少し開けたその場所で、三体の天使が舞っていた。2体は黒い革
を身に纏った天使。そしてもう一体はそれを見守るように剣を構え
る純白の翼を背負う女騎士。エンジェルとアークエンジェル達だっ
た。その彼女たちの後ろには、青いベストと白いスラックス。そし
て左腕に乗せたノートパソコンを叩きながら、うつすらと笑う男が
居た。

その4対の影に相對するのはニット帽子を深めにかぶり、赤いジ
ヤケットに黒いズボン。そして右腕にはジャケットの上から籠手を
装着している。眼光鋭く、惘然とした顔で3体の異形と一人を睨み
つける。

「・・・ハツ・・・。こりや驚いた。血液の魔方陣を使わなくて
も召喚できるようになったのか。メシア教徒どもも動物並の知識は
あるんだな」

「血液による奇跡はあまりに被害が多すぎます。私たちは被害を
好みません。なにより『狂信者』達では手に余ると思い、私が呼ば
れたわけです。・・・私の名前は塔・・・」

「てめえの名前なんざあ、興味ねえ。天使共を召喚して無事だっ
てんならどっかに逃げるんだな。俺が欲しいのは強い奴だけだ。て
めえなんざあお呼びじゃねえんだよ・・・」

青年は目の前の男を睨みつけ、男の名前を言わせない。

欲するは敵だけ。己を高め、そして『』を忘れさせてくれる行
為だけ。その為に必要なのが強い敵。なにも考えずに命のやり取り
をする儀式を青年は・・・『許斐友春^{このみともはる}』は求めていたのだ。

名前を聞かない無作法な少年をメシア召喚師は狂気の目で睨みつける。

「わっ．．．私を馬鹿にするのですか！私は神の御使いの助力を得た召喚師です！その私を．．．！貴様っ．．．！」

「．．．く．．．く．．．くく．．．くはは！てっ．．．てめえ何言っただ？てめえが強い訳じゃねえ、その天使共が強いんだろ？てめえは邪魔だ。要らねえ。どこぞに消えろ。わかったか、『雑魚』が」

息を呑む音。天使達はなんの感情も持たないままそこに居る。すべてに馬鹿にされた気になったメシア召喚師は．．．

「こっ．．．殺せ！そいつを．．．神に逆らう愚か者を殺せえ！」

冷静さを欠いて、殺意を言葉にした。

その言葉を受け二体の天使．．．エンジェルは衝撃を打ち出す魔法陣を生み出す。

何語かもわからない賛美歌のような唱を歌う。しかし．．．その唱を完成させる前に、青年は動いた。俊足．．．！

パァン！ドッパァン！

二発の革が弾ける音。青年は拳闘スタイルで倒れ伏せているエンジェルの近くでステップを踏んでいる。そして信じられ無い事に、青年より1m程度離れた場所に居る天使エンジェルは．．．頭部を

この世から消していた。

血飛沫を上げながらガクガクと体を揺らし、完成しかかった魔法陣を発動させ、あられもない場所へと飛んでいく衝撃の塊。凄まじい音と共にビルのコンクリートが抉られる。

青年の右手の籠手。そこから浮き上がる魔方陣。一閃したのは黄金色の腕。メシア召喚師は言葉を失った。

許斐友春は一瞬の隙を突き、左手に居た天使に高速ステップで一気に距離をつめ、その顔面の鼻っ柱を右ストレートで振り抜いた。この数日間、メシア教徒の襲撃を潜り抜けてきた友春の拳は成長していた。いや、友春の戦闘能力が成長していたといえいいのか。彼クラスの拳闘家が放つ鉄拳は、もはや生半可な銃弾よりも強い衝撃。天使はその一発で意識を刈り取られ、硬い地面に頭部を叩きつけられ絶命していた。

青年は振り抜いた拳をそのままの勢いで、裏拳のようにもう一体の天使に向かい右腕を射出する様に振るう。その刹那右腕の籠手から生み出される魔方陣。その方陣から這い出るように、黄色い腕が天使の頭を振りぬいたのだ。その腕の長さ、実に3m……。異常なまでに発達した筋力が天使の頭を砕き、天使をこの世から抹殺する。

許斐友春の装着している籠手……。籠手型COMP……。内封するは悪魔擬似召喚プログラム。未完成のプログラムである。しかしその能力は高く、ほぼ完璧に悪魔を現世に召喚する事ができる。^{スペック}しかし、悪魔を形成する為に必要な『マグネタイト』の放出が上手く行かず、友春の腕から黄色い異腕が生えるように、一部分しか召喚出来ないというデメリットを所持する。

しかし、そのデメリット・・・許斐友春にとってはメリットではない。悪魔を自身の腕のように使えるという特典・・・常人ならば使いこなせないだろうが、プログラム内部に居た悪魔が友春の力を助長する。

妖怪『^{テナガ}手長』。異常にまで伸びた手が特徴的な古来より現存する妖怪。その力を借りる事により、『拳闘』と『悪魔召喚』を使いこなす強力な召喚師となっていた。この力を使い、今まで襲撃してきたメシア教徒達を、幾人病院送りにしているか。・・・そして何人の死人を目に焼き付けたか。

「・・・」

その様子を見ていたアークエンゼルは剣を構えなおす。目の前の敵を『強敵』と認識しなおす。友春も意識を細め、目の前の相手に集中する。・・・この三日間で始めて会う天使の形。そう、友春にとってアークエンゼルと言う『種族』は初戦となる相手だった。

「なっ・・・ば・・・馬鹿な！そんな馬鹿な！てっ・・・天使だぞ！？人間じゃないんだ！それなのにっ！なんでやられるんだよ！」

緊迫した馬鹿げたセリフを放つ『馬鹿』の声を聞き流すアークエンゼル。青年はその声が聞こえていないかのように、ステップを打ち鳴らす。ブーツのコンクリを叩く音。その音を合図に・・・

「・・・ツハアア！」

翼を用いた突進。剣は振り上げられ、友春の頭上へと落ちる弧を描く！

友春はステップを瞬時にスウェイへと移行する。相手から放たれる怒気と殺意をすんでの所で交わす。そのままカウンターとして拳を喰らすが、天使は上空へと飛び去る。

「・・・チイ・・・」

零れる舌打ち。悔しさを表すそれは天使に油断を抱かせる。上空へと逃げた余裕からか、顔には見下す笑みが浮かぶ。その笑顔のまま剣を天に掲げ、一気に急降下。その瞬間を友春は見逃さない。天使が突き刺す地面に一つの魔法陣・・・！

（魔法か！？テナガ！一体あれは・・・！）

「地変魔法・・・」

「M a h a - M a g N a s ! ! !」

テナガの声とアークエンゼルの声が同時に路地裏に響く。突き刺された剣より走るは、硬いコンクリートの中を駆け巡る一筋の魔力の塊。だが、それは許斐友春には見えない。

「テナガア！任せる！」

だからこそ、己の右手に住まう異腕に総てを託す。自身の右腕を突き出し、テナガに総てを任せる動き。

「ククツ・・・無茶を言う・・・が、任せておけ・・・！兄弟！」

テナガの腕が縦横無尽に天へと登ったかと思うと次の瞬間、大地

へと拳を叩きつけめり込ませた。コンクリートの歪みは走る魔力の路を書き換える……！

・・・ツゴ・・・シャアアア！

大地の割れる音、そして友春の数センチ横に出来た大きなドリル状の錐。それは友春を突き刺さんと大地より突き出たもの。

(・・・なるほどな……。これだから・・・)

「これだから止めらんねえぜ……！悪魔との戦いはよお！」

突き刺した剣より走った魔法を破られ、呆然とするアークエンゼル。しかしそんな意思を無視するように友春は接近する。天使は焦り、剣を引き抜く。定まらない思慮の中、手に持つ白銀の剣だけは構えを自然に取れた。

友春は数歩置いた場所で右腕を振りかぶる。その姿を見てまるで弓を射るようなイメージを、アークエンゼルは不本意にも抱いてしまふ。

「受け取りやがれええ！」

そのバズーカのような衝撃はアークエンゼルに向かって一直線に飛来する。風を切り、空気を割り、天使の頭を砕き割る……！

そう友春が思った瞬間、吐気のする世界が目に見てしまう。

天使は迫り来る脅威から逃れる様に定まらない視界を動かし……後ろで脅える召喚主を見つけた。

（・・・なんと・・・無様な生物・・・こんな奴に・・・私は・・・）

思考の中に入り込んだ邪念は天使の体突き動かした。

右手には構えた剣・・・左手には・・・召喚主の頭部が握られ・・・
・迫り来る衝撃に・・・捧げた。

「え？」

そんなメシア召喚師の声が聞こえたのか・・・聞こえなかったのか・・・。黄色い異腕は留まらず・・・召喚師の頭蓋骨を砕き、アークエンゼルの左手を粉々に破壊した。

「- - - - -！！ハッ・・・アアアアア！？」

苦悶の声をあげ、剣を持った右手を左手に添える。潰れた左手からは青白い粒子が天へと帰っていく。絶望と慟哭が入り混じる声中、そんな絶命の声すら上げられなかった哀れな人間の顔なし死体が転がっていた。

「・・・て・・・てめえ・・・！」

少しの動揺が友春を駆け抜ける。何故なら・・・

（・・・初めて・・・人を・・・殺っちまった・・・）

人を殺したのは初めてだった。悪魔達を殺した事は幾度と無くあるし、自身と同じ種族『人間』の死ならば嫌になるほど見た。しか

し・・・許斐友春が人を殺したのは、これが初めてだった。

吐気が襲う中、冷静な思考もあることに気付く。思考は目の前のアークエンゼルに止めを刺すことを促す。頭痛と吐気が襲う中眼光鋭く苦悶をあげる天使を睨みつける・・・が、その足元に転がる死体を見てその頭痛と吐気は収まった。

（なるほどな・・・案外・・・俺・・・後悔してねえな）

この世界に入り込んだ瞬間から、3人の顔も知らない若者達の屍を見た時から、この箒手型COMPを拾ったその時から・・・こうなる時はいずれ来ると・・・心の底で思っていた。

先程の吐気はそんな決意をはぐくみ取れていなかった、自身への責めから来る頭痛だったのか。自らが下した死体を見て、納得してしまった友春は・・・目の前の天使に対して拳闘スタイルを取る。

無言で駆け抜け、天使に肉迫する。そして、

「クアアアア！『マグ タ ト』が足りない！イル・・・ホッ・・・ホシイ！」

天使は逃げるように飛び去っていった。意味不明な言葉を吐きながら、路地裏の中を飛び去っていた。友春を残し。

「・・・」

その天使を諦めにも似た表情で見送る。今までで一番疲れた戦闘は友春から戦意を奪っていた。

「・・・兄弟。天使の剣につけられたのか？頬に刀傷があるぞ」

そう言われて初めて気付く。左手を頬に近づけると確かな滑り。赤を連想させる血液は確かに流れていた。

（悪魔も武器を使う・・・か・・・。何かしらの対策は必要かな・・・）

「兄弟・・・。人を殺した事に戸惑っているか？同族を死なせた事に違和感を持っているか？」

そんなテナガの言葉。

殺人・・・。そんな言葉が深く押し掛かってくるはずなのに、友春は次の戦いの事を考えていた。なんとも自分には情と言うものが無いのだなと思うてしまう。

「いや・・・大丈夫だテナガ。俺は後悔していない。この世界は・・・殺るか、殺られるかだ・・・！」

そう言い、許斐友春は死体をその場に残し・・・路地裏から続く闇の世界へと歩いていった。

二節 慙愧悔恨 ・ 帰郷と望郷 ・ （後書き）

Key Word

>裏切り<

無論、悪魔達にも忠誠心というものがある。つまり、召喚者達に対して

絶対服従を誓っているわけではないのだ。

彼らは己の召喚者があまりにも不甲斐無い場合は、即見限る。

>悪魔と天使<

天使の事を度々『悪魔』と明記しているがこれは誤字やタイプミスではなく

戦っている人間からすれば『悪魔も天使も変わらない』ので悪魔と表記している。

が、メシア教団のみこれを分別した言い方をする。

他は統合している。

もしよろしければ感想とかお願いします・・・。

作者の励みになりまくるので・・・>（―――）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081b/>

堕典・女神転生

2010年10月9日01時05分発行